

テイルズオブシンフォニア
実弥島巧
原作/バンダイナムコゲームス
TALES OF SYMPHONIA Kratos Of The Expiation
贖罪のクラトス
電撃文庫
TALES OF SYMPHONIA
テイルズ オブ シンフォニア

テイルズ オブ シンフォニア

贖罪のクラトス

かつて勇者ミトスは、聖地カーラーンにて古代大戦を終結させることに成功した。その結果、世界はシルヴァラントとテセアラの２つに分かたれた。だがそれは、一方が繁栄すればもう一方が衰退するという因果関係の上に成り立っており、大戦終結から四千年を経た現在、シルヴァラントは命の源である〝マナ〟の枯渇により、滅びの道を辿っていた。そんななか、シルヴァラントに降り立ったクラトスは思わぬ人物と再会を果たす――!!

ゲームのキーマンだったクラトスを主人公に、彼の視点から描かれる外伝小説。その秘めたる胸の内が明らかになる!!

カバーイラスト/ufotable

テイルズ オブ シンフォニア

贖罪のクラトス

実弥島巧

電撃文庫2671


TALES OF SYMPHONIA®
テイルズ オブ シンフォニア
TALES OF SYMPHONIA
Kratos Of The Expiation
実弥島巧
原作/バンダイナムコゲームス
贖罪のクラトス

テイルズオブシンフォニア 贖罪のクラトス

登場人物

TALES OF SYMPHONIA

クラトス・アウリオン

本作の主人公。旅の傭兵として、コレットの旅の護衛に雇われた凄腕の剣士。その正体は、四千年前の四代英雄にして天の機関クルシスの四大天使の１人である。

ユグドラシル

クルシスの最高指導者で、四大天使の１人。かつての古代大戦を終結させた「勇者ミトス」その人であり、世界を２つ分けた、現在のシステムを作り出した張本人。

ロイド・アーヴィング

イセリア村に住む少年。学校の成績はあまりよくないが、頭の回転が速く、とっさの判断に優れている。ある事情により、コレットの世界再生の旅に同行する。



ユアン・カーフェイ

反クルシスの組織レネゲードの首領。四代英雄かつ四大天使の１人。

マーテル・ユグドラシル

ユグドラシルの姉。人間たちの裏切りにより四千年前に命を落とす。

ジーニアス・セイジ

ロイドとコレットの親友。村一番の頭脳の持ち主で魔術の使い手。

リフィル・セイジ

ジーニアスの姉。村唯一の教師で周囲から「先生」と呼ばれている。

コレット・ブルーネル

シルヴァラントの神子。世界再生の役目を背負い故郷を旅立つ。

ゼロス・ワイルダー

テセアラの神子。クルシスのスパイとしてロイド一行に加わる。

テイルズオブシンフォニア

贖罪のクラトス

TALES OF SYMPHONIA Kratos Of The Expiation

実弥島巧
原作/バンダイナムコゲームス

テイルズオブシンフォニア 贖罪のクラトス

TALES OF SYMPHONIA
Kratos Of The Expiation

Contents

本文イラスト／ユキヤ　デザイン／西村弘美

序章

ロイド・アーヴィング、と少年は名乗った。

彼と出会ったのは、イセリアという辺境の小さな村だった。シルヴァラント王朝の支配下にあった頃はマーテル教の総本山として大いに栄えていたが、現在では総本山という看板だけが残った寒村になっている。

原因は様々だ。シルヴァラント王朝の滅亡はもとより、万物を構成するマナの減少とそれに伴う自然環境の変化は、作物の不作を生み、人々に貧困（ひんこん）を招いた。イセリアだけではない。かつて王国と呼ばれたシルヴァラントの地全体が、緩（ゆる）やかな滅びの道を歩んでいた。

その流れに拍車をかけていたのがディザイアンと呼ばれる集団だ。主にハーフエルフで構成されていると噂（うわさ）される彼らは、各地から人間をさらい、人間牧場と呼ばれる施設へ送り込んでいた。そこで何が行われているのか人々は知るよしもなかったが、彼らが現れたときがマーテル教における世界の終末であることは広く知られていた。

そう、シルヴァラントは滅亡しようとしていた。そして救済がもたらされる唯一（ゆいいつ）の約束の土地がイセリアなのであった。イセリアでは世界の希望が育てられていたのである。

遠くから草を踏みしめる足音が聞こえてきた。人の聴覚では捉えきれないほどの小さな音だ。

クラトス・アウリオンはゆっくりと目を開けた。森の奥、遠い遠い先の葉陰が揺れている。

――来るか、ロイド。

その名を、姿を思うと、クラトスは不思議と満ち足りた気分になった。これで終わるのだという安堵（あんど）。そして奇妙な高揚感。一度は失った希望が、今一際大きくなって戻ろうとしている。

だが本当に重要なのはこの後だ。

足音が大きくなった。森に住む生き物たちが一斉に反応して、この場から逃げていく。彼らにはわかっているのだ。この清浄な森で、これから何が起こるのか。

複数の人影が見えた瞬間、場の空気が張り詰めた。年齢も性別も様々な八人の集団が硬い表情でこちらに近づいている。先頭を歩いているのはロイドだ。

さほど珍しくもないその名前は、しかしクラトスにとって重い意味を持っている。アーヴィングは妻であった女性の姓。そしてロイドは、失った我が子の名前だ。

ロイドと彼の仲間は、自分たちの信じる『救済』を行おうとしている。

救済は行われたのか。

否。全てはまだ終わりを迎えてはいない。

クラトスはロイドたちの前に歩み出た。彼らの望む救済を完成させるために。

第一章

1

この世界は二つの世界に分けられていると聞いて、果たしてどれだけの人間が理解するだろうか。おとぎ話だと人は笑うだろう。大地は丸く、どこにも亀裂(きれつ)など存在しない。それとも夜空に浮かぶあの月に別の世界があるとでも言うのかと。

だがおとぎ話にも寓喩(ぐうゆ)が含まれているものだ。

確かに世界は二つに分けられている。次元を切り裂き、位相をずらすことで、二つに分けられた世界は、隣(となり)同士に存在していながら、その姿も見えず触れることもできない。だが確かに互いにとってのもう一つの世界は存在しているのだ。一つは便宜上(べんぎじょう)シルヴァラントと呼ばれている。かつて存在していたシルヴァラント王国とその同盟国の領土が主となる世界だ。もう一つはテセアラ。こちらもテセアラ王国とその同盟国の領土が主となっている。

「この二つの世界と我らの住む星デリス・カーラーン、これらを支配しておられるのが、指導者ユグドラシル様である」

天使アドルが新たに天使として目覚めた同志たちに、天の機関クルシスの成り立ちを語って

いる。モニター越しにその様子を見ていたクラトスは、疲れたように頭を振った。
今まで何度も繰り返されてきた儀式だ。ここデリス・カーラーンでは四千年もの間、天使と呼ばれる生物が生み出されている。いや――生物という言葉は似つかわしくないかもしれない。天使とは無機生命体へと変異した人を指す言葉だから。
数は決して多くはない。人を天使へ変えるために必要なハイエクスフィアという素材が足りないのだ。ハイエクスフィアは貴重であるが故に、選ばれた一部の者が優先的に天使になる。それから天使としての再教育を経て、天の機関クルシスを支える戦士となるのだ。
クラトスもそういった天使の一人だ。だがその格は他の天使の追従を許さない。彼は四大天使と呼ばれる最高幹部の一人で、クルシスを通じて世界を支配するミトス・ユグドラシルの直属の部下なのである。
「我々はマーテル教を通じて、シルヴァラント・テセアラ両国の人を導く使命を負っている。それはハーフエルフのみならず、エルフや人間も同じだ。彼らを正しく導き、無機生命体による千年王国を実現するためにも、諸君らの働きには大いに期待するところである」
アドルの言葉に、感銘を受けた様子の者はいなかった。無機生命体との融合を済ませた者――つまり天使化した者は、当初感情表現が極度に抑えられる。それを制御できるようになるにはかなりの能力と時間が必要だ。永遠に感情が戻らぬ者も多い。
「クラトス様」

　立体映像装置に伝令天使が現れた。彼の背中には白い翼が生えている。これは彼が未熟な天使であることを示していた。天使化すると人体に様々な変化が訪れる。その一つが体内マナの放出による飛行能力だ。必要に応じて羽を出し、空を飛ぶことができる。しかしその飛行形態を長く続けた結果、マナの放出部分すら身体の一部として物質化して固着してしまうケースがある。本来なら天使化によって身体のほとんどの機能を自らの意志で調整できるようになるのだが、大抵の者はその調整を上手（うま）く行うことができない。クルシスの天使の多くは彼のように翼が固着していた。
「どうした」
「ユグドラシル様のお召しにございます」
「――分かった」
　伝令天使は一礼して消えた。クラトスはモニターの映像を切ると、執務室を後にした。
　虚空（こくう）に浮かぶ玉座の間。そこはクルシスの天使たちが住むウィルガイアよりさらに奥、デリス・カーラーンの中心部であるヴェントヘイムにある。世界を二つに切り分け、支配する指導者ユグドラシルの居城だ。
　玉座の間に一歩足を踏み入れると、ユグドラシルは玉座に座り肘掛（ひじか）けに肘をついて、悠然（ゆうぜん）と微笑（ほほえ）んだ。

「来たか、クラトス……」
気怠げな声はあのときから変わらない。七十年前の離反のときから。だが緑の瞳に宿る光は常とは違って見えた。
「クラトス・アウリオン参上致しました」
クラトスは玉座の前まで進み出て、片膝をつく。形式張ったこのやりとりは、クラトスが彼に屈服した十五年前から続いている。
「そんな堅い挨拶はやめよう、クラトス。今日は昔話がしたい」
そう言うとクラトスの——そして事実上この世界の支配者であるユグドラシルが、おもむろに立ち上がった。
「覚えているか、クラトス。私たちが出会ったときのことを」
クラトスが頷くと、支配者たる青年はぐにゃりとその像を歪めた。長身はみるみるうちに小さくなり、手足の輪郭が幼くなる。
「あれはテセアラ王国の王都だった。私はまだ恐れを知らない子供で、人々の善意を信じていた。世界はまだ二つに分けられておらず、それ故に、一つの地上で二つの王国が醜い争いを続けていた」
今やクラトスの前にいるのは、麗しい青年支配者ではなかった。十四歳の小柄な少年の姿がそこにはあった。

この変化を見る度に、クラトスは恐怖する。ユグドラシルに対してではない。このような変化を可能にした無機生命体ハイエクスフィアに対してだ。

かつて古代のエルフ族がデリス・カーラーンから地上に移住した際、マナを生み出す大樹カーラーンをはじめ、様々な技術や魔術が持ち込まれた。その中の一つに『エクスフィア』という物質がある。しかし五千年前の段階で、既に何のために作られたのか、どのようにして使うのかといった知識は失われていた。ただある種の高度な生命維持装置であろうとの推察はなされている。それ故に、使用者を守り、またその能力を最大限にまで高めることが可能なのだと。

この特性は、五千年前に起こったカーラーン大戦の際に、戦闘兵器として利用されることになった。

当時、世界はシルヴァラントとテセアラの間で、断続的ではあるが激しい争いを繰り広げていた。戦いを有利に進めようと様々な魔科学の兵器が開発される中、それまで兵器の部品として使われていたエクスフィアも新たな使い道が研究された。そして兵士に装備させることで天使化させ、より強力な兵士を生み出すハイエクスフィアが誕生したのである。ハイエクスフィアを装備すると天使体と呼ばれる戦闘に特化した身体になり、聴覚、視覚、痛覚等の感覚を自ら必要に応じて制御することができた。そしてもっとも親和性の高い者になると、自らの肉体時間を自由に操るまでの力を持つようになった。

自らの時間を操る——それが恐怖でなくてなんだろうか。人は神の領域に手を伸ばしたこと

になるのだ。目の前の無垢な笑顔を持つ少年も、神の領域を侵した存在であった。
「……どうした、クラトス？」
ユグドラシルはクラトスの苦痛に歪む顔を見て小首を傾げた。
「今さら私の変化に驚くこともないだろう？　それともこの姿はつらいか？」
クラトスは黙って俯いた。
つらくないと言えば嘘になる。クラトスの記憶にある仲間ミトス・ユグドラシルは、この少年の姿だった。クラトスはどこかで区別していたのだ。少年のミトスは世界を救うために必死で戦った勇者であり、青年のミトスは絶望から人であることをやめることで世界を救おうとする偽神であると。
詭弁だ。それはわかっている。しかしそうすることでしかクラトスの心の平穏は保てなかった。自らの過ちがあまりに大きすぎるために。
「そう……つらいんだ。それならクラトスはもうボクを裏切ったりしないね」
懐かしい口調に、クラトスの心が激しく痛んだ。
「あのとき――テセアラ王国の騎士団長としての地位を捨てて、ボクたちの仲間になってくれたとき、クラトスは言ってくれたものね。ボクたちハーフエルフが安心して住める場所を作る、そのための協力は惜しまないって」
「……はい」

「わかってるよね。ボクが作り上げようとしている千年王国こそが、ハーフエルフに対する差別をなくして、誰もが安心して暮らせる理想郷だって」
うつむき、喉の奥で答えた言葉は、果たして声になったかどうか。だがミトスはさして気にしていないようだった。
「もうすぐシルヴァラントの神子が神託を受ける」
クラトスはおもむろに顔を上げた。ユグドラシルは天使のように——確かに天使体ではあるが——微笑んだ。
「次の再生の神子は、純度イレブンナインだよ。神子スピリチュアのとき以上だ。成功するよ。今度こそ姉さまが復活する」
ユグドラシルの姉、マーテル・ユグドラシルの復活——それは大きな意味を持っていた。
今世界が二つに分けられているのは、全てマーテルのためなのだ。四千年前の大きな過ちが全てを変えてしまった。
エルフが大樹カーラーンを持ち込んだことで、この世界は全ての存在がマナによって生かされる世界へと変貌した。マナの力は魔術の源となり、魔科学の源となり、やがてはマナそのものの乱用へと繋がっていった。マナは消費され続け、マナを無限に生み出す筈の大樹カーラーンすらも枯らしてしまうことになった。
「ボクらは大樹カーラーンを甦らせるために戦った。そして大樹の種子である大いなる実りを

手に入れて、もうすぐ新たな大樹が芽吹くところまでこぎ着けた。それなのに、人間はマナを独占しようとして、大いなる実りを守る姉様を殺した……」

ミトスの穏やかな顔が、憎悪に歪む。

「それでもボクは奴らウジ虫を生かしてやってる。それどころか千年王国へ招き入れようとしてやってる。クラトス、ボクは最大限譲歩してきた。姉様は大いなる実りと融合してる。今大いなる実りは姉様そのものだ。本当なら大いなる実りのマナを人間どもに分けてやることすら汚らわしい。でも大いなる実りから滲み出るマナを、二つの世界が分け合えるシステムを作ってやった」

「その結果、片方の世界は滅びに向かい、もう片方の世界は繁栄を謳歌します」

「だから神子がいるんでしょう。神子が世界再生をして、マナの流れを逆転させる。繁栄世界は衰退世界へ、衰退世界は繁栄世界へ。砂時計と同じさ。限りあるマナの消費を抑えるにはこれしかない。クラトスも納得していたよね」

「それは一時しのぎの――」

「そう。一時しのぎだよ。約束だったよね。姉さまが復活したら、世界をあるべき姿に戻すって。姉さまが新しい身体に入れば、もう大いなる実りを守る必要はない。世界を一つにして大樹カーラーンを芽吹かせればいい。そして地上には差別のない千年王国が誕生する……」

ミトスは少年の姿のまま、玉座に腰を下ろした。小さな身体に大きすぎる玉座。その違和感

が妙に悲しい。

「今度の世界再生は失敗するわけにはいかないんだ。失敗すれば、姉さまの魂を受け入れる器が壊れてしまう。また長い時間をかけて器を作らなければならない。そうしたらクラトスが望んでいる世界の統合もずっとずっと後になるよ。だから誰にも邪魔はさせない。ネズミにもね」

「レネゲード、ですか」

「そう。奴らディザイアンの姿をカモフラージュにして、色々と動き回っているみたい。知っているでしょう？」

「各地の人間牧場で製造されたエクスフィアを回収しているとの報告は受けています」

「手ぬるいね、クラトス。泥棒ネズミぐらい始末してくれないと」

「……申し訳ありません」

「まあ、いいんだ。奴らが何をしようと、ボクにとっては何の影響もない。ただ神子を殺されるのだけは困る。だから今回はクラトスに神子の護衛を頼みたいんだ。神子を守り、導いて、天使体になじむための試練を上手く進めて欲しい」

「しかし私はシルヴァラントの管理官です。世界再生の旅が始まるのなら、プロネーマに命じてディザイアンを動かさねばなりません」

「その役目はボクが引き受ける。今回は神子の命が最優先だからね。それにわかってる筈だよ。

ボクの命令に従うことが、結局はクラトスの望みも叶(かな)えるんだってこと」
世界をあるべき姿に戻す——そのためにはマーテル復活を願うミトスの希望を叶えるのがもっとも確実な道であった。いや、その他の道を選ぶ気力は、もはや失われていた。クラトスにあらがう術はなかった。

2

クラトスが地上に降臨するのは十五年ぶりのことだ。
かつてクラトスは天の機関クルシスを裏切り、野に下ったことがある。その後ユグドラシルの元へ戻ることになったが、降臨の自由は奪われたままだった。
救いの塔から北西にある森深い土地——その海岸線を背にしばらく歩くと、小さな山の麓(ふもと)に村が見えてくる。マーテル教の総本山があるイセリア村だ。ここがクラトスの目指すべき場所であった。
今やイセリア村の動向は世界中から注目されている。世界を滅亡から救うといわれる世界再生の神子が、この村に住んでいるためだ。神子は十六歳の誕生日に、天の機関クルシスの天使から神託を受け、世界を再生するための旅に出る。その神託を受ける日がまさに今日この日なのであった。

世界再生という単語を思い浮かべた瞬間、クラトスの胸に苦い思いが去来した。だがクラトスにはどうすることもできない。彼の抵抗の術は完全に失われていた。それでいいのだと思う。どのような形であれ、世界が真の意味で再生されるなら――

クラトスが左手に見える高台へと視線を向けた瞬間、人々の争う声が耳に届いた。クラトスの聴覚機能は強化されている。可聴域は広げられ、人間には聞こえない距離の物音も正確に聞き分ける。視覚機能もまた同様だ。意識の切り替えによって、様々な距離の情景や構成物質を分析できる。彼の目と耳は高台で激しい戦闘が行われていることを伝えていた。

クラトスはフッと軽く息を吐いた。直後、彼の背中から青白い光が放射状に広がった。それは陽炎（かげろう）のように揺らめいている。体内のマナを循環させて放射し、斥力と推進力を生み出すことで飛行能力を与えるマナの羽だ。

クラトスの身体はふわりと浮かび、高台近くへ空を斬るように直行した。眼下には複数の死体が見える。皆、マーテル教会の祭司のようだ。神託の日には似つかわしくない事件が発生しているらしい。

高台の上にはマーテル教会の聖堂がある。現在はそこが争いの中心となっているようだ。クラトスは高台下に音もなく降りると、羽を隠し、聖堂への階段を駆け上がった。

聖堂前には侵入者らしき見覚えのある集団と、彼らに戦いを挑む少年たちの姿があった。形勢は明らかに少年たちが不利だ。

「くっ、強い！　……俺じゃかなわないのか!?」

少年の一人が焦り、小さな隙を見せる。そこを敵は見逃さなかった。巨漢の相手は振り回していた鉄球を、膝をついた少年の上に振り下ろした。

　クラトスは鉄球と少年の間に滑り込み、鞘ごと抜いた剣で鉄球を突き上げた。さらに剣を一閃して鎖を断ち切り、攻撃を無効化する。

「え？　あんたは……？」

「——下がっていろ」

　クラトスは少年を制し、一気に敵との距離を詰めた。相手の懐に飛び込み、剣の切っ先を喉元へ突きつける。

「——ネズミだな？」

「ぬぅ……」

　巨漢の男は動きを止め、ぎこちなく視線を上官であろう男へ向けた。それで十分であった。

　クラトスは一気に剣を突き上げ、相手の身体を蹴り飛ばしながら剣をひねり抜く。反動を利用してバックステップすると、敵の鮮血が先ほどまでクラトスがいた場所に雨の如く降り注いだ。

「まさか貴様が現れるとはな」血の海の向こうで敵の上官がこちらを睨んでいる。「……一時撤退するぞ！」

　号令がかかると敵の動きは素早かった。残り数名の生き残りは、仲間の亡骸を担ぎ上げ、手

際よく高台から駆け下りていく。クラトスは剣についた血を振り払うと、鞘に収めた。
なるほど、事前に聞いていた通りではある。今回神託を受ける神子の資質は完璧(かんぺき)に近い。故にネズミも動くだろうと。
敵の退散で、気落ちしていた子供たちもにわかに活気づいてきたようだ。十代特有の騒がしさを背中で聞き流していると、老婆がこちらに近づいてきた。そのたたずまいには気品が感じられる。ただの老人ではないことは一目で理解できた。
「神子を救っていただき、お礼の言葉もありませぬ」
老婆の言葉に、クラトスは改めて子供たちを振り返った。銀髪の子供は十代前半と言ったところか。戦いの際、魔術を使っていたところを見るとエルフかハーフエルフだが、おそらく後者だろう。赤い服の少年は——妙な違和感を覚えたものの、取り立ててどうということもない。それにどちらも男だ。再生の神子は女性と決まっている。
「……なるほど。この少女が今回の神子なのだな」
クラトスは二人の友人にかばわれている金髪の少女へ視線を落とした。少女はクラトスの視線を受けると、少し驚いたように目を見開き、それから無邪気に微笑んだ。まさか自らの運命を知らないのだろうか。クラトスが眉(まゆ)を寄せると、少女ははっとした顔になった。
「そうだ！　神託を受けないと」少女は老婆の元へ駆け寄り、凛々(りり)しい声で続けた。「お祖母様。私はこれから試練を受けてまいります」

「試練って何だ？」

赤い服の少年が問いかける。

「魔物のことだろう。聖堂の中から邪悪な気配がする」

嘘ではない。本来なら聖域である筈の聖堂から、魔物が蠢(うごめ)く気配がする。今回の降臨でクラトスは傭兵(ようへい)を騙(かた)ることにしていたから、この程度はわかって然(しか)るべきだ。それに今後の展開を考えれば、ある程度のアピールは必要だった。

案の定、老婆はこちらに感心した視線を向けた。

「その通りじゃ。神子は天からの審判を受ける。しかし護衛につく筈の祭司たちはディザイアンの襲撃で倒れてしまったのじゃ」

ディザイアンという単語を聞いて、クラトスはわずかに唇(くちびる)を歪めた。なるほど、ネズミたちは上手く正体を隠しているようだ。だが祭司を倒したところで、肝心の神子を仕留められなければ何の意味もない。相変わらず詰めが甘いのは、彼らのリーダーの影響だろうとクラトスは思った。

「それなら俺がコレットの護衛を引き受けるよ」

突然赤い服の少年がクラトスと老婆の間に割り込んできた。コレットというのが神子の名前らしい。無茶なことを言うとクラトスは呆れた。おそらくは我流であろうが、二振りの剣を振り回す姿はとても見ていられるものではなかった。子供というものは、ときに過剰な自信を持

つものだ。

「ロイドか。おまえでは心許ないのぅ」

老婆が呟いた瞬間、クラトスは自身の身体がびくりと反応するのを抑えられなかった。衝動のままロイドを振り返り、改めてまじまじと見つめる。

クラトスの脳裏には、幼い頃失った息子の姿が甦っていた。忘れ去ろうとしていた思い出が、記憶の扉の向こうから滲み出す。

十五年前、彼には家族がいた。最愛の妻アンナと彼女との間に生まれた息子ロイドだ。

だが、彼の息子は死んだ。死んだ筈であった。当時三歳であったから、生きていれば確かに目の前の少年と同じぐらいの年頃だろうが……。

「おまえはロイドというのか」

「そうだけど……。人の名前を尋ねる前に、まず自分も名乗ったらどうだ」

ロイドがこちらを睨み上げる。

十五年も経っているのだ。わかるわけがない。子供の成長は早い。幼い頃とは顔も変わってしまっている。三歳ではロイドのほうにも記憶は残っていないだろう。いやそれ以前に、息子のロイドであるという確証もない。

クラトスはロイドの視線から逃れるように老婆へ向き直った。今は任務を優先させるときだ。

「……私はクラトス。傭兵だ。金さえ用意してもらえるなら神子の護衛を引き受けよう」

老婆はため息をついて頷いた。
「……背に腹は代えられんな。お願いしよう」
「契約成立だな」
クラトスも頷く。これでいい。今は神子を導く。それがクラトスにできる最善のことだ。クラトスは神子コレットを伴って歩き出した。
「ま、待てよ！　俺も行く！」
ロイドが追いすがってくる。
「ロイド。おまえは足手まといだ。大人しくここで待っていろ」
クラトスが一蹴すると、ロイドの目に怒りの色が滲んだ。
「何だと……」
「聞こえなかったか？　足手まといだ。帰れ」
なおも何事かを言いかけたロイドを制するように、神子コレットが声をかけてきた。
「あのぉ、傭兵さん。ロイドも連れていってくれませんか」
「しかし……」
「お願いです。私、ロイドがいないと不安です」
言葉とは裏腹に微笑みを浮かべているコレットに、クラトスはため息をついた。おそらく神子はこうしていつもロイドという少年を庇ってきたのだろう。それに聖堂に集められている魔

物などたいした敵ではない。
「……勝手にしろ」
クラトスは言い捨てると、聖堂に向かって歩き出した。まずは旅立ちの試練をこなさなければ世界再生は始まらない。道中レネゲードの妨害もあるだろう。最初の試練ぐらいは手早く済ませてしまいたい。
「……行くぞ、ジーニアス！」
「ええっ！　ボクも行くの？」
「あったりまえだろ」
クラトスの背後でロイドと銀髪の少年——ジーニアスの言い争いが聞こえた。
クラトスは再びため息を漏らした。この騒がしさは久しく忘れていた記憶を呼び起こさせる。
「子供の遠足ではないのだがな」
心地の良い懐かしさを隠しつつ、クラトスは聖堂の中へ足を踏み入れた。

3

天の機関クルシスの本拠地があるデリス・カーラーンは、巨大な彗星だ。彗星の核に居住区域ウィルガイアとミトスの居城であるヴェントヘイムを建設した。一部は古代のエルフたちが

残した施設を流用していると聞くが、詳しいことはわからない。天使階級でもごく一部しかその情報を知らないというから、ディザイアン階級であるプロネーマにはなおさら知りようがなかった。

彗星などという巨大な質量の天体を、この大地の上空に留めるなど、本来ならあり得ない技術だ。これを可能にしているのは、精霊オリジンがユグドラシルに託したエターナルソードという剣の力だという。時間と空間とを操ることができるその剣で、ユグドラシルは世界を二つに切り分け、デリス・カーラーンを空に留めたのだ。偉大な方だとプロネーマは尊敬していた。

尊敬――という言葉だけでは、彼女の気持ちを表すのは難しいかもしれない。敬愛あるいは思慕。恐れ多いとは思いながらも、彼女はユグドラシルに惹かれていた。

ハーフエルフは異端の存在だ。優れた能力を持つが故に、人間からは恐れられ、人間の血を有するが故に、エルフから忌み嫌われる。この地上に存在する『人』と呼ばれる種族の中で、ハーフエルフだけが、誰からも愛されず、狭間の者として差別されている。

プロネーマもそうした差別を受けてきた。嘲笑され、罵倒され、なまじ能力が高いために、戦いの道具として駆り出された。ユグドラシルが救い出していなければ、彼女は戦場で乱雑に扱われ、そのまま命を落としていたことだろう。プロネーマにとってユグドラシルは命の恩人であり、ハーフエルフのための世界を作ろうとする英雄であった。彼のためなら何でもできた。必要とされることが嬉しかった。

プロネーマは今、ディザイアン階級を統(す)べる五聖刃(ごせいじん)の長として働いている。

天の機関クルシスは二つの階級に分けられている。ハイエクスフィアを与えられた天使階級と、ハイエクスフィアより力の劣るエクスフィアを与えられたディザイアン階級だ。ディザイアン階級は人々を弾圧し恐怖をあおる。天使階級はマーテル教を通じて、救いと慰(なぐさ)めを与える。こうして二つの顔を使い分けて人心を掌握(しょうあく)しているのだ。

ディザイアン階級には他にもたくさんの仕事が与えられている。その活動地域は常に衰退している世界と定められていた。そうすることで、衰退する世界の人間は世界再生を望み、繁栄する世界の人間は衰退を恐れるようになる。どちらもマーテル教にすがりつくという仕組みだ。

つい先ほど、現在の衰退世界であるシルヴァラントに世界再生の始まりを告げる救いの塔が出現した。出現した——というのは、語弊(ごへい)があるかもしれない。救いの塔は常にある。だが衰退世界の人間には見えないようシールドが張られているのだ。二つに切り分けられた世界が、完全に分離して次元の狭間に飲み込まれないよう、世界には二カ所だけ接触点が残されている。その一つが救いの塔のある場所だ。救いの塔は最上階がデリス・カーラーンと繋がっており、天使階級やディザイアン階級が連絡を取り合うためにも使われている。

救いの塔が見えるようになったということは、シルヴァラントの再生の神子が、マーテルの器となるための旅を始めるということだ。プロネーマはディザイアン階級の動きを取りまとめるため、ウィルガイアにいる管理官と会議を行う必要があった。これは再生の神子が旅立つ度

に行われてきたことだが、プロネーマにとってみれば、ユグドラシルの住む場所に近づける心浮き立つ時間でもあった。

プロネーマは救いの塔の内部にある転送装置からウィルガイアに移動した。しかし常ならば既（すで）に控えている筈の伝令天使の姿がない。

「わらわがクラトス様の下を訪れることは伝わっていたと思うが」

プロネーマが転送装置を守るゲートキーパーに尋ねると、彼らの一人が口を開いた。

「クラトス様は降臨され、シルヴァラントにて地上任務についておられる。目通りは叶わぬものと心得よ」

「クラトス様がシルヴァラントに降臨……？」

プロネーマは自らの顔が怒りに歪むのを抑えきれなかった。

「どういうことじゃ。クラトス様は七十年前に我らを裏切った罪人ぞえ。ミ……ユグドラシル様のお慈悲で許されたとはいえ、降臨を許すなど」

「控えよ、プロネーマ」

「……わかっておる。ディザイアン階級が四大天使の方々に意見するなど、不敬極まりないこと」

それでもプロネーマには納得がいかなかった。シルヴァラントは、かつてクラトスが天の機関クルシスを裏切り、降臨した場所だ。裏切りを許されてデリス・カーラーンに戻ってから後

も、シルヴァラントへの降臨は禁じられていた。
元々プロネーマはクラトスを快く思ってはいない。クラトスは天使階級で唯一の人間なのだ。人間というだけで腹立たしいのに、クラトスはユグドラシルの信頼を知りながら、突然それを裏切った。千年王国計画に反旗を翻し、野に下ったのだ。その挙げ句やったことと言えば、女を作り、子を成し、のうのうと家族ごっこを繰り広げただけ。ただ現実から逃げたかったのだと言われても仕方あるまい。しかもそのママゴトのために受けたユグドラシルの傷は計り知れないものだった。彼の慟哭を間近で見たプロネーマは、クラトスという存在に対して強い疑いを抱くようになっていた。
「——プロネーマ。伝令天使だ」
ゲートキーパーに呼ばれて、プロネーマはウィルガイアの中心部を振り返った。虚ろな天使たちが音もなく飛び交う中、確かに伝令天使が滑るようにこちらへ進んでくる。だがそれはクラトスの伝令ではない。腕の腕章はユグドラシル専用の伝令の色であった。
「ユグドラシル様のお召し……!?」
思いがけない展開に、プロネーマは小さく息を吐いて、必死で乱れた心を落ち着かせる。
プロネーマの身分でユグドラシルに目通りできる機会はそう多くない。最後に姿を見られたのは、クラトスがおめおめとクルシスに戻った十五年前のことだ。
二度とあのときのような思いをユグドラシルにさせてはならない。そのためにできるだけの

ことをしなければ、とプロネーマは決意していた。

4

クラトスは神託を受けた神子を伴い、彼女の家を訪れていた。世界再生の旅に向けて、傭兵としての契約や、同行者の選定などを行う必要があったのだ。ダイニングテーブルにはこの付近の地図が広げられ、神子のコレット・ブルーネル、彼女の父のフランク・ブルーネル、彼女の祖母のファイドラ・ブルーネル、それに村長とクラトスが囲んでいる。

神子にとって最初の試練である神託は、予想通り簡単に終わった。クラトス自身、その目で見るのは初めてだったが、手順は話に聞いていた通りであった。神託天使が聖堂に降臨し、神子にクルシスの輝石(きせき)と呼ばれる宝珠を授ける。クルシスの輝石とはもちろんハイエクスフィアのことだ。これを装着させ、天使化への準備を整える。その後、再生の象徴である救いの塔を出現させ、神子の試練が行われる場所を伝令する——これが神託の流れであった。前回から引き続き神託天使に選ばれたレミエルは、そつなく仕事をこなしていたようだ。事前にクラトスのことを聞いていたらしく、こちらの存在に驚くこともなかった。ただ一つ、神子コレットをまるで自分の娘であるかのように告げていたのが気にかかったが、この謎はすぐに解けた。どうやらイセリアでは、神子の本当の父親は天使なのだという まことしやかな噂(うわさ)が広がっていた

のだ。レミエルはそれを利用したのだろう。
「それでは最初に向かうのは、やはり姉上のときと同じトリエットになるのじゃな」
老婆ファイドラが地図を睨(にら)みながら問いかけてきた。ファイドラは先代の再生の神子の妹なのだという。聖堂の前で初めてこの老婆に出会ったとき、クラトスが感じた気品はあながち間違ってはいなかった。彼女は先代の神子であった姉のアイトラによく似ている。アイトラの旅を管理したのもクラトスだ。彼女も人々の希望を背負って世界再生の旅に出て――そして死んだ。今から七十年前のことだ。
神子の一族は世界再生における様々な秘密を聞かされて育つ。それは外部に漏(も)らされることなく、親から子、子から孫へと伝えられていく。その多くが神子の生死に関わることだから、自然と彼ら一族は、普通の人々とは違う空気を纏(まと)っているように感じられるのだ。
「そうなろう。トリエットは砂漠の街だ。それなりの準備を進めておかねばなるまいな」
クラトスはイセリアからトリエットまでのルートを指し示す。
「今示したルートが比較的危険が少ない最短ルートだ。直進するとサンドワームの巣に当たってしまう」
「詳しいのですね」
フランクが感心してクラトスを見上げた。
「――傭兵としては当然の知識だ」

クラトスはフランクから視線をそらし、腕を組む。指先が腕の筋肉に触れ、クラトスは自分が思いの外、緊張していることに気付いた。イセリアからトリエットへの移動ルートを説明している内に、あの忌まわしい旅の記憶を甦らせてしまったからだろう。肉体的な疲労を感じさせない天使体といえども、精神的な疲労までは緩和できない。クラトスは酷い疲れを感じて、思わず目頭を押さえて俯いた。

トリエットからイセリアへの道は嫌と言うほどによく覚えている。人間牧場と不可侵契約を結んでいるというイセリアの村を目指し、親子三人で旅をした道だから。

「出発は明日ですよね」

コレットが尋ねた。その胸元にはハイエクスフィア――クルシスの輝石が輝いている。

「そうだな。早いほうがよかろう。早朝、日の出前には出発したい」

「そんなに早く、ですか……」

フランクが心配そうにコレットを見つめている。娘を死出の旅路に送り出すのだ。もっとゆっくり別れを惜しみたいのだろう。だがレネゲードの動きを考えると、悠長なことは言っていられないのも現実だ。クルシスの者は知らないことだが、レネゲードの指導者はクルシスの幹部であるユアン・カーフェイだ。クラトスはその事実を誰にも明かしたことはない。ユグドラシルもレネゲードに興味はないようだった。

ユアンはすぐにでもコレットを抹殺したいだろう。レネゲードはマーテル復活の阻止を目的

としているのだから、適合率の高い器であるコレットは危険な存在だ。だが今ユアンは、テセアラの管理官として世界再生の準備を指示しなくてはならない。少なくとも、ディザイアン五聖刃の長プロネーマとの打ち合わせが終わるまでは動けない筈だ。その間にトリエットを抜けたいというのがクラトスの思惑であった。クラトスの調べたところによれば、レネゲードの拠点はトリエット砂漠のどこかにある。ユアンがレネゲードとしての顔に戻る前に、砂漠越えを済ませるべきだろう。

室内を重苦しい空気が包み込んだ。血族ではない部外者は外そうと、クラトスが腰を上げかけたとき、呼び鈴が小さく震えた。

「……おお、きっとリフィルじゃろう」

ファイドラが玄関の扉を開けると、そこには銀髪の美女が立っていた。

「遅くなりました」

「待っておったぞ。さあ、入りなさい」

ファイドラに促され、リフィルはテーブルの端の席に腰を下ろす。彼女は集った顔を素早く確認し、クラトスに視線を止めた。

「そちらがコレットたちを助けて下さったという傭兵の方かしら」

クラトスが頷くと、リフィルは形ばかりの笑顔を見せた。

「私はリフィル・セイジ。この村の学校で教師をしています。よろしく」

そつのない挨拶だが警戒しているのは確かだった。なかなか賢明な女性のようだ。
「クラトス・アウリオン。傭兵だ。仕事を探して旅をしている」
「この辺りで仕事を？」
「再生の神子の旅立ちが近いという噂を聞いていたのでな。何か仕事がないかと足を伸ばしてみたまでだ」
「なら、計画通りと言うわけね」
リフィルはじっとクラトスを見つめる。クラトスが視線を逸らさずに見つめ返すと、リフィルは納得したのか、ファイドラへ顔を向けた。
「伝言は聞きました」
「その通りじゃ、リフィル。改めて頼みたい。コレットの旅に同行してはくれまいか。そなたの知識と冷静な判断力、それに治癒術は旅の助けになろう」
「お力にはなりたいのですが、弟のジーニアスは……」
「あの子供はあなたの弟か」
クラトスは昼間の銀髪の子供を思い出した。あの子供は魔術を使っていた。魔術が使えるのはエルフの血を引く者のみ。クラトスのように特殊な薬で魔術を行使する者もいるが、これはクルシスに属していなければ与えられない。シルヴァラントのエルフは絶滅寸前であることなどを考えると、自ずと答えは絞られてくる。

「――ええ」
リフィルが警戒の眼差しでこちらを見つめた。
「ジーニアスは我が家で預かろう」
フランクの申し出にリフィルは驚いた様子だった。
「それは……。でも何故（なぜ）私なのですか？　祭司の方が亡くなられたとはいえ――」
「元々、頼もうと思っていたのじゃよ」リフィルの言葉を受けて、ファイドラが静かに語り出した。「再生の神子の末路を考えると、頼りになる同性の同行者にいて欲しいんじゃ」
「末路……」
リフィルの呟きに、コレットが微笑んだ。その微笑みでクラトスはコレットが神子としての宿命を受け入れているのだと悟った。だからこそ、この少女はいつも穏やかで明るいのだろう。
「神子は試練を受け、それを乗り越えることで天使になる。天使となって、天の機関クルシスに迎え入れられ、その一生を終える」
リフィルの顔が強張った。対照的に、コレットは柔和な笑顔のまま頷いている。
「神子の死と引き替えにして世界再生が成されるのじゃ」
「そ、そんな……」
一同の会話を聞きながら、クラトスは静かに瞼（まぶた）を閉じた。
世界再生の度に、神子の家系では同じような会話が行われてきたのだろう。しかしこの会話

すら真実ではない。
神子はただ死ぬのではない。虚ろな生ける屍となり、マーテルをその身に宿すのだ。そうして神子の存在は抹殺され、マーテルに取って代わられる。宿せなければ殺される。どちらにせよ惨い仕打ちが神子を待ち受けている。クラトスはそれを執行する側なのだ。
鬼だ、と思った。天使でもなく人でもなく、ただの鬼畜でしかない。それでも今度の神子が――コレットがマーテルになれば、世界は救われるのだ。
「リフィル先生。お願いします。私と一緒に来て、私の旅をロイドやみんなに伝えて下さい。私は天使になって、マーテル様のおそばで幸せに暮らしているって伝えて欲しいんです。死んでしまったと思われるより、そのほうが嬉しいから……」
「コレット……」
コレットの言葉にリフィルはこみ上げる涙を必死でこらえているようだった。
「つらいことをお願いしてしまってごめんなさい、先生……」
この強く優しい神子が消えたら、あの少年はどうするのだろう――クラトスはふと、自らの息子と同じ名を持つ少年のことを思い出した。

5

ボータからもたらされた報告は、ユアンを苛立(いらだ)たせるのに十分なものであった。たかが十六歳の少女一人を始末するのに、一個分隊を向かわせた挙げ句、おめおめと失敗して戻ってくるなど、嘆かわしいにも程がある。それが罪もない少女を抹殺せねばならぬ罪悪感からだとでもいうなら、まだ理解できるところではあったが、単なる失敗なのだからより情けない。

もっとも、情状酌量の余地はあった。

クラトス・アウリオン——ユアンの友であり最大の敵でもあるあの男が現れたのでは、ボータといえども荷が勝ちすぎていたのだろう。

ユアンは何度目かの深いため息を漏らし、手元の資料をデスクの上に投げ捨てた。

このようなときに、ウィルガイアにいなければならない我が身が恨めしい。だがそのような身分だからこそ、再生の神子の情報もいち早く伝わってくる。なればこその獅子身中(しししんちゅう)の虫ではあったが、そもそも深慮遠謀(しんりよえんぼう)を好まないユアンにとっては息苦しいことこの上ない。

——ほら、また怒ってる。慌てないで。大きく深呼吸して。

懐かしい女性の声が聞こえた気がした。

ユアンは苦笑する。このようなときだからこそ、冷静さが求められるのだ。

そもそも本来なら、クラトスがイセリアにいることはあり得ない。ユアンの知る限り、クラトス自身が望んであの地に赴(おもむ)くとは思えなかった。あの地はクラトスが家族を失った忌(い)まわしい土地だ。降臨を許されていたとしても近づく場所ではない筈であった。

クラトスの意志とは関係なく、彼に命じることができる者はこの世に一人しかいない。

ミトス・ユグドラシル――全ては彼の策略なのだろう。ユアンは自らの詰めの甘さに忸怩たる思いだった。今回の神子が高い適合性を持つために、ユグドラシルもそれなりの対策をとるであろうことは想像に難くなかったが、まさかクラトスを派遣してくるとまでは予想しなかった。ユグドラシルにとってクラトスは自分を裏切った人間であり、自らの切り札を封じる封印そのものだ。万が一クラトスが命を落とせば、ユグドラシル自身も破滅する。

ユグドラシルはその万が一すら訪れることはないと思っているのだろうか。だとすれば、クラトスに対する信頼はもはや信仰に近い。姉であるマーテルへの愛情と同様に。

執務室の通信システムから呼び出し音が鳴った。ユアンはままならない状況に対する八つ当たりのように、スピーカーシステムのスイッチを叩いた。

「何だ」

「ユアン様。ディザイアン階級五聖刃プロネーマが参りました」

「……世界再生の件か。通せ」

ややあって、ユアンの執務室にプロネーマが現れた。彼女が一礼するのを見届けてユアンが口を開く。

「いよいよ時が来たようだな」

「はい、そのようでございまするな。シルヴァラントの地に救いの塔が出現したのを、わらわ

もこの目で確認致しました故」
「そうか。では近々神子が旅立つことになるだろう。ところで――」ユアンは心の内を気取られぬよう、平静を保ちながら言葉を継いだ。「クラトスとの会議は終わったのか？」
クラトスが神託の現場に居合わせたことを、クルシスの幹部であるユアンは知らないことになっている。クラトスはシルヴァラントの管理官だ。彼が降臨しているのならば、その間は別の誰かがディザイアンの管理を代行している筈である。それが何者なのかによっては、レネゲードとしての動き方も変わってくるため、プロネーマから状況を聞き出す必要があった。
「クラトス様のことについて聞いてはおられませぬか？　ユグドラシル様のご命令で地上任務にあたられるそうですが……」
プロネーマが戸惑った声をあげた。
「……いや、初耳だ」
ユアンが素知らぬ顔で答えると、プロネーマは困惑して首を傾げる。
「ユアン様はテセアラの管理官であらせられますから、情報が遅れているのかも知れませぬな。何でもユグドラシル様からのご命令で、神子の護衛にあたるとのことでございました」
ユグドラシルは今回の再生の神子をマーテルの器の大本命と見ている。そこで万全を期するため、情報の管理を徹底しているに違いない。でなければユアンの元に情報が下りてこないわけがなかった。

「……ユアン様、本当によろしいのでしょうか。クラトス様が護衛役で」
「何か含みがあるようだな、プロネーマ」
「いえ……。ただ、クラトス様のシルヴァラント降臨と聞くと、どうしてもあの事件を思い起こしてしまいまする」
「——そうだな」
ユアンはシルヴァラントの地図に視線を向けると、疲れたように肘をついた。
クラトスがクルシスから離反したのは、今から七十年ほど前のことだ。ユグドラシルにとってもユアンにとっても、それは青天の霹靂（へきれき）であった。何度か激しい衝突はあったものの、クラトスはユグドラシルの千年王国計画に従っていたように思えたからだ。しかし誰にも知られぬところで、クラトスの心は静かにユグドラシルから離れていったのだろう。彼はシルヴァラントに降臨し、以後その姿をくらませてしまった。それから数十年が過ぎて、ようやくクルシスはクラトスの居所を発見した。そのときクラトスは一人の女性を連れていた。それが彼の妻アンナだった。
アンナは人間牧場にとらわれていたエクスフィアの実験体であり、人間の身体でハイエクスフィアを培養するというエンジェルス計画の被験者だった。しかし彼女はハイエクスフィアを体内で培養したまま、人間牧場を脱出した。それに手を貸したのがクラトスであった。
二人は何かを求めるようにシルヴァラント中をさすらい続け、クルシスは執拗（しつよう）に二人を追い

続けた。
その当時、ユアンはレネゲードの指導者として、密かにクラトスへ接触を試みたことがある。二人は——いや一家は、海沿いの打ち捨てられた漁師小屋にいた。ユアンが訪ねたとき、崩れそうな建物の中にアンナの姿はなかった。

「……こんなところに住んでいるのか」
ユアンの問いかけに、火の番をしていたクラトスが顔を上げた。彼の手からはハイエクスフィアが外されていた。長年の風雪に耐え老朽化した壁に炎の照り返しが滲んでいる。柱と柱の間に張られたロープには、洗濯物らしき見慣れぬ布が並べられていた。
「——私を殺しに来たか、ユアン」
「今夜は……貴様の古い友として来た」
「……そうか」
クラトスはポットを取り上げ、その中身をカップに注ぐ。芳ばしい香りはコーヒーだろう。ユアンはマントを脱ぎ、クラトスの向かいへ腰を下ろした。
「アンナはどうした。こんな夜中に女性一人では危険だ」
「海岸へ行っている。ノイシュも一緒だ。息子の夜泣きがひどくてな。波の音を聞かせるらしい」

「……息子？　おまえのか!?」
　クラトスは頷き、コーヒーをユアンに差し出した。
「三カ月になる」
　ユアンは呆然として小屋の天井を見上げた。謎の布の正体は赤ん坊のおしめであるらしい。かつては世界中に名を知られた騎士団の団長を務めていた男が……と思うと、なにやら悲しい気分であった。
「……呆れたな。おまえは自分の立場がわかっているのか」
「わかっているつもりだ」
「どうするつもりだ。赤ん坊など、逃亡生活には足手まといだぞ」
「……そうだな」
　微笑さえ浮かべるクラトスに、ユアンはため息を漏らす。
「そもそもおまえは何をしようとしているのだ」
「おまえと同じことだ。ミトスの千年王国を阻止する」
　確かにユアンはレネゲードとして密かな活動を続けている。だがそれ故に、ユグドラシルのシステムに逆らう難しさを痛感してもいた。
「たった一人で何ができると思っている」
「確かに今の私は一人だが、おまえにはない切り札を持っている」

そう。クラトスは唯一ユグドラシルが恐れるものを持っている。ユグドラシルが世界の全てを掌握するために使っているエターナルソード、それを無効化してしまう切り札だ。

かつて精霊たちに愛され、大きな信頼を勝ち得てきたミトス・ユグドラシル。エターナルソードはその信頼の証として、精霊王オリジンから与えられたものだ。しかし世界が二つに分けられた今の状況を、精霊王が許すとは思えない。だからユグドラシルはオリジンを封じた。そのための術にはクラトスのマナが使用され、封印を解くためにはクラトスが死なければならないようにしたのだ。

「だがおまえの切り札は自分の命と引き替えの切り札だぞ」

「……考えていることがある。それにはおまえの助けが必要だ」

クラトスが決意の眼差しを向ける。ユアンはそれを睨み返した。

「私の目的はおまえを殺し、オリジンからエターナルソードの所有者として認められることだ。おまえは自ら命を捨ててくれるのか」

「――クルシスに致命的な一撃を与えてからな」

「致命的な一撃だと？」

「……ミトスを討つ」クラトスはコーヒーを喉の奥に流し込んだ。「もしも勝敗が決したら、オリジンの解放をおまえに任せたい」

ユアンは言葉を失った。

ミトスを討つ——その言葉の重みがユアンにはわかる。
長い年月を共に過ごしてきた仲間だ。ときには剣の師弟として、またときには家族のように、温かい交流があった。ユグドラシルの姉であるマーテルも、クラトスにユグドラシルの未来を託した。そのうえユグドラシルに勝っても負けても、クラトスは命を落とすのだ。
「クラトス……。私たちはあまりに長い間、無為に過ごしてきた。ユグドラシル——ミトスという光が変質してしまったことを認めたくなかったからだ。おまえもそうだったのだろう」
クラトスは何も答えない。一瞬静まりかえった小屋に、火が燃える音が一際大きく響く。
遠く、小屋の外から子守歌が聞こえてきた。アンナの声だ。
「おまえにその決意をさせたのは……家族か」
クラトスはカップを置くと立ち上がった。アンナを出迎えるつもりなのだろう。
「——時期が来たら、アンナたちはイセリアへ逃がすつもりだ。あの村ならば不可侵条約がある」
「彼女は計画を知っているのか」
「……いや、知らぬ」
「それでいいのか」
尋ねながらユアンも立ち上がる。もっとも答えは聞かずともわかっている。この男なら静かに肯定するに決まっているのだ。

クラトスはそういう男だ。

「……しかし案ずることもなかろう」ユアンはプロネーマに向き直り足を組む。「結局奴は戻ってきた。ユグドラシル様への忠誠を誓ってな」

「そうでしょうか」

「フ……。女というのは、どの種族も疑り深いものだな。奴は——変わった。家族を失って、奴はただの抜け殻になったのだ。抜け殻に何ができようか」

「……は。出過ぎたことを申し上げました。お許し下され」

「かまわぬ。裏切り者が信用をなくすのは当然だ。それよりクラトスが降臨した今、神子の旅の間ディザイアンの動きは誰が管理するのだ？」

「わらわがディザイアンの動きを取りまとめ、ユグドラシル様にご報告することになっておりまする」

プロネーマの答えは、予想しうる最悪のものであった。

「……そうか。ならば案ずることはないな」ユアンは内心の動揺を隠しつつ、プロネーマに頷いて見せた。「では世界再生後のテセアラ側の受け入れ体勢について話をしておこうか」

ユアンが用意しておいた資料をプロネーマのほうへ滑らせる。彼女がそれを開くのをぼんやりと見つめつつ、ユアンはユグドラシルの裏をかく方法を考え始めていた。

6

夜の森を進むにつれて、既視感(きしかん)がクラトスを襲っていた。クラトスがこの道を歩くのは初めてだ。それは間違いない。だが似たような景色をクラトスは知っている。

あれは十五年前のことだ。夜の森をただひたすら走り抜けた。先行する妻アンナと息子ロイドを追いかけて。どれだけ葬(ほうむ)り去っても、敵は次から次へと現れた。アンナたちに追いつくまでの時間と距離が無限に感じられた。

「ジーニアス。どうしてあなたまでついてきたの」

先頭を歩くリフィルが、すぐ後ろを歩く弟のジーニアス・セイジに声をかけた。その瞬間、クラトスはふっと現実に引き戻された。

この森はあのときの森ではない。近い場所ではあるが、同じ光景ではない。全ては奇妙な符号の一致によって引き起こされた幻想だ。

この森をずっと進んでいくと、奥にドワーフの住む家があるのだという。ロイド・アーヴィングはそのドワーフの養子なのだとリフィルは言っていた。旅立ちが早朝になることを知り、コレットが今夜の内にロイドとの別れを済ませておきたいと言い出したのだ。神子の行く末を思えば、叶えてやるべき願いといえた。これは今生の別れになるのだから。

それにしても――クラトスは複雑な思いで森を見渡した。見覚えのあるイセリアの森、ロイドという名の少年、アーヴィングという妻と同じ姓。偶然と切り捨てるには、あまりに全てが揃いすぎている。それにクラトスは息子の遺体をその目で確認したわけではない。どうしても奇跡があったのではと期待してしまう。或いは奇跡など起きないでくれと切望してしまう。ただ、真実を知るのが怖かった。

「……な、何だか怖いよ。姉さんの声」

ジーニアスは怯えた様子で、横を歩くコレットの後ろに隠れていた。一瞬自らの恐怖とジーニアスの恐怖が重なり、クラトスは失笑した。

「な、何笑ってるの、おじさん！」

「――いや、失敬。ただ、恐怖というのは、自らの心の内にあるものだ。何かやましいことがあるから、リフィルの声が恐ろしく感じられるのではないか」

図星なのか、ジーニアスはぐうっと喉を鳴らした。

「ジーニアス。何かあるの？　そういえばあなた、随分服が泥まみれだけど……また何か変ないたずらをしたんじゃないでしょうね！」

「ち、違うよ！　ただちょっと、ロイドに用があって……」

「いたずらにロイドも関係しているのね」

「ち、違うって言ってるでしょ！　もー！　こっちにも色々あるの！　姉さんには関係ないで

しょ！」

「……仕方のない子ね。夜の森は危険だから連れてきたくなかったのに」

「大丈夫ですよ、先生。クラトスさんがいます」

無邪気なコレットに、リフィルが肩を竦（すく）めた。

「まあ確かに傭兵さんが一緒なのだから、大丈夫だと思うけれど」

リフィルがクラトスに視線をやる。するとジーニアスもおずおずとこちらを見上げてきた。

「おじさんも明日コレットと一緒に行くの？」

「ああ」

「ふーん……。ねぇ、世界再生ってどれぐらい時間がかかるの？」

「さてな」

「なるべく早く帰ってこられるように頑張るよ」

コレットが小さくガッツポーズを作る。ジーニアスはコレットの服の端を掴（つか）み、寂しそうに眉尻（まゆじり）を下げた。

「……うん。みんな待ってるからね」

緩やかな上り坂がしばらく続き、やがて小さなせせらぎの音が聞こえてくると、森の木々の隙間に小さな明かりが見えてきた。どうやらドワーフの家が近いようだ。

そのときクラトスの強化された聴覚に、ロイドとドワーフらしき人物の言い争いが聞こえて

きた。

「――……ディザイアンにエクスフィアを見られなかっただろうな？」

クラトスは自らの心臓に杭を打ち込まれたような錯覚を覚えた。思わず立ち止まり、聴覚機能を遮断する。

ロイドがエクスフィアを持っていることは、聖堂での戦いですぐにわかった。しかしディザイアンに隠さねばならないエクスフィアというのは何だ。

聞きたい――しかし聞きたくない。二律背反にさいなまれ、クラトスは小さく唇を噛んだ。

クラトスが呆然と立ち尽くしている間に、神子たちはロイドの家の前まで進んでいた。どうやら彼らにもロイドたちの言い争いが聞こえたのだろう。顔を見合わせて立ち止まっている。クラトスも聴覚機能を絞りながら近づいていった。人間並みに落とした聴覚でも、ロイドとドワーフの言い争いがはっきり聞こえてくる。クラトスの背中に震えが走った。

「……そのエクスフィアはおまえの母親の形見だ。ディザイアンはそいつを奪うためにおまえの母親を殺したんだよ」

「……本当……なのか」

「牧場近くの崖で、おまえを拾ったときの話はしたな？　そのとき、まだ母親には意識があった。そこで聞いた。間違いあるめぇ」

「何でそれを今まで黙ってたんだよ！」

ここまでが限界であった。困惑するリフィルたちの背後で、クラトスは目を閉じ、聴覚機能を完全に遮断する。これ以上はとても聞くことができなかった。

もはや疑う余地はない。彼は——かつてクラトスが失った希望だった。

すぐ近くで人の気配がした。クラトスが目を開けると、そこにはロイドがおり、気まずそうにこちらを見つめていた。クラトスが聴覚機能を一般レベルまで戻すと、彼の声が耳に流れ込んできた。

「……あ。もしかして、今の聞いてたか？」

「ご、ごめん。ボクのせいで……」

空気を察したロイドに何故かジーニアスが謝っている。何かあったのかもしれないが、今のクラトスにはそれを考える余裕はなかった。クラトスは誰にも気づかれないよう静かに深呼吸しながら、ロイドの家を見渡した。立派な二階建ての一軒家だ。ドワーフは洞窟などに住むものだから、これはロイドのために建てられたのだろう。ベンチ、花壇、物干し台に——視線を巡(めぐ)らせていたクラトスは、庭の奥に建てられた石碑(せきひ)のようなものに気づいた。無意識の内に視覚機能が石碑の文字をサーチする。

——アンナ・アーヴィング。この地で安らかに眠る。

クラトスの顔が強張った。

「ロイド、ベランダに行こ？」

「そうだな」
ロイドがコレットを促して、家の中に入ろうとしている。クラトスは思わず声を発していた。
「あの墓石は――」
「え？」
ロイドが立ち止まり、こちらを振り返る。
「あの墓石は、誰のものだ？」
「ああ、聞いてただろ？　俺の母さんだよ」
「アンナ……か。父親はいないのか？」
尋ねた声は震えていなかっただろうか。クラトスはつばを飲み込んだ。もしもロイドが幼い頃のことを覚えていたら……。
「……知らねぇ。でもダイク親父が俺の親父だよ」
フッと全身の力が抜けたような気がした。拍子抜けしているのか、それとも安堵しているのか。
「……フ。そうだな。変なことを聞いた。すまない」
ただ一つはっきりしていることがある。
ロイドが――守りきれなかったと思っていた息子が生きている。
クラトスは失っていた十五年を取り戻したような気がしていた。

第二章

1

トリエットはイセリア地方の南に位置する、広大な砂漠地帯だ。大規模なオアシスは二カ所あったが、一つは事故で失われ、もう一つにトリエットの街が作られた。
イセリアを旅立って七日。旅慣れない神子を気遣い、トリエットの宿で二泊したが、その後の旅は順調に進んでいた。結局旅の同行者はクラトスとリフィルだけであったが、意外なことにリフィルは非常に旅慣れていて、足手まといになるようなことはなかった。このあたりの魔物はさほど危険ではない。次の街となるイズールドまでは問題なく辿り着けるだろう。
「今日で旅立ちから一週間になるのね」
リフィルが手帳を確認して呟いた。彼女は旅の行程を事細かに書き記している。全てはコレットの望みを叶えるためだ。彼女が生きた証をこの世界に残すために。
「……ロイド、怒ってるかな」
コレットが砂漠の北の空を振り返る。そのずっとずっと先にはイセリアの村がある筈だ。
「気に病むな。おまえの気遣いがわからぬような子供ではあるまい」

クラトスの言葉に、コレットは小さく微笑(ほほえ)んだ。

神子の旅立ちはまだ陽も昇らぬ早朝だった。イセリア村の人々は、かがり火を焚(た)き、コレットたちを盛大に見送った。これから行われる世界再生の成功を信じて。その集団の中にロイドの姿はなかった。

昨夜ロイドの家を訪ねたとき、彼女はロイドから世界再生の旅に同行させて欲しいと懇願(こんがん)されたのだそうだ。だがコレットはその申し出を断った。世界再生の旅は大勢の神子が挑み、命を落としている危険なものだ。特に一般の人々は、ディザイアンが神子を暗殺するのだと思い込んでいた。

もちろんそのような事実がないことはクラトスがよくわかっている。ディザイアンはむしろ神子の旅をフォローしているのだ。ハイエクスフィアは装備した人間の恐怖に反応し、その結果、装備者への融合が促進される。だからディザイアンは、クルシスからの指示の下『殺さない範囲で』神子に恐怖を与えるのだ。むしろ神子殺しに深く関与しているのは、ディザイアンに偽装したレネゲードのほうだった。

しかしそれらの事実を知らなければ、世界再生の旅は死の旅と同意義である。そんな旅にロイドを同行させたくないのだとコレットは言った。大切な幼なじみだから、危険な目には遭わせたくないのだと。

コレットはロイドがついてこないように、わざと出発時間を遅く伝えていた。だからロイド

は旅立ちの見送りにも参加できなかったのだった。

「ロイドは……学校の勉強こそできないけれど、頭のいい子よ。きっとあなたの気持ちをわかってくれる。怒ったりするわけがないわ」

頷(うなず)き、微笑み合うリフィルとコレットを横目に、クラトスはそっと眉(まゆ)を寄せた。担任教師が、わざわざ学校の勉強はできないと言うのだから、ロイドの成績は推して知るべしなのだろう。ロイドの成績など今はどうでもいいことなのだが、ついがっかりしてしまうのは親であるが故(ゆえ)なのだろうか。

「あら、クラトス。どうしたの。難しい顔をして」

リフィルの問いかけを無視しようとしたクラトスだったが、その耳に聞き覚えのある声が届いたため、思わず立ち止まって北のほうを振り向いた。

「どうしたんですか」

コレットも不思議そうに首をかしげる。二人の耳にはまだ声が届かないのだろう。クラトスが視覚認知の距離を伸ばすと、砂漠の陽炎にぼやけた子供の輪郭(りんかく)が浮かび上がってきた。太陽の照り返しを受けて輝く銀髪は姉と同じ色をしている。ジーニアスだ。しかも彼は既(すで)に絶滅したと言われる古代生物の背中に乗っている。クラトスはその古代生物のことをとてもよく知っていた。

クラトスが彼らに駆け寄ると、コレットとリフィルも顔を見合わせ、慌てて後を追ってきた。

「ちょっと、クラトス！　いったい……」
「……姉さーん！　コレットーッ！」
リフィルの声を遮るように、ジーニアスの声が風に乗って届いてきた。やや遅れて、リフィルたちの視界にもジーニアスの姿が見えてきたようだった。
「ジーニアス⁉」
コレットとリフィルがほぼ同時に声を上げた。ジーニアスはそれに応えようと両手を振り、歩調を早めていた古代生物から滑り落ちる。古代生物は大きく尻尾を振ってクラトスに飛びついてきた。その横をコレットとリフィルが駆け抜け、砂にまみれたジーニアスを助け出す。
「だいじょぶ？　ジーニアス」
リフィルに起こされたジーニアスに、コレットが膝をついて尋ねた。
「うぇっぷ……。大丈夫だけど……口の中に砂が……。ひどいよノイシュ！　ボクが乗ってるのに、突然スピードあげるんだもん」
クラトスは自らに飛びつく古代生物を撫でてやりながら尋ねた。
「これは……ノイシュというのか」
「そう。ロイドの犬」
「……犬ではないだろう」
「そりゃボクもそう思うけど、ロイドは犬だって言い張るから……」

クラトスはため息をつくと、ノイシュの喉元をそっとさすってやった。ノイシュは嬉しそうに目を細め、クラトスに身体を寄せてくる。ノイシュは昔からこうやって喉を撫でられるのが好きだった。

「まあ、ノイシュを見て驚かないのはあなたが初めてだわ」

リフィルが目を丸めてこちらを見ている。

「……人に慣れる魔物もいる。どうせそのようなものだろう」

ノイシュが不満そうにきゅうんと鳴いた。ノイシュは人の言葉がわかるのだ。おそらくはクラトスのついた嘘に傷ついたとアピールしているのだろう。

ノイシュはかつてクラトスが飼っていたプロトゾーンと呼ばれる古代種だ。見た目は狼にややや似ているが、大きな耳と優しい瞳で、肉食獣のような恐ろしさは感じさせない。性質も大人しくて素直だ。

ロイドと生き別れたとき、ノイシュともはぐれてしまったが、彼——と言っていいのかは分からない。プロトゾーンの性別は分からないのだ——はロイドを守ってずっと傍にいてくれたのだろう。

「それにしても、ジーニアス。あなた、何故ノイシュとこんなところにいるの？」

リフィルの問いかけに、ジーニアスははっと我に返り、姉の腕を掴んだ。

「そうだ！　姉さん、助けてよ！　ロイドが……ロイドがディザイアンに捕まっちゃったん

だ！」
　その場に居合わせた全員が息をのんだ。
「どうして？　どうしてロイドが……」
　コレットが声を震わせる。
「僕たち……その……コレットの旅について行こうと思って、みんなの後を追ってたんだ。だけどトリエットでディザイアンに捕まって……」
「ディザイアンがどうしてロイドを狙うの？　神子はこちらにいるのよ。あなたたち、まさか何かしでかしたんじゃないでしょうね」
　リフィルの声に怒気が籠もる。
「わ、わけは後で話すよ。とにかくロイドを助けて！　ボク、ロイドが連れて行かれたディザイアンの基地の場所、知ってるから」
　ジーニアスが必死で一同に訴えた。
「クラトスさん」コレットが決意の表情でこちらを見上げる。「お願いします。ロイドを助けに行かせて下さい」
　コレットの顔には揺るぎない決意がみなぎっていた。
　見殺しにするわけにはいかない。クラトスは頷いてコレットに応える。
　ロイドにはディザイアンに狙われるだけの理由がある。アンナの形見であり、彼女自身が体

内で培養したハイエクスフィアの存在だ。あれをロイドが持っていると知れば、ディザイアンは全力でロイドを襲うに違いない。
だが、おかしな点もあった。このトリエット砂漠にはディザイアンの施設は存在しない。あるのはディザイアンに擬態(ぎたい)しているレネゲードの拠点だけだ。だが何故レネゲードがロイドを襲うのか。
可能性があるとすればただ一つ。
ロイドが何者なのか、レネゲードが――ユアンが気付いたということだ。

2

ディザイアンの幹部である五聖刃(ごせいじん)は、その名の通り五人からなっており、ディザイアン階級を指揮する重要な立場にある。しかしプロネーマは五聖刃の中でも特殊な立場にあった。他の四人はそれぞれが支配地域を与えられ、その地域の人間牧場を管理する任務に就いている。だがプロネーマにはそのような任務も、特別な支配地域もない。彼女は救いの塔の地下施設を拠点とし、シルヴァラントとテセアラの両地域で活動している。シルヴァラントでは五聖刃を通じてディザイアン全体の管理を、テセアラでは管理官の片腕としてマーテル教会の管理を、それぞれ行っているのだ。ディザイアン階級でありながらもっとも天使階級に近い存在――それ

故仲間である筈の五聖刃から反感を持たれている。以前はそれを苦々しく思ったこともあったが、今ではそのようなくだらない感情をぶつけられることに慣れていた。何よりこの仕事をしている限り、敬愛するユグドラシルの傍に近づけるのだ。

「プロネーマ様。回線準備が整いました」

「頼む」

プロネーマの前に並ぶ立体通信装置に、四人の男たちが姿を現した。

左から順に、眼鏡をかけた老人がロディル、顔に傷を持つ男がマグニス、隻眼の男がフォシテス、一番右端の神経質そうな男がクヴァル。彼らにプロネーマを加えた五人がディザイアン階級の幹部である五聖刃だ。

「そろったようじゃな。では今回の神子の旅に関して、クルシスからの伝達を行う」

いつものようにメンバーの顔を見渡したプロネーマは、フォシテスの左腕が半分失われていることに気づいた。

「……フォシテス？　その怪我はいったいどうしたのかえ？」

フォシテスはかつて戦場で大きな怪我を負い、片目と片腕を失った。いまは失った左腕の代わりにエクスフィアで稼働する特殊な機械兵器を装着しているのだが、その機械部分が完全に破壊されていた。フォシテスは損傷した左腕を見下ろし、自嘲した。

「人間の小僧に後れをとった……いや、家畜の管理に失敗したと言うべきかもしれぬな」



「何だと！」マグニスが大声を張り上げた。「人間どもにやられたというのか！　おまえほどの戦士が！」
「クックックッ。勇者との誉れも高いフォシテスも、腕が鈍ったものですねぇ」
「クヴァル！　おまえは黙ってろっ！」マグニスは殺意に満ちた眼差しでクヴァルを一喝し、続けた。「フォシテス！　おまえもおまえだ。何故俺に一声かけてくれねぇんだ。今からでも俺がイセリア地区の人間どもに思い知らせてやるぞ」
「黙りゃ！」
プロネーマがマグニスに向けてナイフを投げる。むろん立体映像だから、ナイフはマグニスの身体をすり抜けるだけだが、マグニスを黙らせる効果はあった。
「まだフォシテスから詳細も聞かぬ内から何を騒ぎ立てるのじゃ。愚か者」
「だが……！」
「まずはフォシテスの報告を聞く。よいな」
マグニスは舌打ちして黙り込んだ。プロネーマに促されフォシテスも重い口を開く。
「イセリア村の人間が不可侵契約を侵した」
居合わせた五聖刃の表情が硬くなった。
イセリア村との不可侵契約は、神子を守ることが目的の契約だ。本来なら人間どもとそのような契約を結んでやる謂れはない。それは人間のほうも理解していると思っていたが、ここに

来て反旗を翻（ひるがえ）そうというのか。

「ちっ。パルマコスタの連中にでも感化されたのか！」

　マグニスが自身の支配地域で起きている反乱運動を思い出したのか、ただでさえ恐ろしい顔を憤怒（ふんぬ）の形相にして喚いた。

「いや、違うのだ」フォシテスはマグニスの様子に思わず苦笑する。「マグニス。貴様は少し落ち着け。私が今問題にしたいのは不可侵契約が侵されたことそのものではない」

「侵入者に何か問題があったのかえ？」

　プロネーマは脳裏にクラトスを思い起こしながら尋ねた。フォシテスは厳しい表情になって頷く。

「そうだ。名前はロイド・アーヴィング。例のエンジェルス計画でエクスフィアを培養していた、培養体Ａ０１２の息子だ」

「エクスフィアは!?　完成したエクスフィアはどこです！」

　クヴァルがカッと目を見開いた。無理もない。エクスフィアをハイエクスフィアに進化させるエンジェルス計画は、クヴァルによって発案・実行された計画だ。培養体Ａ０１２――人間名アンナ・アーヴィングもクヴァルの人間牧場で管理されていた。

「ロイドが装着していた。何とか回収しようとしたのだが、このザマだ」

　フォシテスは失われた左腕を見せる。

プロネーマは自らが抱いた疑念が間違っていなかったことを再確認した。十五年前に死んだ筈のクラトスの息子が、クルシスの求めているハイエクスフィアを持って現れた。そのタイミングでクラトス自身も降臨するなど、裏があるとしか思えない。クラトスが己に寄せられた信頼をよいことに、ユグドラシルに降臨を願ったとも考えられる。

「今、ロイドはどこにいるのです」

クヴァルが渋い顔で問いかけると、フォシテスは「トリエット方面だ」と答えた。イセリアの村を追放され、砂漠を南下しているらしい。おそらく神子と合流しようとしているのだろう。

「神子の旅にロイドが合流するとなると、さすがの私も黙って見過ごすわけにはいきませんよ、プロネーマ」

「クヴァルの言うとおりだ。俺もフォシテスを傷つけた奴を黙って通すわけにはいかないぜ」

五聖刃でもっともそりの合わないクヴァルとマグニスが、今回に限っては同様に神子一行の排除を求めている。さすがにそれを認めるわけにはいかないが、何らかの対策を施す必要はあった。

「それに関しては、ユグドラシル様に確認する。それまで余計な動きはならぬぞえ」

「しかし――」

尚も食い下がるマグニスに、プロネーマは眉（まゆ）を吊り上げた。

「しつこいぞえ、マグニス。下手（へた）をすると、この一件にはクラトス様が絡（から）んでおるやもしれぬ。

余計な真似(まね)をすれば、ユグドラシル様からの制裁もあろうぞ」

「クラトス……。あの裏切り者の人間か……」

クヴァルが忌々(いまいま)しげに呟(つぶや)いた。クヴァルは自分の計画に水を差したクラトスを憎んでいる。もっともクラトスが人間であることを思えば、良い感情を持つディザイアンなどそう多くはない。

さらに気になるのは、ここまで無言を貫いているロディルの存在だ。プロネーマの内偵では、クルシスの意に反した行動をとっている節が見受けられる。この想定外の事件をロディルがどのように利用してくるのかも不安なところであった。

「とにかく、今は勝手に動くでないぞ。よいな」

釘を刺しつつも、彼らが命令に従うとは思えず、プロネーマはそっとこめかみを押さえた。

3

ジーニアスに連れてこられたディザイアンの拠点は、現在のシルヴァラントとは比べものにならない高度な技術で造られていた。クルシスの技術と同様のものだから当然と言えば当然だ。もちろんクラトスには見慣れたものだが、コレットたちは驚いた様子で内部を見渡している。冷静なのはリフィルぐらいであろうか。

もっともここはディザイアンの拠点ではない。レネゲードたちがシルヴァラントベースと呼んでいる拠点だ。やはりロイドを捕らえたのはレネゲードであったらしい。レネゲードはディザイアンに擬態しているからジーニアスにその違いがわかる筈もなかった。むしろ子供ながらレネゲードに捕らわれることなく立ち回り、クラトスたちの元へ辿り着いた優秀さに感嘆すべきだろう。それにジーニアスからは多くの情報を得ることができた。

そもそもロイドとジーニアスがコレットを追いかけることになった経緯は、ロイド自身がディザイアンに命を狙われ、イセリア村から追放処分を受けたためであるという。ロイドとジーニアスが不可侵契約に反し、立ち入り禁止の人間牧場に捕らわれていた老婆と親しくなった結果、ディザイアンからの報復を受けたようだ。その際、彼らはロイドのエクスフィアを奪おうと必死だったという。つまりアンナの残したハイエクスフィアとロイドの存在が、クルシスに知れ渡ってしまったということだ。クルシスが知れば、当然ユアンの耳にも入る。ユアンもまたロイドを狙うだろう。

「ロイド……。もう殺されていたりしないよね？」

先導するクラトスの背後で、ジーニアスが不安げにリフィルへ尋ねている。一方のリフィルはと言えば、至極冷静だ。

「分からないわ。ただ殺すつもりなら、わざわざ気絶させて捕らえたりはしないのではないかしら」

「う……うん……」
「だいじょぶ。早くロイドを助けよう」
「警備室の情報によれば、ロイドはこの先の部屋に移動した筈だ。私とジーニアスと神子で部屋に飛び込み、ロイドを確保する。リフィルには脱出口の準備を頼む」
「了解よ。コレットとジーニアスを頼むわね」
リフィルを残し、クラトスたちは前方の酷く騒がしい一室へ向かった。
飛び込んだ部屋は、どうやらユアンの私室であったようだ。彼好みの絵や調度品が置かれている。だがユアンの姿はない。代わりにイセリアの聖堂で神子を襲った男がいた。彼の名はボータ。レネゲードにおけるユアンの右腕だ。ロイドはというと、ボータと対峙する形ではあったが壁際に追い込まれていた。しかし怪我をした様子は見受けられない。
「ロイド！　生きてる？」
「だいじょぶ？　怪我はない？」
ジーニアスとコレットが一斉にロイドへ駆け寄る。クラトスも油断なくボータに目を配りつつ、二人に続いた。
「無事のようだな」
「みんな、来てくれたのか」
ロイドが歓喜の声をあげる。クラトスは顔を顰めた。まだ敵が目の前にいるというのに気を

緩めるとは甘すぎる。
「ちょうどいい。ここで神子もろとも始末してくれようぞ！」
ボータの声に呼応する形で二人の警備兵も飛び込んできた。
「……来るぞ」
クラトスは剣を抜くと、ボータに向き直る。遅れてロイドたちもそれぞれ武器を取り出した。子供三人のお守りをしながらボータと戦うのは楽ではないが仕方がない。天使としての力を使えるのなら造作もないことなのだが。
ボータは湾曲した形状の大剣を振り回し、クラトスへ斬りかかってくる。幸い奴のほうはクラトスを倒さなければ神子の始末にはかかれないと踏んでいるのだろう。
「神子、ジーニアス！　後方支援を頼む。ロイド、前に出ろ！」
「わ、わかってるよ！」
ロイドが二振りの剣を構えて、クラトスの横に来る。
「私がボータを止める。その間におまえは両サイドの兵を突け」
「な、何！　俺が——」
ロイドが何か文句を言っているようだが、クラトスはそれを無視して、ボータに斬りかかっていった。
一回、二回、三回と、刃を重ね、互いの力量を見極める。既にボータはやや劣勢と感じ取っ

ているようだ。クラトスが四度目の剣を振るう前にバックステップで距離をとる。
「岩砕陣(がんさいじん)！」
ボータの剣が床に突きつけられると、マナの膨張(ぼうちょう)と共に岩石がクラトスに向かって吹き上げてくる。クラトスが盾でガードすると、背後から別のマナの圧力が発生した。
「いっけぇ！　ファイアボール！」
クラトス越しに複数の炎の塊(かたまり)がボータを捉える。ボータは剣でそれを振り払おうとし、一瞬懐(ふところ)に隙ができた。クラトスは一気にボータへ駆け寄り、風迅剣(ふうじんけん)で相手を浮かせる。その間に盾を使い、ボータの武器を吹き飛ばした。武器を失い、無力化したボータを蹴り上げると、素早くロイドたちの状況を観察する。ロイドは神子の協力を得ながら、どうにかこうにか警備兵と対峙していた。クラトスはその場で魔術詠唱(えいしょう)に入り、ウィンドカッターでロイドに斬りかかる警備兵を蹴散らした。ロイドはそこに素早く剣を突き刺し、とどめを刺す。
「……ぬぅ。やはり貴様に対して私一人では荷が勝ちすぎたか」
形勢不利と見たのかボータが退却命令を出し、ひとまずこの場の戦闘は終了した。クラトスはロイドたちを引き連れ、トリエットの街まで逃れることにした。
トリエットに辿(たど)り着いたときには、すっかり日も暮れ、ロイドたちは完全に疲れ切っているようだった。それも仕方がないことだ。普段から戦い慣れていると思っている人間でも、砂漠

という環境とディザイアン——実のところはレネゲードだが——への反抗によるストレスがもたらす疲労は、決して軽いものではない。一行は早々に宿を取ると、そのまま休むことにした。
クラトスの同室はロイドだった。ロイドは部屋に着くなり、ベッドに倒れ込み、そのままの姿勢でいびきをかいて眠りだした。スイッチが切れたかのような眠り方にクラトスは呆気にとられてしまう。
これが我が息子の十五年後の姿なのか——嬉しいのか悲しいのかよく分からない複雑な思いがクラトスの心中に広がる。
クラトスはロイドの傍に近づくと、両足の靴を脱がせてやった。手にしたブーツは三歳の頃に履いていた小さな革靴の倍はある。それだけの時間が経っているということなのだろう。クラトスはロイドをきちんとベッドに乗せて毛布を掛けてやった。砂漠の夜は冷える。風邪でも引かれてはたまらない。
クラトスは室内のソファーに腰を下ろし、窓から見える星空を見上げた。
そういえば、あのときもこんな星の夜だった。クラトスはふと、一番深いところに封印していた記憶を甦らせた。
それは十五年前の悲劇だった。
きっかけはディザイアンに反抗するレジスタンスグループからもたらされた情報だった。ク

ヴァルの追跡隊がクラトスとアンナの居所をつかんだというのだ。ロイドのためを思い、一所(ひとところ)へ長く居たのがまずかったのかもしれない。クラトスはこれを機に自らの計画を実行に移すつもりでいた。そのために家族を連れてイセリアへと向かったのである。

しかしイセリアを目前にしたところで、レジスタンスの同胞が一足先に救いの塔へ突入したとの一報が入った。クラトスはアンナとロイドをノイシュに乗せてイセリアへと向かわせ、自らは救いの塔へと急いだ。全てはクラトスとアンナを引き離す作戦だったとも知らずに。

レジスタンスグループがもたらした情報こそが罠(わな)であったことに気づいたのは、クルシスから差し向けられた捕獲部隊との戦いに、ユアンが加勢してくれたときだ。クヴァルがアンナとハイエクスフィアを回収するためにイセリアに向かった事を知り、クラトスは必死でアンナたちを追いかけた。天使としての機能を最大限に高め、自らの家族を救うことに全てをかけた。

アンナがイセリアの森へ逃げたと聞き、自らも森の中に降り立った。夜の森は暗く、なかなかアンナたちの痕跡(こんせき)を発見することはできなかった。

それからどれほどの時間が経っただろうか。遠くからロイドの尋常ではない泣き声が聞こえてきた。クラトスがそちらへ向かうと、ロイドがエクスフィギュアと呼ばれる巨大な化け物に襲われていた。周囲ではクヴァルとその部下たちが、ロイドやエクスフィギュアなど存在していないかのように、かがり火を焚いて何かを捜索していた。

「この辺りには見当たりません、クヴァル様」

「ならばもっと捜索範囲を広げよ！　あのエクスフィアが私の今後の地位を保証してくれるのだ！」

クラトスの全身の血が凍り付いた。

エクスフィギュアは、エクスフィアとの結合に失敗したり、装着者から無理矢理はがされたときに起きる人間の細胞異常だ。つまり、あのエクスフィギュアは——

「アンナッ！」

クラトスの叫びに、彼女であったモノは反応しなかった。両腕を大きく振り上げ、ロイドに向かって巨大な口を開く。

クラトスは迷った。剣を抜くか、それともロイドを助けるか。だが身体は動かない。あまりの衝撃がクラトスの判断力を奪い去った。

ワフッ！　という短い泣き声がしたのはそのときだった。クラトスが顔を上げると、ノイシュがロイドをくわえ、エクスフィギュアの一撃を代わりに浴びていた。ノイシュはロイドを守るように大地に転がる。

「ロイドッ!?　ノイシュッ!?」

クラトスが慌ててロイドとノイシュの元に駆け寄った。しかしロイドは気を失っており、ノイシュも全身に激しい傷を負っている。

「……これはクラトス様。何故このような場所においでなのでしょうか」

クヴァルが慇懃無礼に言いながらクラトスの後ろに立った。クラトスは反射的に剣を抜き、その切っ先をクヴァルに突きつける。
「これは……何をなさいますか」
「アンナを……アンナをあのような姿にしたのは、貴様か」
「アンナ……はて……」クヴァルはわざとらしく考え込み、その後残忍な笑みを浮かべる。
「ああ、私のところからクラトス様が勝手に連れ出した培養体A012のことですか。ええ、その通りです。先ほど培養中のエクスフィアを取り上げたのですが、あのように暴れるので、エクスフィアを落としてしまいました。今エクスフィアを探させているところですよ」
そのときだった。獣のような咆吼が森を大きく揺らした。クラトスとクヴァルが振り返ると、かつて妻であった哀しい生き物が、両手で頭を押さえつけながら、木に身体を叩きつけている。
「おや……正気を取り戻したのですかね」
「貴様！」
クラトスが剣を滑らせるが、その前にクヴァルは雷撃で目くらましをして、一気にクラトスから距離をとる。
「良いのですか？　正気を保っている時間などわずかのこと――ほらご覧なさい」
エクスフィギュアはゆらりと身体を動かして、ロイドたちのほうへ突き進んでいく。クラトスは間に入ると、盾で彼女の突撃を押しとどめたが、その途方もない力の強さに、背後の崖へ

どうして愛する人に剣を向けられようか。

クヴァルの揶揄に耳を貸す余力はない。倒すことは可能だ。だが相手は妻だ。アンナなのだ。

「四大天使といえども所詮この程度ですか」

「ぬぅっ!?」

と落とされそうになっていた。

「クラトス！　貴様何をしている！」

クラトスの後を追っていたらしいユアンも、飛竜に乗ってこちらへやってきた。

「貴様がやれないのなら――」

「やめろ！　来るな、ユアン！」

クラトスの鋭い眼光に睨まれ、ユアンは飛竜を止めると、距離を取って降り立った。

「ふふふふふ、これは凄い。四大天使のお二方にこのような片田舎でお目にかかれるとは」

「クヴァルか……貴様、何という悪趣味な……」

「なるほど。ユアン様は裏切り者のクラトス様に肩入れなさるのですか」

ユアンとクヴァルが睨み合ったそのときアンナが囁いた。

「あなた……。私を殺して……」

「……なっ」

「どんなに自分を抑えようとしても……私は大事なロイドを殺そうとしてしまう。だから……

ロイドを助けるために……」

「アンナ……それは駄目だ……」

「私の意識はもう……。あなたを苦しめたくないのに……ごめ……」

再びエクスフィギュアの咆吼が森を揺らした。彼女は大きくジャンプして、ロイドの首に手を振り下ろそうとする。クラトスはその腕を切り払い、痛みに立ち尽くしたエクスフィギュアを崖下へと蹴り飛ばした。さらに自らも後を追うと、エクスフィギュアの背中に足をかけ、自らの剣を振り下ろす。肉の切れる嫌な音とエクスフィギュアの悲鳴がこだました。クラトスは剣を抜くと同時にマナの羽で崖上まで飛び戻った。かなりの間エクスフィギュアの悲鳴が聞こえ、やがて激しい衝突音と共に途切れた。それがクラトスが耳にした妻の最期の声であった。

「クラトス……」

ユアンの声が震えている。一方のクヴァルは芝居がかった仕草で拍手すると、クラトスに近づいてきた。

「さすがですね、クラトス様。見事な働きでございました。それに……A012のエクスフィアも見つかったようでございます」

クヴァルは気を失っていたロイドの腕を掴み軽々と持ち上げた。ロイドが痛みに呻く。

「ロイドを離せっ！」

クラトスの叫びに、クヴァルはねっとりとした声で答えた。

「おっと。そのまま動かないでください。もし近付いて来れば、この子供は――」クヴァルはロイドを崖の上で揺らす。「――死ぬかもしれません」

クヴァルはロイドの右手の拳を強引に開き、その中に握られていたハイエクスフィアを取り上げようとした。

あと少しで奪われてしまう――まさにその瞬間、虫の息だったノイシュが最後の力を振り絞り、クヴァルの肩に噛みついた。クヴァルは痛みに顔を顰めて、思わずロイドを地面にたたきつける。ロイドは転がったハイエクスフィアを摑み直し「おかぁさ……ん」と呟いた。クラトスとクヴァルはほぼ同時に動き、ロイドを奪取しようとする。しかしそれより一瞬速く、ノイシュがロイドをくわえあげて逃げだした。その背後にライトニングの魔術が振り下ろされる。クヴァルだ。ノイシュは雷光からロイドを守ろうと身を捩り、崖下へ転がり落ちていった。

「貴様！」

クラトスは剣と共に風を呼び、クヴァルの身体を斬り上げた。真空の刃は幾重にもクヴァルを斬り裂く。全身から血を噴いて倒れたクヴァルを尻目に、クラトスは崖の際まで駆け寄った。しかしそこには地獄の口のような黒い森が広がっているだけであった。

その後クラトスはロイドたちが落ちていった崖下を探したが、そこには魔物に食い散らかされたディザイアンの死骸しか残っていなかった。大量の血痕から、もはやロイドは生きていまい――そう思ってしまった。

クラトスはため息をついて、甦った記憶を再び奥底へとしまい込んだ。どうやらこのままでは眠れそうにない。クラトスはそっと宿の部屋を抜け出して、深夜の街へ出て行った。宿屋の横には竜車用の竜房が備え付けられている。ノイシュもそこで眠っている筈だった。

一瞬外の空気が冷たく感じられたが、すぐに自動体温調節機能が働き、寒さを軽減させる。天使とは戦うためにありとあらゆる能力を強化された戦士だ。それは時に人の魂（たましい）を持つ機械のように感じられた。

砂を踏みしめる音で、ノイシュは眠りから目覚めたらしい。クラトスが竜房に入ってくると、妙に愛嬌（あいきょう）のある小さな瞳をキラキラと輝かせた。それからクラトスの差し出した手に鼻を押しつけ「きゅうん」と甘えた声を出す。

「おまえには大変な思いをさせてしまったな」

「くうん……」

そんなことはないと言っているのだろう。白と緑の不思議な体毛を撫でてやると、ノイシュはうっとりと瞼（まぶた）を閉じた。

「おまえがいてくれてよかった。ロイドが生きていてくれたのはおまえのおかげだ」

「きゅうん……」

少し自慢げな鳴き声に、クラトスは小さく微笑んだ。

そのときクラトスの背後で砂を踏みしめる音がした。クラトスはとっさに剣を抜き、背後に立つ人物に刃を突きつける。
「うわわっ！」
心底驚いた声で飛び退く相手の姿に、クラトスも驚きを隠せなかった。
「ロイド……か」
本来なら、ロイドが宿を出たところで音と気配に気づいていなければならなかったのだろうが、ノイシュと語らう内に気が緩んでしまったのかもしれない。それともこれが親子の血なのだろうか。クラトスは小さく息を整えて、平静な顔を作る。
「すまない。驚かせてしまったようだな」
クラトスが剣を収めるのを見て、ロイドは大きくため息をついた。
「驚いたなんてもんじゃねーよ」
「私の背後には立たないほうがいい」
「そうする……」
恨めしげに言った後、ロイドは不思議そうにノイシュとクラトスを見比べた。
「あんた、動物が好きなのか？」
「いや、別に」
「……にしちゃあ、ノイシュも敵意を持ってねぇみたいだけど。こいつ他人に慣れないから」

まさか昔飼っていたと言う訳にもいかず、クラトスはふいっと視線をそらした。
「私も昔、動物を飼っていたことがある」
「へえ……」
ロイドは尚も不思議そうにこちらを見ている。自分が動物を可愛（かわい）がる姿というのは、そんなに不思議な光景なのだろうか――とクラトスは微妙な気分になった。
「……ロイド」
クラトスは改めてロイドに向き直った。
今が言うべきときなのではないか――そんな気持ちがよぎったのだ。ロイドは自分の息子で、ノイシュは私たち家族の一員なのだと。
しかし……それを告白することで、さらに大きな問題が積み重ねられることになる。神子コレットの処遇。クラトスの天使としての立場。世界の真の姿。そして母の死の真相。
やはり語るべきではないのだろう。今は生きて再会できた奇跡に感謝するだけだ。
「な、何だよ。何でそんなに俺のこと見つめるんだよ」
ロイドは居心地悪そうに身を捩った。
「……おまえは太刀筋が粗（あら）い。もう少し隙をなくすように心がけるんだな。命を落とさないためにも」
クラトスはそう言い捨てると、ロイドに背を向けて歩き出した。もうすぐ夜が明ける。明日

に備えて休息をとるべきだろう。自分もロイドも。
ロイドがまだ何か言っているようだったが、どうせ自分への文句だろうとわかっていたクラトスは、聴覚機能を絞って、宿屋に戻っていった。

4

レネゲードは主に二つの拠点を利用している。シルヴァラント側トリエット砂漠にあるシルヴァラントベースとテセアラ側北海のフィヨルドに潜むテセアラベースだ。ユアンのレネゲードとしての活動拠点は、衰退世界にあるシルヴァラントベースであった。
その慣れた拠点の通路が、無残に引き裂かれている。有機回路を使った配電システムも、焦げた匂いと共に乾いた悲鳴をあげていた。ユアンは荒々しく床を蹴りながら、横を歩く副官のボータを睨み付けた。
「——何なのだ、この惨状は。クラトス一人にこのていたらくか」
「いえ、半分は息子のロイドによるものです。ご覧の通り設備の損傷は激しく、修理にもかなりの予算が必要になるかと」
律儀(りちぎ)に返すボータに、ユアンは当たり散らしたい衝動をぐっと飲み込んだ。ボータに八つ当たりしたところで、拠点が魔法のように修繕(しゅうぜん)されるわけではない。反乱軍の指揮官という立

場である以上、予算の調達もユアンの仕事だ。それにもう一人の破壊神（ロイド）を拠点に引き入れたのは、他ならぬユアンの指示であった。

神子の再生の旅が始まったことで、クルシスにおけるユアンの仕事も増大した。しかも今回の旅はユグドラシルの監視下にある。レネゲードも今までのように簡単には動けないだろう。ユアンが今後の動き方に頭を悩ませているとき、五聖刃の長であるプロネーマが、クルシスにただならぬ知らせをもたらしたのだった――

「エンジェルス計画のエクスフィア、だと?」

「さようでございまする。唯一の変異成功例を装着した人間を発見致しました」

「それは何者だ!?」

「イセリア村のロイド・アーヴィング」プロネーマは低い声で続けた。「クラトス様が我らを裏切ったときに生まれた子供です」

「あの子供が生きていたと言うのか」

「そのようです。ロイドはフォシテスを負傷させた後、イセリアを立ち去りました。現在はトリエット砂漠へ向かっている模様。おそらく神子を追っておるのかと。いかが致しましょうか。ユグドラシル様の御裁可を仰（あお）ぐ必要があるかと思うのですが」

ユグドラシルにロイドのことを知られてはまずい。ユアンはとっさにプロネーマを止めた。

「……いや、まずは私のほうで確認をとる。報告が事実であれば、私からユグドラシル様に奏上する」

クラトスの息子が生きているのならば、どんなことをしてでも手に入れなければならない。その存在はレネゲードにとって、勝利への切り札になる。息子が人質になれば、クラトスは手足をもがれたも同然だ。それは十五年前に証明されている。逆にもし神子たちと合流すれば、クラトスに自分の弱点を守れる環境を与えてしまうことになるのだ。

プロネーマからユグドラシルに情報が上がるのを押さえたところまではよかった。その後ボータにロイドの捜索を命じ、自らもシルヴァラントベースへ降臨した。首尾よくロイドの捕獲に成功し、あとはクラトスをおびき出すだけであったが——結果はこの有様だ。

ロイドには脱走され、クラトスにはシルヴァラントベースへ易々と侵入され、ボータを始め多くの構成員たちが負傷するという大失態。手にした幸運を留めておくことはできなかった。

「しかしクラトスはともかく、息子にまで手を焼くというのはどういうことだ。見たところ、度胸はいいが動きはただの素人だったが」

ユアンはロイドとの一瞬の邂逅（かいこう）を思い起こした。脱走したロイドが逃げ込んできたのが、ユアンの私室だったのだ。そこで再度捕らえておけば問題もなかったのだが、クラトスの侵入が全てをご破算にしてしまった。

建前上、クラトスはユアンの正体を知らないことになっている。それはクラトスが世界の状

がクラトスにどんな変化を与えるやもしれない。ユアンの正体をユグドラシルに明かすことはないだろうが、言い逃れのできない状況は作らぬほうがいい。そのためにクラトスの侵入を聞いたユアンは、クラトスとの鉢合わせを避けるしかなかったのだった。

ボータは眉間にしわを寄せて頭を下げる。

「面目次第もございません。あのロイドという小僧、確かに動きは素人です。しかしときに驚くような速さと力を発揮致します。訓練を受けた兵士たちが倒されていることも考えますと、ただの人間、ただの子供というには、あまりに強すぎますぞ」

「親が親なら子も子だということか。まあそれも、例のハイエクスフィアの恩恵を受けているためなのかもしれぬな」

一つ仮説はある。それはエクスフィアの親和性だ。エクスフィアやハイエクスフィアは、装着した人間になじむまでかなりの時間を要する。仮にロイドが母親を亡くした三歳の頃からずっとあのハイエクスフィアをつけているのなら、ハイエクスフィアとロイドとの融合はかなり進んでいることになる。それはロイドが負荷なく天使化している可能性を示唆していた。もちろんロイド自身は自らの持つハイエクスフィアにそのような力があるとは知らないから、能力の大部分を使いこなせていないが、天使体としての戦い方を知ったとき、今の力など比べものにならない脅威になる。

他にも気になることはある。例えばハイエクスフィアやエクスフィアを制御するためには、要の紋という装置が必要になる。ハイエクスフィアとエクスフィアは似て非なるものであるため、エクスフィア用の要の紋でハイエクスフィアの制御はできない。ロイドが装備しているのは紛れもなくハイエクスフィアなのだが、制御装置はエクスフィア用のものだ。本来ならなんらかの不具合が起きてもおかしくないが、ロイドに異常はみられない。

それに今まで培養体が出産した例はない。母親がエクスフィアに寄生された状態で生まれた子供にどのような影響があるのかはわかっていないが、仮に胎児のときから母体同様寄生されていたと考えるならば、ロイドと彼の持つハイエクスフィアには単なる親和性以上の何かが備わっている可能性もあった。

しかしろくな訓練もなしに天使体を使いこなした者など皆無に近い。ユアンの知る限り、その離れ業をやってのけたのはユグドラシルだけだ。あまり心配する必要もないのかもしれない。

「レアバードの発着室は無事なのだろうな」

「そこまでの侵入は許しておりませんぞ。ご安心下さい」

「そうであってくれねば困る」

ユアンはため息混じりに呟いた。

レアバードの発着室は、シルヴァラント・ベースでもっとも重要な施設の一つだ。レネゲードがクルシスの施設を使うことなく、二つの世界を行き来するためには、レアバードは必要不

可欠である。

全長五・八メートル。全幅五・九メートル。レアバードは翼を開いた鳥の形をした飛行装置だ。エネルギーとして大量のマナを必要とするため、基本的には繁栄世界でしか使うことはできない。しかしレアバードの最大の魅力は、次元の壁を越えて、切り裂かれた二つの世界を行き来できる点にある。この装置によって、レネゲードは文字通り世界を股にかけて活動できる。

ユアンとボータがレアバードの発着室に入ると、レネゲードの雑兵が一台のレアバードを取り囲んでいるところであった。エンジンが止まったばかりの機械仕掛けの鳥の上には、見慣れぬ装束を身にまとった黒髪の女が、緊張した面持ちで立っている。雑兵たちはユアンに気付くとさっと道を空けた。女もそれに気付き、硬い表情のままユアンを見下ろす。

「藤林しいなだ。テセアラ十八世陛下の命を受け、ミズホの里より参上した」

しいなは軽やかな動きでレアバードから飛び降りると、射るような瞳でユアンを睨め付けた。

「ようやくの到着か」

反抗的な様子は、自らの任務に対して否定的であるからだろう。

藤林しいなはテセアラ王国の王室に仕える草だ。彼女の故郷であるミズホの里そのものが、テセアラ王室のために汚れ仕事をも引き受ける諜報部隊であり、その中でももっとも王室に縁が深いのがこのしいなであった。彼女は召喚士の才能を持っており、精霊研究が盛んなテセアラ王国にとって大切なモルモットなのである。しいなが派遣されたという事実は、テセアラ

王室が今回の計画に対して不退転の決意を持ってあたるということを示している。

「時空移動の感想はどうだ」

「――そんなご託を聞くために、あたしを呼び寄せたわけじゃないだろ」

鼻白(はなじろ)むしいなをユアンはあざ笑った。

「暗殺者殿は血気盛んと見える。頼もしいことだな」

「うるさいよ。それより神子はどこにいる」

「そうか。一刻も早く神子を始末して、テセアラに永遠の繁栄をもたらしたいか」

しいなは苛(いら)ついたように奥歯を噛(か)みしめた。

しいなに与えられた計画――それはシルヴァラントの神子であるコレットの抹殺であった。

コレットが世界再生を成せば、マナの流れが逆転し、シルヴァラントは繁栄の未来を享受(きょうじゅ)する。テセアラは衰退世界へと転落し、マナの枯渇(こかつ)という地獄を味わうことになるわけだ。八百年もの間繁栄をむさぼってきたテセアラの人々にとって、それは耐え難い現実であった。この事実をユアンから知らされたテセアラ王国国王テセアラ十八世は、自国の利益のためにシルヴァラントを生贄(いけにえ)として差し出した。コレットさえ殺してしまえば、世界再生はご破算となり、テセアラの未来は約束される。

人間とは愚かなものだ――テセアラの選んだ答えを知ったとき、ユアンは冷笑したものだ。四千年前と何も変わらない。自らの利のためなら、他人の不幸などお構いなしというわけだ。

だがそんな愚かな人間であっても、ユアンは彼らを見捨てられない。それはユアンが愛しただ一人の女性を裏切ることになるからだ。

もっともユアンが選んだこの方法を、マーテルは決して喜びはしないだろう。

かつて騎士と呼ばれた男のすることではないな――ユアンは醜く変わった自らの思想を、自身で侮蔑した。レネゲードを結成したときから、ユアンは騎士としての誇りを泥の海に投げ捨てたのだ。そうしなければユグドラシルの狂った計画を覆すことなどできない。もはやマーテルが望んだ美しい偽善では、世界を変えられないところにまで来てしまったのだ。

「……資料は揃えてある。詳しい話はこのボータから聞くがいい」

ユアンはしいなに背を向けた。

5

ロイドとジーニアスが合流して、再生の旅は一気に騒がしいものへと変化した。自らが招いた厄災でイセリアの村を追放されたことに、ロイド自身思うところがあったのだろう。世界を再生するという旅の目的に一心不乱になって突き進んでいる。少なくともクラトスの目にはそのように見えた。

何故世界再生などという旅が必要なのか。何故試練を乗り越えなければいけないのか。その

ようだ。
結果、どうやって世界再生が訪れるのか。そういった数々の奇妙な謎にはまったく興味がない
　よく調教したものだ――とクラトスは思った。これはロイドだけではない。シルヴァラント
に住む大多数の人々は、ロイドと同じように思考を停止している。旅の同行者の中では飛び抜
けて聡明なリフィルですら、この疑問を積極的に口にしようとはしない。これこそクルシスが
四千年という時間を経て、世界そのものを調律、調教してきた結果だ。この罪はクラトスにも
覆い被さっている。この世界の仕組みを一度は容認し、やがて覆そうとしたものの、結局は黙
認しているのだから。
　トリエットの街を出た一行は、火の封印があると推察される遺跡へと向かっていた。旧トリ
エット跡と呼ばれるその場所は、繁栄世界と衰退世界のマナの流れを管理する場所であった。
ここで神子がハイエクスフィアとの融合処置を受けると、マナの流れを切り替えることができ
る仕組みになっている。無論このことは、ロイドたちは元よりコレットも知らされていない。
あくまで世界再生へと繋(つな)がる神子の試練としか理解していなかった。この切り替え施設はシル
ヴァラントとテセアラに四つずつ存在している。全ての場所に属性の相反する精霊が閉じ込め
られており、彼らの力を持って、大いなる実りを守護しているのだ。精霊の楔(くさび)と呼ばれるこの
守護があるおかげで、大いなる実りは誰の手にも奪われず、二つの世界の中心でマナを滲(にじ)ませ
ている。

全てはユグドラシルが考えたことだ。大いなる実りの中に宿る姉マーテルを守り、その再生を現実のものとするため、壮大な時間稼ぎのシステムを構築した。この仕組みを人間たちに知られないようにするため、ユグドラシルはマーテル教会を利用して、人々の思考を封じている。宗教の負の側面が効果を発揮しているのだ。誰かがこの仕組みに疑問を抱けば、天使に誘導された狂信者たちが神の名の下に粛正（しゅくせい）を行う。かくして人間は世界への疑問を口にしなくなる。人を自由にする筈の宗教が人とその思考を縛（しば）る。緊縛の蓄積は、やがて縛られているという事実を忘却の彼方（かなた）へ押しやり、気付けばユグドラシルに都合の良い社会ができあがっていた。

「あちー……。疲れたー……」

トリエットの街を出るときは異常なまでにテンションの高かったロイドが、遺跡の近くに来た途端、ぐったりとした声を上げた。クラトスは深い思考の渦から強引に引き上げられ、思わず咎（とが）めるような視線で実の息子を振り返った。再三「はりきりすぎてバテないように」と言われ続けていたのに、砂漠の移動ですっかり気力と体力を使い果たしてしまったらしい。

「ほら。やっぱりバテてる」

年少のジーニアスに呆れられても、ロイドはどこ吹く風といった様子で「もう砂漠は飽（あ）き飽きだぜ」と呟いた。自分も妻のアンナも決して飽きっぽい質（たち）ではなかったのだが、いったい誰に似たのだろうか。

不意に横を歩いていたノイシュが怯えた鳴き声をあげた。一行がノイシュを見やると、ノイ

シュは尻尾を丸めて震えだし、やがて一目算に逃げ出してしまう。どうやら旧トリエット跡に巣くう魔物の気配に怯えてしまったらしい。

「あいつ……また逃げやがって。デカイ図体してるくせに、なんであんなに恐がりなんだ」

ロイドの呟きに、クラトスはふとロイドと生き別れたイセリアの森の事を思い出した。ノイシュは命がけでロイドを敵から守ってくれたのだ。そのときの恐怖がノイシュの心を傷つけていたとしてもおかしくはない。プロトゾーンという種は、心が清らかで素直な性質だ。

ロイドたちはノイシュを乗り物代わりに使うことがある。もしも魔物で溢れているような場所で頼られてはノイシュもたまらないだろう。

クラトスは小さくなるノイシュの姿を見送りながら言った。

「魔物に敏感なのだろう。今後も魔物の多そうな場所では、ノイシュをあてにしないほうがいい。可哀想だ」

さらに遺跡を進むと、古びた台座のようなものが見えてきた。コレットは何かに気付いたように台座に駆け寄っていく。今にも砂に足を取られて転びそうな足取りに、クラトスは不安を覚えた。何というか——神子はドジなのだ。神がかりなほどに。彼女はマーテルの遺伝情報に近いという話だが、のんびりしたところは似ているもののここまで抜けたところはなかった。やはり人間は遺伝以上に環境が作り上げるものなのだろうか。

「ねぇねぇ。ここが封印なのかな？　ウチの紋章があるけど……」

　コレットが覗き込むその台座こそ、試練が行われる火の神殿の目印であった。クラトスが何といって説明しようか逡巡していると、突然クラトスの横を怪しい影が走り抜けていった。
「素晴らしぃ!!」
　異様なテンションの声が砂漠の遺跡に響き渡った。クラトスはとっさに剣の柄に手をかける。しかしすぐに怪しい影と声の正体がリフィルだと気付き、警戒を解いて彼女を観察した。
「見ろ、この扉を！　周りの岩とは明らかに性質が違う」リフィルは平静とは違う様子で遺跡を探り出し、地下へ続く扉の前に駆け寄った。「くくく……思った通りだ。これは古代大戦時に魔術障壁として開発されたカーボネイトだ！　ああ、このすべらかな肌触り。見事だ」
　呆気にとられていたクラトスは、対処に困り、思わずロイドに助けを求める視線を送った。
「……いつもこうか？」
　果たしてロイドのほうも困惑しているらしい。彼も彼でジーニアスを振り返る。
「……そうなのか？」
「ああ……隠してたのに……」
　隠していたのはハーフエルフだという事実だけではなかったのか――クラトスは軽いめまいを感じていた。
　だが様子がおかしいだけで、やはりリフィルの頭脳は卓越したものであった。クラトスが導くまでもなく、リフィルはこの遺跡が世界再生に関わるものだと見抜き、コレットを指導した。

彼女さえいれば、クラトスはその正体を暴かれることなく、神子を再生の旅へと導けるだろう。
もっとも導いて良いのかという点に関しては、揺らぎが生じ始めていたが。

遺跡の内部は、侵入者よけのために放たれた魔物が占拠していた。彼らと戦うことで、神子の身体は極限状態に置かれ、ハイエクスフィアとの親和性が高くなる。事実コレットの身体は着実にハイエクスフィアを受け入れていた。可憐な外見とは裏腹に、必死で戦闘に参加する姿は、彼女が仲間から守られたいのではなく、仲間を守りたいという意志を持っていることを感じさせた。またそれ故に、ロイドたちも彼女を守りたいと思うのだろう。

良い仲間だ——クラトスは素直にそう思えた。

だからこそ、この後に起きる出来事が哀れでならない。

遺跡とは名ばかりの、現代より遙かに進んだ魔科学で構築された神殿。その最下層には、マナの切り替えを行うための祭壇があった。試練という名の融和儀式を終えたコレットの前に、一筋の光が差し込む。大がかりな光の演出は、天使の降臨を告げていた。守護天使レミエルの登場だ。

「再生の神子よ。祭壇に祈りを捧げよ」

あくまで慈愛を取り繕ったレミエルの声が響く。コレットは力強く頷き、光の下へ進み出た。

「大地を護り育む大いなる女神マーテルよ。御身の力をここに！」

彼女が祈りを捧げると、その背中に淡い光を放つ羽が広がった。いよいよハイエクスフィアがコレットの身体を蝕み始めたのだ。そうとは知らないロイドたちは、感嘆の声をあげてコレットの羽を見つめている。何も知らなければ、輝く光の羽は美しい。しかしその美しさは毒だ。

「我が娘コレットよ。見事な働きだった」

レミエルが言葉と共にコレットの前に降臨した。娘、とはまたこざかしい言い分である。イセリアの人々の誤解を利用し、コレットの思慕を募らせて旅を強いるレミエルの浅知恵だ。クルシスの使いとしては正しい行動なのだろうが、クラトスは苦いものを感じていた。無論それを表に出すことはしなかったが。

「クルシスの名の下、そなたに天使の力を与えよう」

「はい。ありがとうございます」

「天使への変化には苦しみが伴う。しかしそれも一夜のこと。耐えることだ」

「試練なのですね。わかりました」

コレットは健気に頷いた。その本当の苦しみを、彼女は未だ知らない。

これでいいのか――クラトスは自問する。

この後、コレットの身体には激しい変化が訪れる。エネルギーチャージの方法が書き換えられ、食物摂取の必要が無くなるのだ。味覚が失われ、口にした食べ物は単なる無味無臭の有機物に過ぎなくなる。恐らくゴムの塊を口にするようなものに感じられるだろう。彼女はその事

実をどうロイドたちに知らせるのだろうか。

レミエルは次の神殿の場所を示した後、重ねて「最愛の娘」と語りかけてから姿を消した。

その際、ちらりとこちらに向けた視線は、侮蔑（ぶべつ）の色を放っていた。レミエルはハーフエルフであり、クラトスは人間だ。天使階級としてはクラトスのほうが遥かに高い地位にあったが、差別感情は消せないものらしい。

「コレットに羽が……！」

ロイドが目をしばたたかせてコレットの背中に輝く光の羽を見つめている。

「うん。それにほら、しまえるんだよ」

コレットが羽を消すと、ロイドとジーニアスはまるで新しいおもちゃを見つけた子供のように目を丸めた。

無邪気な姿はクラトスの葛藤（かっとう）を深くした。

ロイドたちは何も知らない。知ろうともしていない。

だがクラトスは全てを知っているのだ。

どうすればいい。

このままユグドラシルの思惑に乗って、世界があるべき姿に戻るのを優先するべきか。それともう一度挑むべきなのか。一度は潰えた理想を現実とするために。

神子の試練はあと三つ。それまでにクラトスは自らの進む道を決めなければならない。

第三章

1

オサ山道はトリエット砂漠の人々にとって、交易のための重要な街道だ。ここを抜けなければイズールド地方の豊かな海産物や、他の大陸の資源を輸送することができない。神子（みこ）の世界再生の旅にしてもそれは同じであった。まずはこの山道を越えてイズールド地方に出なければ、旅そのものが立ち行かなくなってしまう。

「なぁなぁ、海に出たら船に乗るんだろ？」

「船……ね……」

はしゃぐロイドの声に、リフィルが暗い声を絞り出す。何か嫌な思い出でもあるのか、イズールド地方に向かうと決まってから、リフィルの足取りはやけに重そうだった。

「リフィル先生、どうしたんですか？　何だか具合が悪そう……」

浮かない顔のリフィルをコレットが心配そうに見つめている。だが昨夜のことを考えれば、心配されるべきはむしろコレットのほうであろう。

コレットは昨夜『天使疾患（しっかん）』を体験した。ハイエクスフィアとの融和儀式（ぎしき）を終えた神子の身

体は、急激な構造変化を起こす。異物との融合は人体にとてつもない負担を強いる。結果、神子は激しい痛みと高熱にさらされることになる。この症状をロイドたちは天使疾患と命名した。だが天使疾患がコレットにもたらした本当の苦しみを彼らはまだ知らない。コレットもまたその事実を隠していた。

天使疾患は、人として当たり前の感覚を奪い取る。

まずハイエクスフィアがもつエネルギー恒常性によって、経口摂取によるエネルギー補充の必要がなくなり、味覚が完全に失われる。この状態が安定化すると、次は体力回復という作業が必要なくなり、眠ることができなくなる。クルシスでまとめた情報によれば、この段階で正気を失いかける神子が多いのだという。

第二段階を経て、なお試練を耐えぬいた神子は、次に体性感覚を失う。これは身体が無機生命体化することで、大脳が身体全体を異物であると判断するのを防ぐ目的があるらしい。この機構が無ければ、脳は無機生命体化した身体全体が病に冒されたと判断し、激しい激痛をもたらしてしまうのだ。体性感覚を失った身体は、代わりに視覚や聴覚という一部の特殊感覚機能を向上させる。結果として、鋭敏になった様々な感覚からの情報を脳が瞬時に計算し、無機生命体ならではの正確な動きで実行するという、まさに戦闘に特化した身体が作り上げられる。

ここまで来ると無機生命体としての変化は終了する。次はマーテルの器に変換するための準備段階——精神的に死ぬための変化が始まるのだ。

コレットは現在第一段階にある。即ち、味覚が失われた状態だ。だが気丈にも彼女はその事実を誰にも告げないでいた。一見すると儚げな少女の中にある並外れた忍耐力に、クラトスは驚嘆していた。これこそクルシスが長い時間をかけて作り出した、世界再生というシステムの成果だ。死への旅を疑わない神子というシステムが、マーテルの器を作ろうとするユグドラシルの計画を助けている。

つまりはコレットの存在こそが、クラトスと彼の仲間が生み出してしまった罪の結晶であった。コレットが健気に微笑む度に、クラトスは自身の内側で燻り続ける罪の意識にさいなまれた。

暗い澱の中に沈んでいたクラトスは、しかし頭上に感じた僅かな物音——天使体でなければ気付かぬ程の微かな衣擦れの音に、ふっと意識を引き戻された。

誰かがこちらを監視している。クラトスは何食わぬ顔でコレットを振り返り、彼女の立ち位置を確認した。コレットが立っているのは、オサ山道の地下坑道に繋がる非常口の近くだ。クラトスからの距離も近い。監視者が奇襲を仕掛けてきたとしても、坑道を使って神子を守ることができる。

しかしそんなクラトスの心配をよそに、視線の主は一行の前に飛び降りてきた。

「待て！」

クラトスは素早く剣の柄に手をかけ、相手を値踏みした。

奇妙な出で立ちをした女だ。小さな子狐を供に従えている。年の頃は二十歳前といったところか。こちらへの構えは、それなりの戦闘訓練を受けてきたことを告げている。前合わせの衣を帯で締めたあの装束は、シルヴァラントには存在しない代物だ。クラトスは警戒を強めたが、しかしロイドたちは危険を感じていないのか、不思議そうに顔を見合わせている。

「ロイドのお友だち？」

コレットの呑気な問いかけに、クラトスは軽いめまいを感じた。これがあの厳しい試練に毅然と向き合う神子が発する言葉だろうか。思わず諫めようとしたクラトスだが、その前に相手が口を開いてきた。

「……この中にマナの神子はいるか？」

「あ、それ私です」

再びクラトスは我が耳を疑った。明らかに怪しい人物に誰何され、正直に答えるなどあり得ないではないか。クラトスが大地を蹴るのと、謎の女がコレットに襲いかかるのはほぼ同時であった。

「……覚悟！」

低い姿勢で駆け寄る女に、コレットは驚き、仰け反った。女は胸元から紙片を取り出し、それをコレットに向けて突き出す。コレットはたたらを踏んで尻餅をついた。

その瞬間――

重い金属音と共に、女の足下にあった筈の大地が突如消え失せた。女は子狐と共に悲鳴を上げて、地面の穴に落ちていく。どうやらコレットは尻餅をついた拍子に、地下の坑道へ続く非常口の開閉スイッチを押してしまったようだった。本来なら無用な事故を避けるためにロックがかかっている筈である。それが外れていたというのは、先日までこの山道が通行禁止になっていたことと関係があるのかも知れない。何にしても、コレットにとっては幸いであった。クラトスは謎の女と坑道への入り口に興味を示す一行を諌め、早々にオサ山道を抜けるように促した。

女の正体にはおおよそ察しがついていた。

クラトスの記憶が確かなら、彼女の装束はテセアラ王家に使えるミズホの民特有のものだ。しかしここはシルヴァラント。テセアラの人間がおいそれと訪れることのできる場所ではない。恐らくレネゲードの——ユアンの手引きだろう。テセアラはユアンの管理下にある世界だ。接触するのも容易かろう。

クラトスは敵の追跡を逃れるため、歩調を早めて神子の一行を先導した。敵が再び襲ってくることは明らかだ。できることなら足場の悪い山道での戦いは避けたい。それに敵がミズホの民であれば、怪しげな術を多用してくることは明らかであった。未熟なロイドたちを引き連れての戦いは、クラトスにとっても重荷である。

オサ山山頂を越え、なだらかな下り道にさしかかったところで、クラトスの耳に先ほどの女

のものと思われる足音が聞こえてきた。敵は地下の坑道を通ってコレットを追ってきたようだ。クラトスは事前に叩き込んでいた坑道の地図を思い浮かべる。敵が正しいルートを辿ってきたなら、イズールド側にもうけられた非常口から出てくる筈だ。

遠くから響く敵の足音が、徐々に大きくなっていく。

そろそろ来る——クラトスが身構えた瞬間、前方にある非常扉が吹き飛び、奥から怒りに燃えた暗殺者が姿を現した。

「……さっきは油断したが、今度はそうはいかない」

女は再び紙片を取り出し、それを武器のように構える。

「覚悟！」

暗殺者は低い姿勢で走り出し、一気に間合いを詰めてくる。クラトスは回り込むようにして、コレットを庇い、暗殺者の死角へ押しやった。暗殺者は舌打ちすると手にしていた紙片をクラトスの眼前に突きつけ、呪文のようなものを唱えた。直後紙片は、巨大な怪物へと姿を変える。背中に光輪のようなものを背負った怪物は、クラトスに向けて攻撃を繰り出してきた。クラトスは身を仰け反らせてそれを避けると、バク宙するようにして右足で怪物を蹴り上げた。ついでストーンブラストで追撃する。

その間に敵の暗殺者は再びコレットを捕捉していた。彼女に向けて紙片が投げつけられると、そこから黒いエネルギー体のようなものが現れ、蛇のようにうねりながらコレットに巻き付い

た。さらに追撃を加えようとする暗殺者だったが、ロイドがそれに気付き、敵にショルダーチャージをかける。コレットに気を取られていた暗殺者はもろにそれを喰らい、後方へと吹き飛ばされた。ロイドは魔神剣で攻撃しつつ、距離を詰め、一気に剣を振り下ろす。暗殺者はすんでのところで地面を転がりそれを避けるが、逃げた場所にジーニアスによるファイアボールが降り注いだ。こちらは避けきれず、彼女はもろに魔術の炎を喰らってしまった。

暗殺者を守ろうと、謎の怪物が動き出した。すうっと幽体(ゆうたい)のような動きで空を横切り、両手を勢いよく延ばしてロイドの喉(のど)に爪を立てる。クラトスは怪物を背後から斬りつけ、閃空裂破(せんくうれっぱ)で上空へ吹き飛ばした。敵はロイドの首を絞めたまま宙を舞う。しつこく首から離れないその両手は、コレットがチャクラムで切り落とし、ロイドは咳(せ)き込みながら着地した。

怪物が落下してきたところに詠唱(えいしょう)を終えたジーニアスのアクアエッジが叩き込まれると、敵は煙と共に消えてしまう。残されたのは全身傷だらけになった暗殺者のみであった。

「……くっ。覚えていろ！　次は必ずおまえたちを殺す」

暗殺者は煙玉と共に姿を消した。

「待て！」

消えた敵を捜そうとしたロイドの肩をクラトスが摑(つか)んで引き留めた。ロイドは不満げな視線をクラトスに送ると、小さく息を漏(も)らす。

「どうして俺たちが狙われるんだ」

「……いつの世も、救いを拒否する者がいる」
少なくともテセアラの人間であれば、自らの世界が滅びに向かう世界再生など望むべくもない。
「ディザイアンの一員なのかも」
ジーニアスの言葉ももっともであった。彼らに与えられている情報から推察すれば、神子を狙う敵はディザイアン以外には考えられないだろう。
「さあな。いずれにせよ、我々は常に狙われている。……それだけのことだ」
「よし。とりあえず近くの村を探して、船を出してくれそうな人を捜そうぜ」
ロイドが軽快な足取りで歩き出す。
「この辺りだと、どんな船があるのかな。やっぱ漁船が中心かな」
妙にはしゃぐロイドをいぶかしんでいると、ジーニアスがしたり顔でこちらを覗き込んできた。
「ロイドは船が大好きなんだ」
「へへ、まあな。今はまだ半人前だけど、親父の元で修行して技術を磨いて、いつかは自分の船を造るんだ」
表情を輝かせながら将来の夢を語る息子に、クラトスは驚きを禁じ得ないでいた。衰退する世界にありながら未来に希望を持つ姿は、デリス・カーラーンでは久しく見ないものであった。

「……フ。いい夢だな」

「へへっ！　まーなー！　そのためには平和になってもらわないとな」

明るい未来を信じる言葉に、クラトスは懐かしい記憶を刺激され、微かな胸の痛みを覚えた。かつてはクラトスにも、彼の古い友人たちにも、希望があった。皆、笑顔を輝かせて夢を語り合った。悲劇の訪れなど予想もしなかった。

「平和になったら傭兵なんて商売にならないだろ？」不意にロイドが立ち止まり、クラトスの顔を見上げてきた。「そしたらさ、俺の作った船に乗せてやるよ」

クラトスは思わず目を見開く。稚気に溢れた言葉だが、何故か誇らしい気持ちになった。

「……フ。考えておこう」

クラトスの答えに、ロイドは破顔した。

2

パルマコスタはシルヴァラント世界で最大の都市だ。

現在衰退世界に入っているシルヴァラントは、ディザイアンによる侵略と抑圧によって国という社会形態が消滅してしまった。人々は村や町といった小さな集団を拠り所として暮らしている。そんな中にあってパルマコスタは都市国家と称してもおかしくないほどの力をつけてい

た。大規模な港は各地から富を集めることに成功し、豊かな資金は都市を守るための軍隊を支えている。ディザイアンの脅威に真っ向から対抗している町は、このパルマコスタだけと言っても過言ではない。

ただし、それは虚像だ。

劣悪種たる人間如きの反乱分子を、ディザイアンが見逃すわけがない。パルマコスタの市長であるドアは、既にディザイアンの狗であった。抵抗勢力を一つにまとめておけば監視も容易だ。そのための餌がドアでありパルマコスタなのだ。

「マグニス様。準備が整いました」

配下の雑兵が、マグニスの前で頭を垂れる。マグニスは満足げに頷いた。

パルマコスタの中央広場には、怯えた顔の劣悪種たちが集められている。奴らの視線の先にあるのは、広場に作られた処刑台だ。台の上には中年の女が首に縄を打たれ立たされている。

こういった公開処刑は、ディザイアンにとってルーティンワークに過ぎない。ディザイアンの仕事は、劣悪種に恐怖を与え続けることだ。ディザイアンへの恐怖や怒りが、クルシスへの強い信仰を支える。これは崇高な使命なのだ。

「どけ！　マグニス様がお出ましだ！」

雑兵たちがマグニスの露払いをする。波が退くように劣悪種の群れが割れた。恐怖と憎しみの視線が交差する中、マグニスは悠然と広場の中心へ進み出る。

「東の牧場のマグニスだ……」

劣悪種の呟きがマグニスの耳に届いた。マグニスは口の端に笑みを浮かべ、迂闊なことを呟いた男の前に立った。男の目が恐怖に見開かれる。

「マグニス様、だ。豚が……」

マグニスは男の首を掴み、天へと突き上げるようにして骨をへし折った。この瞬間、男は天におわすユグドラシル様への供物となったのだ。劣悪種には身に余る栄誉ではないか。

もはやただの物体となった男を投げ捨て、マグニスは広場に集まった劣悪種どもを睨め付けた。

「この女は偉大なるマグニス様に逆らい、我々へ資材の提供を断った。よって規定殺害数は越えるものの、この女の処刑が執り行われることになった！」

処刑人の宣言に劣悪種たちが戦慄する。その程度のことで処刑が行われるとは思っていなかったのだろう。

「母さん!!」

劣悪種の娘が処刑台の前へ駆け寄ってきた。雑兵に制されて立ち止まるが、双眸は怒りに震えている。どうやら処刑台に立つ女の子供であるらしい。

「そこの女！　下手に逆らうと死んだほうがマシな思いをすることになるぞ」

「ドア総督がそんなことを許すもんですか！」

兵にくってかかる娘の滑稽さに、マグニスは堪えきれずに笑いだした。
何という哀れな娘だろうか。自らが頼り信じる者が、マグニスの配下にあるとも知らずに。
「ドアか……！　無駄な望みは捨てるんだなぁっ！」
マグニスが処刑人に合図する。処刑人はすぐさま巨大な斧を振り上げ、絞首台の床に繋がる縄を断ち切ろうとした。しかし斧が振り下ろされるより前に、衝撃波が広場を横切り、処刑人を吹き飛ばす。
「ダメよロイド！　ここをイセリアの二の舞にしたいの？」
マグニスが声のほうを見やると、銀の髪の女がロイドと呼ばれた赤い服の少年を押しとどめようとしていた。しかし少年は制止を振り切り、広場の前に進み出てくる。抜刀した様を見るに、先ほどの攻撃はあの少年の仕業だろう。
「何言ってんだ！　ここはディザイアンと不可侵契約を結んでるわけじゃねぇだろ！　目の前の人間も救えなくて世界再生なんてやれるかよ」
「私もこんな処刑を見過ごすなんてできません！」
男の横に立っていた金髪の娘も、怒りを顕わにして武器を構えた。
この娘には見覚えがある。兵たちも娘の正体に気付いたらしく、反撃すべきか否か迷っているようだった。
白い装束に身を包んだ金髪の娘。瞳は青く、両手にはチャクラムを持っている。何よりその

面差しは、五聖刃に選ばれた際に拝謁した聖なる女性――マーテルを感じさせた。
娘は再生の神子に違いない。ならばその横にいるロイドと呼ばれた男は――
「おまえが例のエクスフィアを持ってるという小僧か！　こいつはいい！　ここでおまえのエクスフィアを奪えば五聖刃の長になれる」マグニスはロイドを戦斧で指し示した。「――おまえら、あの小僧どもを狙え！」
マグニスの指示を受け、兵たちは一斉にロイドへと襲いかかった。しかし再生の神子の存在が邪魔をして、ロイドに対して決定的な攻撃を与えるには至らない。マグニスはほぞを噛む。
何と邪魔な神子だろうか。神子の存在さえなければ、むやみに剣を振り回すだけの男など簡単に始末できるというのに。本末転倒な話ではあったが、マグニスは再生の神子を始末したい衝動に駆られていた。
とにかく神子とロイドを引き離さなければ、倒せるものも倒せない。マグニスは撤退を考えた。一度兵を退き、神子を引き離す方策を考えたほうが賢明だろう。ならば処刑だけは済ませてしまったほうがいい。
マグニスは処刑台へ駆け寄った。しかし女の元に辿り着くより早く、魔術の炎がマグニスの鼻先をかすめた。軽く身を退いた瞬間、背中に斬撃を受ける。さらなる追撃の気配を感じ、身体をねじるように反転したマグニスの前に、劣悪種の剣士が剣を振り下ろした。致命的ではないものの、剣士の一撃はマグニスの額をしたたかに斬りつけた。マグニスはくぐもった呻きを

漏らす。剣士は芝居がかった仕草で、剣についた血を払い、混乱した広場を鎮めるように声を張り上げた。

「……神子の意志を尊重しよう！」

一瞬、広場から音が消えた。

それは劣悪種たちが、絶望の中から希望を見いだす予兆であった。広場に集った群衆の口からは「神子様」という、熱に浮かされたような呟きが漏れ、やがてそれは怒号となってディザイアンを包囲した。

「あれが神子様なのか！」

「神子様が力を貸してくださるのか！」

熱量を増す群衆の中から、銀髪の女の声が聞こえた。

「みんな、わかってるの？　ディザイアンに逆らうと、この街もイセリアのように襲われるかもしれないのよ」

「そうさ、わかってる！　二度と同じ間違いは繰り返さない。牧場ごと、叩き潰してやるさ！」

ロイドが挑発的に返した。

「どのみち、俺もコレットも奴らに狙われてるんだ。それに俺たちには神子がついてる。世界を再生する救世主がさ！　な、コレット！」

「……うん。私、戦うよ。みんなのために」
神子の答えに、群衆は力を得て暴徒と化した。
「マグニス様。ここはいったん……」
「――わかってる」マグニスは舌打ちしつつ、部下を睨み据えた。「おまえたち！　この連中の始末は任せたぞ」
マグニスの言葉を受け、護衛の兵士たちが再生の神子の一団へと向かっていく。恐らく彼らはここで息を引き取ることになるだろう。
処刑には失敗し、部下を失い、ロイド・アーヴィングを仕留めることも叶わなかった。不意を突かれたとはいえ、あまりに手痛い失策である。
何百年かぶりの敗走に、マグニスは咆吼した。

3

管制室にずらりと並ぶスクリーンには、人間牧場で飼っている劣悪種たちの姿が映し出されている。みな生気の抜け落ちた顔で、意味のない肉体労働に従事させられ、反抗する気力もないようだ。
ディザイアンの人間牧場は、現在シルヴァラントに四カ所存在している。フォシテスが管理

するイセリア地方の人間牧場、クヴァルが管理するアスカード地方の人間牧場、マグニスが管理するパルマコスタ地方の人間牧場、そしてロディルが管理する人間牧場だ。ロディルは人間牧場を海中に設置する計画を立案し、クルシスによって許可された。そのため彼の拠点は海中に存在している。

我ながらいいアイデアであったと、ロディルはほくそ笑んだ。ここならばクルシスの監視の目も届きにくい。腹の内を読まれずにすむ。ロディルが人間牧場を海中に設置したのは、四千年前の古代カーラーン大戦で開発された魔導砲を復活させるためであった。魔導砲の強大な力さえあれば、人間は元よりクルシスすらもロディルの敵ではない。ロディルにとってユグドラシルの提唱する千年王国計画など、実に下らぬ妄想であった。四千年もの時間を消費し姉を生き返らせようとするなど、とても支配者の器ではない。ならばもっと力のある者がユグドラシルに取って代わっても何の問題もないではないか。

しかし障害はいくつかあった。魔導砲の復活には思った以上に金と時間が必要なのだ。今、神子によって世界再生が成されれば、ディザイアンはテセアラへと移動しなければならなくなる。しかし魔導砲があるのはシルヴァラント側の大地であった。現時点で世界再生が成されるのも、マーテルが復活するのも、ロディルには望ましいことではなかった。

「ロディル様。マグニス様より通信が入っております」

オペレーターの呼びかけに、ロディルが頷いた。

　ロディルは管制室の奥に作られた通信室に入ると、立体映像装置を起動させる。
「わしの専用回線へ繋げ」
「遅かったですな、マグニス様」
「俺が外している時に、お前が勝手に通信してきたんだろう！　わざわざ折り返すように伝言を残したのだから、それなりの用件なんだろうな。こっちは気が立ってるんだ。くだらん用件ならただではおかんぞ！」
　映像のマグニスは負傷しているようだった。マグニスがただの人間相手に負傷するとは考えにくい。
　これはちと遅かったかな――ロディルは心の中で舌打ちしながらマグニスに問いかける。
「どうやら怪我をなさった様子ですが、どうしたのですかな？」
「フン。なんてことはない。ただ、ちょっと油断して例の小僧共に、な」
「例の小僧……と申しますと、もしや神子の一行がパルマコスタへ辿り着いたのですか？」
「そうだ！　くそっ、忌々しい。あの小僧、神子と一緒でなければこちらも……」
　しめた、とロディルは唇を舐めた。
「そのことなのですが、プロネーマから連絡がありましてな。今回の神子に関しては問題も多く、クルシスは神子を正当な器とは認めないとの決定を下したそうです」
「な……何!?　しかし、今回の神子はかなり出来がいいと聞いていたが……」

「出来のいい神子は今後いくらでも作れましょう。ですがエンジェルス計画の成功例は、例のロイドとかいう小僧の持つハイエクスフィアだけ。ですから奴らを殲滅し、ハイエクスフィアを回収することが優先されるそうでございますよ」

「……くそっ！　もっと早くそのことを知っていりゃあ、あんなガキども、さっさと始末できたっていうのに！」

マグニスは両手の拳をぶつけ、歯ぎしりしている。実に単純で扱いやすい男だ。ロディルは内心の侮蔑を綺麗に隠し、恭しく一礼した。

「金塊の件も、ユグドラシル様が大変喜んでおられると聞き及んでおります。さすがマグニス様ですなぁ」

「……ふん。下手なおべっかはよすんだな。まあ、話は合いわかった。神子の命はパルマコスタで尽きるだろうよ」

マグニスは下品な声で高笑いしながら、一方的に通信を切った。頭を下げたままそれを確認したロディルは、喉の奥で笑いをかみ殺す。

まったくどいつもこいつも、道化を演じるロディルを疑いもせず、こちらの予想した通りに動いてくれる。なんと使いやすいコマであろうか。

「せいぜい頑張ってくださいよ……マグニスさま」

ロディルはもう通信回線の切れた壁に向かって冷たく呟いた。

4

パルマコスタでディザイアンによる処刑を阻止してからというもの、再生の神子の名はシルヴァラント中に伝搬（でんぱん）し、それに伴い様々な重責がコレットへと降りかかるようになった。人々は神子にディザイアンの殲滅（せんめつ）と救済を求めてくる。そもそも世界が再生されれば、ディザイアンは滅亡する——もちろん事実は違うが——のだから、人々の要求に応える必要はないのだが、コレットはもちろんロイドも進んでディザイアンとの戦いに身を投じようとしていた。

確かに若い彼らが大局を見られず、目の前で苦しむ人々を助けようとするのはわからないでもない。ましてコレットは世界を救うため、犠牲（ぎせい）になることだけを教えられてきた少女だ。彼女の生い立ちを考えれば、自らの危険を顧（かえり）みず周囲の人々に救いの手を差し伸べようとするのは至極自然であった。

ではロイドはどうなのか。

ドワーフの義父が心正しく育ててくれたことは間違いない。ただまっすぐに悪しきを正し、弱きを救おうとしている。それはいい。人として正しい姿だ。

正しさを理解してなお、クラトスは一抹（いちまつ）の不安を感じていた。

——俺たちには神子がついてる。世界を再生する救世主がさ！

パルマコスタでロイドが発した言葉。神子が世界を再生するのだと謀られた世界では、何の矛盾もない言葉。その言葉がクラトスを苛んでいる。
たき火の中で小枝が乾いた音をたてて割れた。近くで大地に横たわっていたコレットが、静かに瞼を開く。
「……火にあたるといい。ロイドならもう寝ている」
クラトスの言葉に、コレットは小さく頷いて起き上がった。
昨日、コレットは二つ目の封印を解放した。パルマコスタ地方のソダ島にある水の封印である。コレットはハイエクスフィアとの融合による天使疾患で倒れ、ソダ島の浜辺で野営を行うことになった。
コレットの様子を見る限り、天使疾患の二段階目で起きやすいとされる狂化の副作用もなく、痛みと高熱の嵐も過ぎ去ったようだ。コレットは足音をたてないように気を配りながら、クラトスの横に腰を下ろした。
「よかった。ロイド、心配しちゃうから……」
クラトスは頷いた。
今回コレットが失ったのは眠りだ。もはや彼女に睡眠は必要ない。
「クラトスさんは眠くないんですか？」
「……一晩ぐらいどうということはない」

嘘だ。クラトスも眠りを必要とはしない。クラトスは天使体として、睡眠を制御する力を持っている。眠ることもできるが、眠らずとも困ることはない。
「私も……今日は気が高ぶっちゃってるみたいで……」
それも嘘だ。コレットはもう二度と眠ることができない。今の彼女には眠りを制御する力はなかった。身体がハイエクスフィアと完全に融合すればそれも可能だが、コレットが完全な天使体となるときは、彼女の精神が死ぬときだ。
コレットは少しずつ人ではなくなっている。そのことを隠し続けている。彼女が隠し続けるなら、クラトスは気付かぬ振りをしてやらねばならない。
「旅はどうだ」
クラトスが尋ねると、コレットは少し驚いた顔になった。それからはにかんだ笑顔になる。
「楽しいです」
今度はクラトスが驚く番だった。
決して楽な旅ではない。ましてこの旅はコレットにとって死出の旅だ。
「……不謹慎（ふきんしん）ですよね、こんなの。でもずっと祭司様と私だけで旅をするんだと思っていたから、ロイドたちが一緒に来てくれて、毎日いろんな事があって、本当に幸せなんです」
「幸せ、か……」
誰もがコレットに頼り、すがり、犠牲を強いる。それでも彼女は幸せなのだという。

これがクルシスの生み出した歪みだ。
人々が種をまき、ユグドラシルが育て、クラトスが守ってしまった歪み。
幸せだと思うことを咎めることはできない。幸せの形は自由だ。だが、たった一つの答えにしか辿り着けないように仕組んでおいて、その答えこそが幸せだと思わせるのはまやかしだ。
前回もそうだった。
前回の神子アイトラも、まやかしの幸せを自らの意志で選び取ったのだと信じ、命を落とした。
「クラトスさん、守ってあげてください」
「守る？」
「ロイドを……それにみんなを」
人が運命の岐路に立つとき、選ぶべき道の果てに小さな光が灯る。それが現か幻かは、光の傍に近づかなければわからない。わからないながらも、光を信じ歩き出す。信じることができなければ、ただその場に立ち尽くすしかない。
クラトスが選び、信じた光は、いつも幻であった。
幻であることに怯え、選ぶことを拒絶したこともあった。
そうして今、クラトスは再び岐路に立っている。
今度の光もまやかしだろうかと疑いながら——それでも足は、光を求めて一歩を踏み出した。

第四章

1

ユアンがヴェントヘイムの玉座の間へと足を踏み入れるのは久方振りのことであった。ユアンは常に青年の姿でいるユグドラシルを快く思っておらず、ユグドラシルもまたユアンを遠ざけていたためだ。だからというわけではないのだろうが、玉座の前にプロネーマの姿を見つけたとき、ユアンは安堵(あんど)にも似た気持ちになった。

「待ちかねたぞ、ユアン」

「はっ」

ユアンが跪(ひざまず)き、頭を垂れる。ユグドラシルは深い翠(みどり)の瞳(ひとみ)を細めた。

「今プロネーマから、神子(みこ)コレットの報告を受けていたところだ」

平静な振りを装ったものの、ユアンの頬(ほお)の筋肉が微(かす)かに震える。ユグドラシルは優雅に足を組み直した。

「――さて、プロネーマ。続きを頼む」

プロネーマは、二人の間に横たわる重苦しい雰囲気に一瞬困惑した表情になったが、すぐに

ユグドラシルへと向き直った。
「はい。神子はトリエット地方にある火の神殿で封印の解放を行った後、海路をとってパルマコスタ地方に入りました。さらにその十日後には水の神殿で封印の解放に成功、ハイエクスフィアとの融合は第二段階に進んだ模様でございまする」
この報告は初耳であった。ユアンが閲覧（えつらん）できたのは、イセリアからイズールドまでの第一区域を管理するフォシテスの報告書だけだ。神子がパルマコスタに到着したなら、第三区域を管理するマグニスからの報告がクルシスに届いていなければならない。
「マグニスからの報告書がまだクルシスの管理室に届いていないようだが、どうなっているのだ」ユアンはプロネーマを睨（にら）み据えた。「まさか我らクルシスに隠している情報があるのではなかろうな」
「まあ、そう興奮するな」
ユグドラシルが、玉座の上でつまらなそうに横を向く。
「マグニスなら死んだ。報告書が届くことは永遠にない」
ユアンは思わず声を荒げた。
「どういうことだ！」
五聖刃（ごせいじん）であるマグニスは、ディザイアンの最上級幹部だ。そのマグニスが死んだとなれば、当然ユアンの元へも連絡が来る筈（はず）だった。それが届いていないとなれば、ユアンは意図的に情

報を遮断されていることになる。
ユアンが反クルシスの活動を行っていることを気取られたのかとも思ったが、ユグドラシルはレネゲードなど雑魚とすら思っていないため、興味がないというのが現実だ。まだユアンの計画については知られていない筈であった。
ユアンの怒りにユグドラシルは冷笑し、小さく肩を竦めてみせた。
「詳しいことは何もわかっていないのだ。そうだな、プロネーマ」
「はい。マグニスは神子がパルマコスタに入ったことも報告しなかった故、我らが神子の足跡に気付いたのは、水の神殿の封印が開いたときでございました。マグニスに事情説明を求めようとしたのですが、その前にパルマコスタ牧場が自爆したのでございまする」
次々と明らかになる事実に、ユアンは暴れ出したい衝動を抑えて深呼吸した。
——腹が立ったときこそ、深呼吸して、一拍間を置いて。そうしたらあなたは変われるわ。
思い出の中の愛しい人に諭され、ユアンは冷静さを取り戻す。
「……自爆、とはどういうことだ」
「次元移動の際に使用する施設消去プログラムが作動したようです」
ディザイアンの主要施設には、二つの世界が反転したときのために、自爆プログラムが用意されている。衰退世界が繁栄世界へ切り替わったとき、神子による再生が成功した証に、ディザイアンの施設を消滅させるためだ。当然のことながら、このプログラムは神子が救いの塔に

辿り着くまで発動させてはならないものだった。
「まさかマグニスが作動させたのではあるまいな」
プロネーマが硬い表情で首を横に振った。
「あの男に自ら滅ぶ理由があるとは思えませぬ。調査によれば、神子の一団がパルマコスタの自警軍と共に牧場へ攻撃を仕掛けたとか。となれば、神子の一団の仕業と考えるのが妥当かと……」
「神子が人間牧場を破壊したと言うのか？　何故神子がそんなことをする。神子の使命は各地の封印を解いて、救いの塔へ辿り着くことであろうが。それにクラトスが同行しているのだから、ディザイアンとの全面抗争は回避して然るべきだろう」
「同行……といえば、今回神子の旅に同行しているのは、マーテル教会の祭司どもではなく、イセリアの村民であるらしいな」
今まで冷笑したままユアンを見つめていたユグドラシルが、不意に口を開いた。ユアンはぎくりとしてプロネーマを見る。ユアンの視線を受けたプロネーマは、ぎこちなく視線を逸らして俯いた。
なるほど。プロネーマに口止めしておいたロイド生存の一報は、既にユグドラシルの耳にまで届いているようだ。
ユグドラシルは玉座から立ち上がり、悠然とユアンの前へ進み出る。影が伸び、膝をつくユ

アンの全身をユグドラシルの影が暗く覆った。
「大方その無知な同行者どもが、神子をそそのかしたのであろう。まあ、大きな損害には違いないが、今回の神子は特別だからな。千年王国樹立のための尊い犠牲だ」
「ですがユグドラシル様。マグニスが神子の情報を報告してこなかった点は調査の必要があるかと思いまする」
プロネーマが厳しい面持ちで口を開くと、ユグドラシルは流れるような動きでプロネーマの前に進んだ。プロネーマが一瞬身を固くする。ユグドラシルは指先でそっとプロネーマの髪をすくい上げ、笑った。
「さすがはプロネーマだな。組織の綻びを見逃してはならぬということか」
「は、はい……」
「おまえの報告では、マグニスとクヴァルが、今回の神子に対して敵意を持っていたそうだな」
「はい。神子に……というより、同行するクラトス様の息子に対してでございますが……」
「同じことだ。それに今回の神子は姉上そのもの。つまり奴らは、姉上への反逆者でもある。神子を害することは、姉上を害することだ」
ユグドラシルは双眸を怒りに震わせる。彼にとって姉であるマーテルは世界そのものだった。
「では、どうすると？　殺すとでも仰るのですか」ユアンはあえてユグドラシルへ視線をやる

ことなく、空の玉座を睨み据えた。「クラトスに命じれば造作もないことでしょう。神子の旅に同行しているようですから」

ユグドラシルが喉の奥で嗤った。

「……いや、クヴァルにはクラトスの忠誠心を計る試金石となってもらう」

なるほど、とユアンは思った。マグニスのとき同様にクヴァルをも殺すのであれば、クラトスに叛意有りと見なす。神子たちをクヴァルから引き離せば、それをもって忠誠心の証と見なす。しかしユグドラシルもあくどいことを考える。クラトスにとってクヴァルは妻の仇だというのに。

「ではクヴァルの管理区域に神子たちが現れたら……」

ユアンの言葉をユグドラシルが制止した。

「待て。まだプロネーマの報告が途中だ」

ユアンがプロネーマに視線を向けると、プロネーマは申し訳なさげに口を開いた。

「パルマコスタ牧場の自爆から四日後、神子がアスカード地方に現れたとの報告が入りました。その後風の封印が解放され、神子の融合は第三段階へ進んでおりまする」

「もうそこまで進んだのか……」

次の封印を解放すれば、神子の融合は第四段階へと進む。そこまでいけば、マーテルの復活は時間の問題だ。神子を抹殺するか、或いは全ての鍵であるクラトスを始末しなければ、ユア

ンの——そしてマーテルの願いは永遠に叶わなくなってしまうだろう。

「……それで、今神子はどこにいる？　クヴァルの報告も管理室には届いていないが、奴も報告を怠っているのか」

「神子はアスカード地方の人間牧場に現れたとのことにございます」

プロネーマの報告にユアンは顔を引きつらせた。今アスカードの人間牧場には、ボータがレネゲードを率いて潜入している。人間牧場で生産されているエクスフィアを奪い、反乱勢力の戦力とするためだ。ボータにクラトスとクヴァルの相手をさせるのはあまりに酷だ。

「クヴァルはロイドが持つハイエクスフィアの回収を試みたものの失敗し、ロイドは神子共々撤退したそうにございます。神子の一団には、クラトス様の姿もあったと聞いておりまするが……」

「……ならばクラトスはまたも裏切ったのだな」

「まだそうと決まったわけではない」ユグドラシルはきびすを返し、玉座に向かって歩き出した。

「プロネーマは引き続き神子の情報を集めて、私に報告せよ——ああ、何やら妙に神子の動向を気にしているユアンにも、な」

玉座に戻ったユグドラシルがプロネーマを追い払う仕草をした。プロネーマは一礼して玉座の間を後にする。ユアンも退出しようと立ち上がった。しかしすぐに頭上で魔力の高まりを感

じ、素早く身を退く。すると先ほどまでユアンの立っていた場所に光の矢(レイ)が降り注いだ。
「何をする！」
「――戯(たわむ)れだ。その程度、避けられないおまえでもあるまい」
「戯れだと！」
ユアンは飛び散った床材をマントを使って払い上げ、一瞬ユグドラシルの視線を奪うと、一気に玉座へと間合いを詰めた。右手を相手の喉元(のどもと)に食らいつかせ、そこに魔力を込める。しかしほぼ同時にユグドラシルの左手がユアンの手首を掴(つか)んでいた。ユアンが指先に込めた魔力を弱めると、ユグドラシルもユアンの手を軽くいなして払いのけた。
「……プロネーマにロイドのことを口止めしていたそうだな」
ユグドラシルの顔はぞっとするほどに冷たい。ユアンは自然と彼から視線を逸(そ)らしていた。
「情報の信憑性(しんぴょうせい)について、確認を取ってからのほうがいいと思ったのでな。貴様こそ何故神子の情報を隠す」
「何を企(たくら)んでいるのか知らないが……今回ばかりは必死だな、ユアン」
「貴様こそな」
かつての旅の仲間が、今はくだらぬ腹の探り合いを続けている。これも狂った世界に毒々しく花開いた悲劇の一つだと、ユアンは思った。

2

辺りはただ重い沈黙が横たわっていた。
荒れ果てた街の外れに火を焚き、神子の一団はそれぞれ思い思いの姿勢で休息を取っている。
クラトスは夜の闇に横たわる街の残骸(ざんがい)をぼんやりと見つめていた。
街の名をルインという。アスカード地方の中央部にある街だ。いや、街だったと言うべきか。
この街に到る前に、ロイドたちは五聖刃のマグニスを倒し、彼の支配下にある人間牧場を破壊した。その後パルマコスタ地方を北上し、アスカード地方にある第三の封印の解放にも成功した。
全ては順調であるかに見える。だが歪(ゆが)みは少しずつ表面化していた。
第三の封印を解放したことで、コレットはさらなる天使の力を受け継いだ。
感覚の全てと引き替えに。
今のコレットは暑さや寒さはもちろん、物に触れたときにそれが何であるのかを判断する術も失った。完全な天使になればそれらは制御することができる。だが半分が有機体たる人間で半分が無機体である天使という状態のコレットでは、感覚は失われたままになってしまう。もう二度と何も感じることができない。そのままの状態で死んでいく。

今度はコレットも自らの変化を隠しきれなかったらしい。恐らくロイドが何らかの形でコレットの変化に気付いたのだろう。ロイドは最近、ろくに食べようとしないコレットに食事を勧めたり、早く眠るように諭すことをしなくなった。はっきり言葉には出さないが、むしろ彼女の苦しみを労っているように感じられた。ロイドは世界再生と再生の神子というシステムの歪みに気付き始めているのかもしれない。

ならばこれが最初の一歩になるだろう。世界の欺瞞に気付くための。

このルインも欺瞞と歪みの一つだ。クルシスの仕組みが街に破滅をもたらした。ルインはディザイアンの襲撃によって壊滅したのだ。近くの人間牧場から逃げ出した男を匿ったために、街全体が制裁を受けたのだという。生き残った人々も牧場へと連行され、街は廃墟と化してしまった。

この事件に憤ったのはロイドたちだけではない。今までコレットの命を狙ってきた暗殺者の女も、ディザイアンの非道を許すまじと共闘を申し出てきた。暗殺者の名は藤林しいな。藤林という名は、テセアラ王室に仕える草の家名だ。やはり彼女はシルヴァラントと対を成すもう一つの世界『テセアラ』の人間なのだろう。

しいなはたき火から一番離れたところに座り、真剣な面持ちで考え込んでいる。彼女を監視するような場所に座っているのはリフィルだ。用心深い彼女はまだしいなを信じ切っていないようだ。本を読みながらもしいなの気配を気にかけている。コレットとジーニアスはたき火の

前に並んで座っている。ジーニアスは手の甲に装備しているエクスフィアをそっと撫でており、コレットはそんなジーニアスを支えるように身体を寄せている。

一行は世界再生の旅の中で、エクスフィアを入手し、装備していた。危険を伴う旅を成功させるためには、エクスフィアの強化能力が必要不可欠だったのだ。

しかし彼らは知ってしまった。自分たちが戦いに利用しているエクスフィアという石の正体を。クヴァルの支配する人間牧場に潜入し、そこで囚われた人々がエクスフィアの培養体となって死んでいく様を目の当たりにし、惨い現実にさらされた。

皆傷ついていた。そして必死に痛みを乗り越える術を模索しているのだろう。

クラトスは立ち上がり、廃墟となった街の奥へ歩き出した。リフィルが顔を上げるが、クラトスが首を横に振るとそれだけで察したらしく、再び本の上に視線を落とす。読んでいる振りなのは明白だった。

瓦礫を避けながら進むと、水辺へ出た。そういえばルインには湖があった——遠い記憶がふわりと甦る。水辺に沿ってしばらく進むと、焦げて半壊した建物の影に人の気配を感じた。それが捜していた人物であることはすぐに分かった。微かな呟きが風に乗って聞こえてきたからだ。クラトスはゆっくりと息子の元へ歩み寄った。

「母さん……。こんなものに命を吸い取られてつらくなかったのか？　俺がこれを使ってそれが許されるのか？」

「おまえならどうなのだ？」
　今までクラトスの存在に気付かなかったらしい。ロイドは飛び跳ねそうな勢いで振り返り——それから力なく肩を落とした。
「もしもおまえがエクスフィアに命を吸い取られたとしたら、おまえはどうしてもらいたい？」
「俺は……」
「……私ならこの世界の悲しい連鎖（れんさ）を断ち切る志を持つ者に役立ててもらいたい。そうすることで……私が犯した罪が少しでも贖（あがな）えるのならば……」
　そこまで言いかけて、クラトスは自分が余計なことを口走ったことに気付いた。
　おかしなものだ。ロイドを育てたのは妻とは関わりのないドワーフである筈なのに、心根のまっすぐなところが彼女に似ている。嬉しければ喜び、楽しければ笑い、悲しければ泣く。当たり前の感情を、隠すことなく恥じることなく、てらいもなく顕わにする。クラトスにはどうしてもそれができない。できないからこそ憧（あこが）れ、その感情に触れると、心の奥に封じていた何かが制御できなくなるのだ。
「あんたの……罪？　それは……？」
「……私のことはいい。要はおまえがエクスフィアにどう接するかだ」
　クラトスは強引に話を切り上げた。困惑するロイドを無視して、足早にその場を立ち去る。

今、クルシスには問題が起きている。それはウィルガイアを離れているクラトスの目にも明らかであった。

クルシスとディザイアンにとって、神子は必ず守るべき存在だ。神子を攻撃するのは、あくまで負荷を与えてハイエクスフィアとの融合を促進させるための手段に過ぎない。

だがパルマコスタの人間牧場を支配していたマグニスは、クルシスからの命令で神子を始末するのだと思い込んでいた。ユアンとレネゲードによるミスリードの結果とも考えられるが、五聖刃クラスを謀るとなれば、ユアンも正体が発覚することを覚悟する必要がある。正体をさらけ出してまで、マグニスを動かすとは考えにくい。クルシスの内部にいる別の何者かが、マグニスを騙(だま)し、煽動(せんどう)したと考えるのが妥当だろう。

これはクラトスにとってチャンスでもあった。クルシスが混乱し、疑心暗鬼になっているであろう今ならば、クラトスも自由に動く事ができる。

自らの置かれた状況に疑問を抱くことなく――抱く機会すら与えられず、ロイドたちは世界再生を盲信してきた。彼らがこの世界の歪みに気付くには、歪みの構造の一部を見るより他はない。神子の変化は歪みの一つだ。

そしてシルヴァラントにはもう一つ、歪みの縮図が存在する。

シルヴァラントの人々は、ディザイアンが人間を牧場に連行することの意味を知らない。あの場所が牧場と呼ばれる意味を知らない。

だがロイドたちはそれを知ってしまった。

「——牧場を作ろうと思っている」

いつものように長い足を組んで玉座に座るユグドラシルから、およそ似つかわしくない言葉が発せられた。

「何を言っている、ミトス」

ユアンは眉を顰めた。まるでユグドラシルが狂ったと言わんばかりの顔をしている。

「食糧問題でも解決しようというのか？」

「私が食糧問題に悩んでいるとでも思っているのか。私が考えているのはエクスフィアの製造だ」

クラトスとユアンは顔を見合わせた。

エクスフィアなど何に使うというのか。かつてはハイエクスフィア製造のための素材であったとは聞いているが、現在ではハイエクスフィアの劣化版に過ぎない。

「怪訝そうな顔をするな。エクスフィアとハイエクスフィアは構造がよく似ている。エクスフィア単体でも、上手く加工すればハイエクスフィアと似たような効果を期待できる」

ハイエクスフィアは古代大戦で破壊され、現存数が少なくなっている。ユグドラシルの言う千年王国計画にハイエクスフィアは必須であるため、ハイエクスフィアの捜索はクルシスの急

務とされていた。ユグドラシルはハイエクスフィアが揃うまで、エクスフィアを代用品として使おうと考えているのだろう。

「エクスフィアを研究すればハイエクスフィアの製造方法を甦らせることができるようになるかもしれぬ。そのためにもエクスフィアを製造するための牧場が必要だ」

「理由は分かったが、何故牧場なのだ」

クラトスの問いかけに、ユアンも大きく頷いた。

「エクスフィアを作るならば工場でも研究所でもよかろう。随分と牧歌的な名をつけるのだな」

「牧場がもっともふさわしいと思っただけだ。エクスフィアをハイエクスフィア同様に目覚めさせるためには、人間の身体で培養する必要があるのでな」ユグドラシルは小さく嗤った。

「人間を飼うなら牧場がふさわしいだろう」

それがユグドラシルとユアンが決別するきっかけとなった。

ユアンは人間牧場のシステムをよしとせず、もはやユグドラシルを——ミトスを正すのは無理と判断し、密かに反乱分子を募るようになった。

そしてクラトスは——いや、クラトスもユアンと意見を同じくしていたが、ミトスを裏切ることはできなかったのだ。クラトスがミトスと決別すれば、ミトスは本当に独りになる。ミト

スの姉マーテルが——そしてミトス自身が恐れた真の孤独がミトスを待ち受けている。それがクラトスを押しとどめた。
だが今思えば、その判断は間違いだったのだろう。
クラトスは逃げたのだ。
そして息子のロイドは、今逃げ出したい衝動と戦っている。
エクスフィアが人間の命と引き替えに誕生する石だと知り、自らの力を高める石が母親の身体で培養されていたことを知った。
ロイドだけではない。エクスフィアによって戦いの能力を強化された神子の一団は、エクスフィアを作るために消えていった無辜（むこ）の命の存在を知り、苦しんでいる。
この苦しみを飲み込み、魂（たましい）に刻みつけて、それでも前を向いたときに、次の一歩が始まる。世界の欺瞞（ぎまん）を暴くための一歩が。
恐らくロイドは逃げないだろう。
そうであろうと思うからこそ、クラトスは彼を道標の光と信じたのだ。

3

玉座の間を後にしたプロネーマは、そのままウィルガイアにある通信施設へ向かっていた。

彼女の拠点は、救いの塔の最下層にある。親衛隊と呼ばれる少数のディザイアンが、プロネーマの代わりにシルヴァラント全域の情報を収集している。プロネーマ自身は単独で行動し、ひとたび世界再生の旅が始まれば、救いの塔と人間牧場の往復に終始することになる。五聖刃の長というのは、名前に反して雑務の多い仕事なのだ。この立場に就いて、心底喜びを感じられるのは自分をおいて他にはいないとプロネーマは自負している。だが他の五聖刃たちは、長の立場を曲解し、あからさまな嫉妬心を向けてきた。その筆頭がクヴァルだ。

魔科学の研究者として成功したクヴァルは、肥大化した自尊心の持ち主であった。確かにハイエクスフィアの製造方法を甦らせたことは誇るべき業績と言える。だがハーフエルフという差別を受け続けてきた種の中にあっても、さらに極端な人種主義を標榜するクヴァルはクルシスから疎まれていた。それを知らないクヴァルは、五聖刃の長になり損ねた原因をプロネーマの裏工作だと思い込んでいる。面倒な相手であった。

通信室の中は、さらにいくつかの個室に分けられている。個室の中は三六〇度全面スクリーンになっており、室内中央には台座がしつらえられている。この台座はスキャニングカメラになっており、台座に立っている人物を、通信先に立体映像として送り込む事ができる。

プロネーマは個室の一つに入ると、コンソールからアスカード地方の人間牧場を呼び出した。

「……おや、我らが五聖刃の長殿が、いったい何のご用ですかな」

スクリーンにアスカード牧場の管制室が映った。ウィルガイアにいながらにしてアスカード

牧場へ降臨したような気分になる。あちらにもプロネーマの姿が現れているだろう。無論全てはまやかしなのだが。
「その後どうなっておるのかえ？」
プロネーマの問いかけに、気むずかしげなハーフエルフの男が進み出てくる。クヴァルだ。
「どう……と言われても困りますね。こちらは粛々とやるべきことをやっているだけですよ」
相変わらず虫が好かない男だとプロネーマは思った。こちらのことをてんから馬鹿にしている。己以外の存在は全て無能だと思っている節があるから、プロネーマがクヴァルの怪しい動きに勘付いていることも分かっていないのだろう。
「それよりプロネーマ。あなたに聞きたいことがあります」
「何かえ？」
「先日レネゲードどもがこの牧場に侵入し、エクスフィアを盗んでいったのですよ」
「それはまた……警備がザルであったのだな」
「ええ、確かに。そこで牧場の全システムを見直したところ、外部から不可解なアクセスがあったのです。ディザイアンの上級技官しか使えない権限で、エンジェルス計画の研究データの一部をダウンロードし、改ざんしていた。これはどういうことですかな」
プロネーマの片眉がぴくりと跳ねる。ディザイアンの上級技官とは、事実上プロネーマの親衛隊と五聖刃をおいて他にはない。ハイエクスフィア製造に関わるエンジェルス計画は、最重

要機密としてアクセスが制限されているのだ。
「誰か権限のある者の仕業であろうな。それがどうしたのかぇ」
「とぼけないでいただきたい。これはそちらの仕業ではないのか」
「わらわはエンジェルス計画に興味などない」
「ならば何故あなたの部下の端末から、我が牧場のシステムに侵入した形跡があるのです」
クヴァルの言葉が事実なら、何者かがプロネーマの親衛隊の権限を使い、エンジェルス計画の資料にアクセスしたのだろう。親衛隊の中に覗き屋が存在していたという可能性も否定はできないが、プロネーマは別の犯人に心当たりがあった。同じ五聖刃の一人であるロディルだ。
クルシスではつい先頃も不正な資金の流出が見つかっており、それはマグニスの不審な動きに呼応しているようだった。資金の流出はマグニスの死で止まったかのように見えるが、良くも悪くも単純なあの男に、クルシスを謀るような不正が行える筈はない。それにマグニスが操られていたのであれば、彼を動かせるのは同じ五聖刃——あるいはそれ以上の立場の者でしかあり得なかった。
「……わらわは五聖刃の長として、人間牧場の監視を行っている。それだけのこと」
プロネーマはあえて自らにかけられた疑いを否定しなかった。もっとも疑わしいのはロディルであるが、クヴァルも決して潔白とは言えない。
「クヴァル様。神子の一団がこちらに向かっています」

管制室のモニターを確認していた兵士が声をあげた。クヴァルとプロネーマは、牧場の内部を映すモニターに視線をやる。モニターには赤い服を着た少年と金髪の少女、それにクラトスの姿があった。事前の情報に照らし合わせれば、金髪の少女は神子コレットであろう。とすれば赤い服の少年が、噂のクラトスの息子に違いあるまい。

「……どうやら警備はザルなままのようじゃのう」

クヴァルが目を吊り上げてプロネーマを振り返る。

ほぼ同時に神子の一団が管制室に姿を現した。

「クヴァル、見つけたぞ！」

先頭を切ってきたクラトスの息子が、二振りの剣を構える。

「それがロイドかえ？」プロネーマはまじまじと少年の顔を見つめた。明るい鳶色の瞳は確かにクラトスのものと同じようだ。それに顔の輪郭も似ているように見える。

「なるほど、面影はあるのう」

プロネーマは感心して呟いた。

それにしても、この少年は危険だ。クラトスに似ていれば、それだけユグドラシルの心を揺さぶることになる。

「やはり来たか……」

クヴァルは忌々しげに呟き、すぐにプロネーマを振り返った。

「話を逸らさないでほしいですねプロネーマ！　あなたが私の元からエンジェルス計画の研究データを盗み出したことは明白なのですよ」
「しつこいのぅ。わらわは知らぬと言っているだろう」
「……強情な。さすが、五聖刃の長の座をかすめ取っただけはある」
クヴァルは陰湿な口調でなじった。プロネーマは軽蔑の眼差しで応じる。クヴァルは手にしていた杖でロイドを指し、口角泡を飛ばした。
「プロネーマよ。この劣悪種からエクスフィアを取り返せば五聖刃の長は私となるでしょう。そのときに後悔しても遅いのですよ」
「寝言は寝てから……と申すな。そなたこそロディルの口車に乗って何か企んでおるようじゃが、ユグドラシル様の目、そうそうごまかせると思うでないぞえ」
プロネーマは最後にチクリと言い捨てると、そのまま通信を切った。いや、切った振りをした。プロネーマが台座から降りてコンソールを弾くと、確かに切れた筈の回線が再び接続される。暫しの静寂の後、再びスクリーンに管制室の様子が映し出された。
通信が切断されていた間に、戦いは始まっていたようだ。
クヴァルに対しているのはクラトスとロイド、それに再生の神子であった。
「さて、ロイドとやらどれほどの力を持つものか……」
プロネーマは薄い笑みを浮かべる。

クヴァルは得意の雷撃を中心とした魔術攻撃を繰り出している。前衛はクラトスとロイド。神子は後方支援に徹しているようだ。

ロイドはクヴァルに対して激しく剣を振り回している。スピードタイプなのだろう。剣捌き(さば)は素早くリズミカルで鋭い。クヴァルは呻(うめ)いて距離を取り、雷撃でロイドの足止めをした。クラトスはクヴァルの背後に回り込み、グレイブを詠唱(えいしょう)してクヴァルの雷撃を途切れさせる。その隙を見逃さず、ロイドが空中を回転しながら移動し、クヴァルの頭上から斬りかかった。クヴァルはその一撃を杖で受けとめる。しかし勢いを消しきれず仰(の)け反(ぞ)ったところに、懐(ふところ)へ飛び込んで来たロイドの剣が素早く振り上げられた。下から跳ね上がった剣先がクヴァルの顎(あご)を斬り、続け様に振り下ろされた剣先が、クヴァルの額を縦に割った。

「ぬおっ!?」

クヴァルは額を抑えながら降雷撃を放つが、雷撃が落ちる前にロイドはバックステップで距離を取っていた。入れ替わるように、ロイドの後方から天使の光輪が聖なる刃となってクヴァルを追撃する。神子の天使術だ。これを避ける術はなく、クヴァルは声なき悲鳴を上げる。光の刃に切り刻まれたクヴァルが倒れかけた瞬間、クラトスが床を蹴ってクヴァルの眼前に飛び出し、倒れ込むクヴァルの首に激しい回転蹴りを喰らわせて、弾き飛ばした。完全に脱力したクヴァルの全身は、管制室のコンソールに叩きつけられ、激しくバウンドしながら床に転がっていった。

やふとした太刀筋は、父親であるクラトスに似ている。指南を受けていることは間違いないだろう。
を与えていることは否めない。だが彼の動きは素人のそれではなかった。剣を繰り出す間合いがあった。確かにエンジェルス計画で作られたあのハイエクスフィアが、ロイドに大きな力

「……あっけないものだのう」
プロネーマはぴくりとも動かぬクヴァルの様子を冷ややかに見つめて嘯いた。
それにしてもフォシテスから聞いていた情報と、実際に見るロイドの戦いぶりには大きな違いがあった。確かにエンジェルス計画で作られたあのハイエクスフィアが、ロイドに大きな力を与えていることは否めない。だが彼の動きは素人のそれではなかった。剣を繰り出す間合いやふとした太刀筋は、父親であるクラトスに似ている。指南を受けていることは間違いないだろう。
「……やったぞ。母さんの仇を……倒したんだ！」
スクリーンの中でロイドが呟いた。まるで宝物のように右手のエクスフィアを撫でている。仇という単語に、プロネーマは思わず笑みを漏らす。仇ならまだそこにいるではないか、ロイド・アーヴィング。おまえの向かいに立っている傭兵の男も、おまえの母の仇なのだぞ。
そのときプロネーマの瞳は、力尽きた筈のクヴァルが動き出すのを確認した。傷だらけのクヴァルは、それでもロイドに一矢報いようと、背後から襲いかかる。攻撃はロイドの命を捉えたかに見えたが、それより僅かに早く神子が動き、ロイドを庇って倒れ込んだ。
プロネーマは一瞬青ざめたが、すぐに神子が第三段階にあることを思い出し、胸を撫で下ろした。第三段階まで天使体に変化した身体であれば、あの程度の攻撃で死ぬことはないだろう。
「……許さねぇ！」

傷ついた神子の姿に、ロイドが我を忘れて吼えている。その横ではクラトスもまた怒りに震えていた。二人はほぼ同時にクヴァルの元へ走り寄り、剣を振り下ろす。

一回、二回、三回、四回。

それはあらゆる負の感情がこもった攻撃であった。さしものプロネーマも、仲間であった男のむごたらしい死に様に、一瞬顔を背ける。

「クラトス……この劣悪種があっ！」

「その劣悪種の痛み、存分に味わえ。……地獄の業火でな」

目を背けたプロネーマの耳に、怒りと憎しみに彩られたクラトスの呟きが届いた。

「地獄の業火で焼かれるのは貴様ぞえ……」

プロネーマはスクリーンの向こうにいる裏切り者を睨み据える。ハーフエルフの救世主、偉大なるミトス・ユグドラシルを傷つけた男。人間でありながら重用されてきたというのに、その信頼を踏みにじった男。

今はっきりとわかった。クラトスという人間は、再びユグドラシルを裏切るつもりなのだと。

「コレット。俺はもう我慢できないからな！　みんな、聞いてくれ！」

おそらくはクラトスの裏切りを促したであろう少年の声が聞こえてくる。

「コレットは天使に近づいてる。でも、眠ることもできない。暑さも寒さも痛みも何も感じられない。涙だって出なくなって……！　天使になるって人間じゃなくなるってことだったんだ

よ！」
まったく見るに堪えない三文芝居だ。
プロネーマはいらだたしげにコンソールを叩き、通信を断ち切った。

4

風がその音色を、高く低く目まぐるしく変えながら、荒涼とした山間に吹き抜けていった。
クラトスは風に目を細め、満天の星空を見上げた。深い藍色の空には細長い漆黒(しっこく)の影が天に向かって伸びている。そこがこの旅の目指すべき終着地だ。
ハイマは救いの塔に最も近い村だ。シルヴァラントで世界再生の旅が行われるときはいつもこの村が最終逗留地(とうりゅうち)となる。
もうすぐ夜が明ける。この世界の新しい一日は、神子コレットにとって最後の一日だ。
ウィルガイアからイセリアへ降臨してから数カ月が過ぎた。恐らくロイドや神子たちにとっては、決して短くはない時間だったろう。だがクラトスにはほんの一瞬の出来事だ。その一瞬がどれほど鮮烈であったことか。
クラトスは傍(かたわ)らのノイシュをそっと撫でた。ノイシュは小さく喉を鳴らし、クラトスの身体に頬(ほお)をすり寄せる。古代種であるノイシュは知能も高い。彼にもこの旅がどんな結末を迎えよ

うとしているのかわかっているのだろう。小さな瞳が寂しげに揺れている。

コレットは試練と呼ばれる四つの封印の解放に成功した。結果彼女は、身体の大部分をハイエクスフィアに取り込まれ、人間としてのあらゆる営み、感覚を失い、声をも失った。次の段階は『心』と『記憶』だ。コレット・ブルーネルとして生きてきた十六年間の全てを失い、代わりにマーテル・ユグドラシルの魂を受け入れる。そうすることでコレットは死に、マーテルが復活する。世界再生はマーテル再生の旅でもあるのだ。

だがコレットが迎える結末をロイドは知らない。その秘密はクラトスとリフィルとコレットの三人で守り続けてきた。

朝日がクラトスの背中を刺すように照らした。光は緩やかに広がり、クラトスとノイシュを越えて前方にそびえる救いの塔を浮かび上がらせる。

今日はあらゆる立場の人間にとって激動の日になる。恐らくコレットはマーテルを受け入れるだろう。世界は再生される。シルヴァラントの人々は偽(いつわ)りの救いを手に入れ、クルシスは千年王国樹立へ大きく前進する。

恐らくユグドラシルも、マーテルが目覚めたからと言ってすぐには二つの世界を統合しないだろう。マーテルの融合具合を確認するまで、このままの体制は続くに違いない。今度はシルヴァラントに代わってテセアラが苦しい衰退時代を迎えるのだ。

ロイドたちはコレットを失い、ユアンの希望も潰(つい)えることになる。

このままであるなら。
真の意味での変化を望まなければ。
コレットの天使化とエクスフィア製造の真実は、ロイドたちに世界への疑問をもたらした。
そしてもう一つの世界テセアラからの暗殺者しいなは、この世界に横たわる根本的な歪みの構造を教えた。二つの世界は命の源であるマナを巡って、砂時計のように——或いは天秤のように、繁栄と衰退を繰り返している。一方が繁栄するとき、もう一方は衰退する。必ずどちらかの世界に犠牲を強いるこの仕組みが解消されない限り、真に世界が救われることはない。
今ロイドたちは迷いの中にいる。シルヴァラントを救うために、テセアラを犠牲にしていいのか、と。それぞれの立場で悩み、出口のない思考の迷路を彷徨っている。
今の時点でクラトスにできることは何もない。彼らがどちらの道を選ぶにしても、彼ら自身が考え、決断しなければ意味がないのだ。クラトスが全ての答えをもたらしたところで、それは彼らにとって到底受け入れがたい事実でしかない。もしもロイドが——そして彼の仲間たちが変化を望むなら、そのときは今よりもさらにつらい旅を続けることになるだろう。だからこそ、そこに至る選択は、彼ら自身が負わなくてはならないのだ。
そしてもしも彼らが変化を望まなければ、そのときは残された旅をクラトスが背負う。例え信じた道標の光がまやかしであったとしても、選んだのはクラトス自身なのだから。
クラトスは膝をつきノイシュと視線を合わせた。

ノイシュは気付いている。今日でクラトスと別れることになると。クラトスが叛意を持ったことに、クルシスが気付かない筈はない。最後の最後でクラトスがマーテルの復活を阻止しないよう、何らかの手段を講じてくる筈だ。ロイドたちがどのような道を進もうと、クラトスが共にいては害になる。

「またおまえにつらい役目を頼むことになるようだ」

クラトスが囁くと、ノイシュは大きな耳をぱたぱたと揺らした。

「これからもおまえには、ロイドを見守ってもらわなければならないな」

かつてイセリアでロイドを見失ってしまったときのように——クラトスはそう心の中で言葉を継ぐ。ノイシュはクラトスを引き留めるように小さく鳴いた。クラトスは苦笑して首を振る。

「私には……やらなければならないことがある。私の代わりに……」

「クラトス！　危ない！」

背後からの叫び声で、クラトスははっと我に返った。ほぼ同時にクラトスの左側から刃が振り下ろされる。敵の刃はクラトスの左頬と髪を滑るが、クラトスは構わず膝をついた右足に力をかけ、大地を蹴るようにして岩場の影に立っていた相手の懐へと飛び込んだ。剣を抜きざまに柄で相手の脇腹を打ち、追撃で剣を水平に滑らせる。

「……ぐうっ！」

聞き覚えのある呻き声が敵の口から漏れた。クラトスがはっと顔を上げる。昇り始めた朝日

が逆光となるが、それでもかつての仲間によく似た輪郭が見て取れた。クラトスはとっさに剣を止めたが、刃が相手の骨を砕く振動が伝わってくる。敵は身を捩らせてクラトスから距離を取り、傷を押さえながら、岩の向こうに続く崖下へと駆け下りていった。

「大丈夫か！　クラトス！」

「ロイド、か……」クラトスは剣を収めて振り返る。「助かった。ありがとう」

ロイドは朝日に照らされて、まぶしそうな顔をしながらこちらに駆け寄ってきた。

それにしても——クラトスは自戒する。

それにしても何と人の心は脆弱なのか。ほんの少し前までは、剣の届く範囲に敵が侵入して、気配に気付かないことなどなかった。例え背後に立つ者が実の息子であろうと、躊躇せず剣を抜くことができた。

「……ロイド」

「ん？　何だ？」

「……死ぬなよ」

不意にかけられた言葉に、ロイドは不思議そうに首を傾げた。

「あ？　ああ。何だよ急に」

「……気にするな」

言わずにはいられなかったのだ。この先、ロイドに待ち受けているであろう過酷な運命を思

うと。
そう――実のところ、クラトスはみじんも疑っていないのだ。ロイドが選ぶ道を。
彼が見てきたロイドという少年は、悩みつつ、悔やみつつ、それでも変化を恐れない――そういう人間だった。

5

飛竜の影が雲海の上を流れている。三匹の先頭にはクラトスとコレットが騎乗していた。
救いの塔は孤島に建てられており、陸路から進むことはできない。そのため一行は、ハイマから飛竜に乗って空を進むことにした。一匹の飛竜に騎乗できるのは大人二人までだと飛竜使いに言われ、一行は三組に分かれることになった。常ならばロイドと組むことを望むコレットではあったが、今回はクラトスと組むことになって安堵（あんど）しているように見える。それも当然かもしれないとクラトスは思った。これから死ぬとわかっているのに、その様子を大切な人に見せたいとは思わないだろう。特にコレットのように、自らの哀しみを心にしまい込もうとする少女であればなおさらだ。
コレットは微笑（ほほえ）みながら、雲海を眺めている。とてもこれから死にゆく者とは思えぬ姿であった。

「――神子。この先はもう引き返せないぞ」

クラトスが言外にコレットの意志を確認すると、彼女は笑顔のまま頷いた。クラトスも応えるように小さく顎を引く。それから飛竜の手綱を強く握り、胴体を足で軽く絞めた。クラトスの動きに呼応して、飛竜が一気に下降して雲の中へ飛び込んでいった。

「……すまないが、ロイドたちと距離を取らなければならない」

コレットの返事はない。当然だ。彼女は声を失っている。最後の試練の前に言葉を奪うのは、神子の退路を断つためだという。

二人を乗せた飛竜は、後方を飛ぶ二匹を大きく引き離し、救いの塔の入り口へと降下した。

塔の入り口にはロックがかけられている。あらかじめ許可を受けた人間だけが、この塔の中に入れるのだ。コレットは救いの塔の入り口にある認証システムに手を触れた。このシステムは今まで解放してきた四つの封印と同じだ。神子は封印を解放することで、救いの塔で行われる儀式の練習をさせられている。

神子を確認したシステムが、入り口の扉を開いた。

塔の内側から冷えた空気が流れてくる。コレットは暫し逡巡していたが、やがて意を決したように救いの塔の中へ足を踏み入れていった。飛竜のスピードを速めすぎただろうか――クラトスは空を見上げ、頭上の雲に影がないことを確認してコレットの後に続いた。

内部の作りはウィルガイアとほぼ同じだ。現在の世界からは失われた魔科学の技術が使われ

ている。コレットが不思議そうに内部を見渡していると、奥の部屋から彼女を誘う声がした。
「我が娘コレットよ。奥の祭壇まで進め。そして祈りを捧げよ」
コレットは大きく深呼吸すると、奥にある祭壇の間へと歩みを進める。クラトスはコレットの後ろ姿を見送りながら、開け放たれたままの塔の入り口に人の気配がするのを待った。
「誰を待っているのだ」
背中からかけられた声に、クラトスは全身を硬直させた。それは期待していた人物の声ではない。むしろ恐れていたものだ。
クラトスは動揺を悟らせぬよう、ゆっくりと振り返り、声の主に膝をつく。
「ユグドラシル様」
「まずはご苦労であった、クラトス。だが、まだ全て終わったわけではないぞ」
ユグドラシルはクラトスの横で膝をつき、耳元で囁いた。
「おまえを裏切り者と呼ぶ者がいる。身の証を立てよ」
「身の証とは――」
「息子の首だ」
氷の刃を首筋に当てられたような気がした。クラトスが言葉を失っていると、ユグドラシルは小さく嗤った。
「できぬとは言うまいな」

ユグドラシルがクラトスを控えの間へと促した。そこで神子の儀式が終わるのを待てということだろう。クラトスはその命令に従うことしかできなかった。

ウィルガイアの管制室には、救いの塔の内部にある祭壇の間が映されていた。
祭壇の前には、まるで罪人のように組紐で両手両足を拘束された神子が立っている。その瞳は酷くうつろだ。彼女の後ろには六人のマーテル教会祭司が付き従っている。神子を縛る組紐は祭司たちの手に握られていた。
「神子アイトラよ……。よくぞここまでたどり着いた」
導き手である守護天使レミエルが、アイトラの前に降臨する。しかしアイトラはぴくりとも動かない。
クラトスは苦々しい気持ちで、スクリーンの中の醜悪な映像を見上げた。彼の横で同じようにスクリーンを見ていたユアンがちらりと視線をよこした。
「めずらしいな。おまえが世界再生の儀式を見に来るとは」
「ユグドラシルに命じられた」
「そうか……」
「どうだ。おまえが死へ導いてきた神子の姿は」ユアンは皮肉な口調で続けた。「アイトラも天使化するつらさから逃げようとしたのか？　祭司たちに拘束されているようだが」

世界再生の苦しみから逃れようとする神子も多い。そのようなときは同行する祭司が神子を拘束し、無理矢理旅を続けさせるのだ。しかしアイトラの場合は違う。彼女は第三の試練でハイエクスフィアとの融合に失敗して壊れてしまったのだ。天使化に伴う苦痛で亡くなる神子は少なくない。無事天使化が進んでも心が壊れてしまうこともある。そんな傷ついた神子に、あの祭司たちは文字通り鞭を打って旅を続けさせたのだ。

「人間は昔から変わらんな。自分たちが救われるために、年端もいかぬ小娘を奴隷として差し出すのだから」

「世界と引き替えだと言われれば、そうせざるを得ないのだろう」

「……そうだな。だが、この世で一番醜悪な光景には違いあるまい」

クラトスは答えることができなかった。なるほど醜悪には違いない。だがその儀式を強制し、見世物のように見ている自分たちは醜悪ではないのか。

「テセアラと違って、シルヴァラントは何度も世界再生に失敗しているからな。祭司たちも必死なのだろうが……」

「――それでおまえはいいのか？」

クラトスが尋ねると、言外の意を察したユアンがつまらなそうに横を向いた。

「良いも悪いもない。私はここにいる。それだけのことだ」

救いの塔で行われる最後の試練で、神子は抜け殻になる。それと引き替えにマナの流れが繋

栄世界から衰退世界へと切り替わり、世界再生は完了する。しかしクルシスにとってそれは単なる通過点だ。本当に大事なのはその後器となった神子に、マーテルの魂が宿るかどうかなのである。

ユアンは数百年前からレネゲードの首領として、密かにマーテル復活の阻止を図り、世界再生の旅を妨害してきた。そのためにシルヴァラントは衰退時代が続いているのだ。

「知っていたか、ユアン。今回の旅は次回のための予行練習だということを」

クラトスがぽつりと言った。恐らく知っていたのだろう。クラトスを振り返るユアンの顔からはいつもの冷徹な表情が消え失せていた。クラトスが言葉を継ぐ。

「次の神子が遺伝的にもっともマーテルに近い可能性があるようだ」

「……やはり神子アイトラは捨てゴマか」

ユアンが眉を顰めた。

あまりに切ない話だ。

無論アイトラが真実を知っているわけではない。知っていようがいまいがアイトラは死ぬし、最後の試練まで成し遂げられれば世界再生は行われる。だから予行練習だろうが何だろうが、アイトラの人生には何も変わりがない。それでもこれを切ないと――そして非道だと思わぬ者は人ではない。

スクリーンの向こうでは着々と最後の儀式が進んでいく。

「さぁ、神子アイトラ。今こそそなたに最後に残されたもの、すなわち心と記憶を捧げるのだ。それを自ら望むことでそなたは真の天使となる！」

レミエルの芝居がかった声に、ユアンは鼻を鳴らした。

「奴め、四大天使に任ぜられてユグドラシルの片腕になることを望んでいるらしいぞ。いつでも代わってやるのに」

ユアンは腹を決めている。クラトスにはそれができない。このままではよくないとわかっている。ときにユグドラシルを諌（いさ）め、説得してきたが、全ては無為に終わっていた。

儀式に変化が現れたのは、レミエルの説明が終わった直後であった。神子アイトラに付き従っていた祭司の少年が、アイトラを縛る組紐を断ち切り、逃げ出そうとしたのだ。他の祭司が止めに入るが、少年祭司は魔術を用いて、祭司たちを振り払う。

「あの祭司はハーフエルフなのか」

ユアンの呟きに、クラトスの横に控えていた従卒天使が、抑揚（よくよう）のない声で答えた。

「資料によりますと、神子アイトラが旅の途中で助けたハーフエルフの子供だということです」

「ならば祭司の服を着ていても祭司ではないというわけか……」

祭司ではないから、神子の旅の真実を知らぬままついてきてしまったのだろう。そして命の恩人である神子を救わんとして、一人立ち上がった。

スクリーンの中では、祭司と少年の戦いが続いている。神子アイトラはといえば、戦いの渦の中心でぼんやり立ち尽くしていた。
クラトスは眉を顰めた。
クラトスが世界再生の儀式を見る機会はそう多くはない。クラトス自身、このような光景を見せつけられる儀式が嫌いであったし、ユグドラシルもクラトスに世界再生の情報を隠す傾向があった。理由はわかっている。クラトスの苦言を疎んじているからだ。
スクリーンの向こうで悲鳴があがった。ハーフエルフの少年のものだ。
殺されたか——クラトスは思わず椅子から立ち上がる。
だが映し出されたのは、串刺しになった神子アイトラの姿であった。精神的に傷つき自ら動く事のできなかった筈のアイトラは、それでもハーフエルフの少年が自分のために命をかけてくれたことを分かっていたのだろう。祭司たちの攻撃から彼を庇ったのだ。
救いの塔にまでたどり着いたのだから、痛みは感じていないだろう。だが、もはや生きていないことは明らかであった。
ユアンが逃げるように管制室を出て行った。
クラトスもそうしたかったが、全身が石になったように動かない。
この結末は古い記憶を刺激した。
まだクルシスが作られる前、世界を救おうとして命を落とした女性の、あまりにもむごたら

しい死に様が甦る。

「これでまたシルヴァラントの世界再生はお預けだな……」

ユアンと入れ違う形でユグドラシルが管制室に姿を現した。居合わせた天使たちは、皆、膝をつき最敬礼する。ユグドラシルは淡く輝く光の羽で、滑るようにクラトスの横へやってきた。

「やはりおまえにこれを見せておいてよかった。次回はこのような形で神子の命を失わないようにしなければ――」

ユグドラシルの言葉の途中で、スクリーンの向こうから複数の断末魔の声と魔術の閃光が届いた。呆然としたままのクラトスの瞳に、肉片の飛び散った祭壇の間が映る。もはや生き残りがいないのは明らかであった。レミエルを除いて。

「――掃除が大変だな」ユグドラシルが嗤う。

「……何故……」

ようやく絞り出したクラトスの声に、ユグドラシルは驚いたように目を見開いた。

「どうしたクラトス。もっと凄惨な光景はいくらでも見てきただろう」

「あれは……」

マーテルと同じだ――その言葉が出てこない。口に乗せた瞬間、一笑に付されるのではないかと思うと、声に出すことができない。

あの光景を肯定するユグドラシルは、もはやクラトスには理解できない存在になってしまう。

「……安心しろ、クラトス。次回はこのような無様な結末にはしない。そのためにおまえに見てもらったのだ」

いや、もう随分昔から、ユグドラシルはクラトスの理解を超えたところにいたのだろう。ただそれをクラトスが認めようとしてこなかっただけなのだ。

魔術による爆音の残響が控えの間まで届いた。クラトスは我に返ると、足下のスクリーンに映る祭壇の間を見下ろした。

祭壇には傷だらけになったロイドたちが立っている。彼らの前では、七十年前に哀れな神子を——そしてクルシスの歪みに振り回された祭司たちを肉片に変えた天使が、死の淵に沈もうとしていた。

「馬鹿な……。最強の戦士である天使が、こんな人間共に……」

レミエルは血を吐きながら儀式の間の床へ倒れ込む。ロイドは祭壇の上の立つコレットの元へ駆け寄り、手をさしのべた。

「コレット。戻ってこい！　俺が必ず元に戻してやるから」

しかしコレットは動かない。既に彼女は最後の試練を終えて、天使に変わってしまっていたのだ。

「クラトス」

　クラトスの横で同じく足下のスクリーンを見ていたユグドラシルが、身の証を立てろと促してくる。クラトスは意を決して、祭壇の間へ続く転送装置の上に足をかけた。重力が反転するような独特の浮遊感の後、クラトスは祭壇の間の最上段へ送り込まれる。
「コレット……本当に俺のこと忘れちまったのか？」
「無駄だ。その娘にはおまえの記憶どころかおまえの声に耳を貸す心すらない」クラトスはゆっくりとロイドたちの前へ歩み出た。「今のコレットは死を目前にしたただの人形だ」
「クラトスさん！」
　ジーニアスが目を瞬かせてこちらを見上げる。その姿に、神子アイトラを救おうとしたハーフエルフの少年が重なった。クラトスはゆっくりとジーニアスから視線を外す。
「おまえ、今までどこにいたんだ！」ロイドがこちらに詰め寄ってきた。「何を言ってるんだ!?」
「神子は世界の再生を願い、自ら望んでそうなった。神子がデリス・カーラーンに召喚されることで、初めて封印は解かれ再生は完成される」
「クラトス……？　どういうことだ……!?」
　尋ねかけるロイドの声が僅かに震えている。ロイドも気付いたのだろう。クラトスが決して味方ではないと。
　それでいい。クラトスを本気で敵だと思い、憎むことで、実力以上の力を出してもらわなけ

ればならない。そうでなければロイドはここで死ぬ。
「おまえたちもそれを望んだ。神子はマーテルの新たな身体として貰い受ける」
「どういうことなんだ！　クラトス……答えろ！」
クラトスはその問いかけを無視してコレットへ腕を伸ばした。しかしそれを遮るようにロイドが立ちはだかる。
「そこをどけ」
「クラトス……おまえはいったい何者なんだ」
「……私は世界を導く最高機関クルシスに属する者。神子を監視するために差し向けられた四大天使だ」
クラトスは体内のマナを操り、放射することで、その証を見せた。蒼ざめて輝く光の羽を。
「クラトスさんも、天使なの!?」
「あたしたちを騙（だま）してたのか！」
ジーニアスが、そしてしいなが、それぞれの衝撃を口にする。
「騙すとは？　神子がマーテルと同化できればマーテルは目覚め、世界は救われる。それに不満があるのか？」
その問いかけは、かつてクラトスが自分自身に投げかけたものだ。
世界が救われるのならば、それで良いのではないか。

「そして女神マーテルに身体を奪われることで、コレットは本当の意味で死を迎えるのね」

　リフィルの声も怒りに震えている。あれは自分に対する怒りなのだろう。

「違うな。マーテルとして新たに生まれ変わるのだ」

「……くそ！　やらせるか！　コレットは、俺たちの仲間だ！」

　ロイドが――そして彼の仲間たちが、一斉にクラトスへ襲いかかってきた。

　だが真の力を解放したクラトスにとって、彼らは敵ではない。

　ロイドが持ち前のスピードで一気にこちらへ間合いを詰めてくる。その間にリフィルの攻撃補助術でロイドの力が強化され、常より破壊力を増した双剣が、力強くクラトスの身体へ突き出された。しかしその動きはクラトスの予測の範囲だ。

　紙一重で左に避けると右肘をロイドの後頭部に叩き込む。ロイドはもんどり打って倒れ、床を転がっていく。すると眼前で符が輝きながら散開した。

「炸力符（さくりきふ）！」

　符に囲まれる直前にクラトスは後ろに飛び退り、スライディングするようにして、しいなの足を払う。体勢が入れ替わった。しいなが倒れ込むと同時にクラトスが立ち上がり、床に崩れる直前の身体を蹴り上げ、追撃を加えた。

「閃空裂破（せんくうれっぱ）！」

　しいなは悲鳴すらあげられず崩れ落ちる。

「ロックブレイク！」

クラトスが着地したところに、詠唱を完了したジーニアスの魔術が叩き込まれた。足下から大地の刃が突き上げてくる。しかしクラトスは粋護陣でそれを無効化すると、自らもグレイブで対抗した。同じ地の属性の魔術がジーニアスの足下を襲う。ジーニアスは転がりそうな勢いで走り、何とかそれを避けたが、その隙にクラトスが間合いを詰めていた。

「雷神剣」

素早い剣の突きで吹き飛んだジーニアスの身体に雷撃が命中する。さらなる追撃をしかけるクラトスの前にリフィルが立ちはだかった。弟を庇うように立ち、杖を振り回してクラトスとの距離を取ろうとする。さらに右後方から魔神剣が放たれた。ロイドだ。クラトスはこれもライン移動で軽く避けると、一瞬気取られたリフィルの背後に回り込み、剣の柄で背中を叩いた。リフィルは息を詰まらせながら弟のほうへ倒れ込む。

「先生！」

ロイドがフラフラになりながらこちらへ駆けてくる。後頭部への一撃が効いているのだろう。やたらめったらに振り回す剣を、するりとかわしながらロイドの懐に飛び込んだクラトスは、閃空裂破でロイドを浮き上げ、床に叩きつけたところに剛魔神剣を追撃した。ロイドがたまらず前方に倒れ込む。そのみぞおちを蹴り上げ、仰向けに倒すと、さらに容赦なく腹を踏みつけた。ロイドはひくつき、剣を落とす。それを蹴り飛ばしてから、クラトスはロイドの頭上に剣

を振り上げた。

「……く、くそ……！」

呟き込み、苦痛に顔を歪めたロイドの顔がクラトスへ向けられる。クラトスは頭上で構えた剣を強く握ったまま動きを止めた。

反撃してくれ──クラトスは強く願う。

一度失ったと思った息子の命を、何故自ら奪わねばならないのか。それぐらいならば殺されたほうが良い。クラトスが殺されれば、ユアンもこの世界を救うための手段を手にすることができる。

だがここでクラトスが死ねば、ロイドはユグドラシルによって殺されるだろう。

永遠とも思える一瞬。

見えない鎖に絡め取られたクラトスの頭上から、天使降臨の光が差し込んだ。

「やはりいかなおまえでも、本気で対峙(たいじ)するには到らなかったか……」

言葉と共にユグドラシルがふわりと舞い降りてきた。クラトスは呪縛(じゅばく)から解き放たれ、ユグドラシルに頭を垂れる。ユグドラシルは暫し(しば)クラトスを見下ろしていたが、やがてその視線をロイドのほうへと向けた。ロイドはぼろぼろになった身体を仲間に支えられて、何とか起き上がっていた。

「おまえが、ロイドか……？」

「人に名前を尋ねるときはまず自分から名乗れ」
ロイドの精一杯の抵抗をユグドラシルは鼻で笑う。
「犬の名前を呼ぶときにわざわざ名乗る者はいまい」
「何だと」
「哀れな人間のために教えよう。我が名はユグドラシル。クルシスを……そしてディザイアンを統べる者だ！」
言葉と同時に、ユグドラシルは右腕をなぎ払った。その腕から放射されるマナの圧力が、かろうじて大地を踏みしめていたロイドたちを吹き飛ばす。
力の差は歴然であった。ユグドラシルは滑るようにロイドの前へ移動し、左腕を水平に伸ばした。指先を軽く曲げると、周囲の空間が歪み、そこに大剣が現れる。ユグドラシルだけが使うことを許された、選ばれし者の剣――エターナルソードだ。
「クラトス、異存はないな？」
クラトスは答えなかった。代わりにそっと剣の鞘を握る左手に力を込めた。
ユグドラシルがエターナルソードを振り上げるタイミングに合わせて、彼の脇に飛び込み斬り上げる――そうすれば、最初の一撃はしのげるだろう。
「さらばだ」
ユグドラシルが左手を振り上げようとした瞬間、祭壇の間の入り口で巨大なマナのうねりが

起こった。クラトスは驚いてそちらに顔を向ける。すると何十というレネゲードの兵たちが、一斉に祭壇の間へ攻め込んできた。彼らは互いの魔術を縒り合わせ、電気を帯びた激しいエネルギーの塊を生み出して、ユグドラシルへと放った。ユグドラシルはエターナルソードをひらめかせそれを防ぐ。

その間に祭壇の間はレネゲードの兵たちが占拠していた。彼らはユグドラシルの隙を突き、人の壁を作るとロイドと神子たちを回収する。ユグドラシルはすぐさまエターナルソードを閃かせ、レネゲード兵の壁を肉塊に変えた。しかし追撃を繰り出す前に、ロイドたちの姿は祭壇の間から消え失せていた。

「……小賢しいレネゲードが。まあいい。退くぞ、クラトス」

「御意……」

クラトスは先に飛び立ったユグドラシルに一礼する。

何とか最大の危機は切り抜けた。レネゲードの突入と犠牲がなければ、ロイドは死に、マーテルは復活していただろう。自らの無力を自嘲しつつ、クラトスはロイドたちの消えた先を振り返った。

——死ぬなよ、ロイド。

第五章

1

それは気が遠くなる程長い時間のように感じられた。

千年にも及んだ古代大戦はようやく終結し、世界は新たな一歩を踏み出そうとしている。まずは枯れ果ててしまったマナを生む樹——大樹カーラーンを目覚めさせることが急務であった。大いなる実りを目覚めさせるためには、彗星(すいせい)デリス・カーラーンがもたらす膨大(ぼうだい)なマナが必要だ。しかし百年周期の軌道(きどう)をめぐるデリス・カーラーンの訪れはまだ先であったために、しばらくは大いなる実りから滲(にじ)み出るマナだけで大地を守らねばならなかった。それでも世界を維持し続けるためにはあまりにマナの量が足りない。そこでクラトスたちは精霊の力を借りて一時的に世界を分割することにした。そうしてマナを交互に使い、何とか世界を守ろうとしたのである。

そのために精霊王オリジンから渡されたのが、時間と空間を操ると言われる魔剣エターナルソードであった。

オリジンと契約したミトス・ユグドラシルはエターナルソードを使い、世界を二つに切り分

けた。それぞれの世界を精霊の楔で結び、二つの世界の間に大いなる実りを置くことで守ったのである。
しかし悲劇が——悲劇の皮を被った醜悪な事件が起きた。
デリス・カーラーンが飛来したまさにそのとき、人間はクラトスたちに牙を剝いたのだ。デリス・カーラーンと大いなる実りを我がものにせんと、襲いかかってきたのである。
このときミトスは上空でデリス・カーラーンを大地に繫ぎ止めようとしており、地上にいたのはクラトスとユアンとマーテルの三人だけであった。
三人は大いなる実りを守ろうと必死で戦った。その結果、何とか人間の軍勢を打ち倒すことができた。
マーテルの犠牲によって。
マーテルを失ったミトスは正気を失ったように暴れ、嘆き、やがて大いなる実りが安置された部屋に閉じこもった。
そうして三日三晩、大いなる実りと同化したマーテルの前に座り続けたミトスは、四日目の朝、瞳に危うい光を宿してクラトスとユアンの前に現れたのだった。
「二人共、お願いがあるんだ」
「ミトス！　天使化しているとはいえ、少し休んだほうがいい。身体は耐えられても心が保たないぞ」

ユアンが差し出した手をミトスは力なくはねのける。
「いいんだ。ボクのことは。それより姉さまを助けてほしいんだ」
「助ける？　しかしマーテルは……」
クラトスが言いかけた言葉をミトスが激高して遮る。
「違う！　姉さまはまだ生きてる！　ハイエクスフィアが姉さまの身体の時間を止めてくれてる」
クラトスはミトスが再び暴れるのではないかと危惧し、ミトスの両肩を掴んで落ち着かせようとした。
「それも時間の問題だ。マーテルのハイエクスフィアは人間の攻撃によって傷ついた。再生機能もいずれは停止する。ハイエクスフィアに宿った精神もやがては蝕まれる。それが天使体の死であることは分かっているだろう」
「そんなことはない！　だって姉さまは今、大いなる実りと同化してるんだよ。大いなる実りのマナがハイエクスフィアの崩壊を止めてくれる。ハイエクスフィアが崩壊する前に姉さまの精神を新しい身体へ移せば、姉さまは死なずにすむ」
クラトスとユアンは思わず顔を見合わせた。
確かに今、マーテルは大いなる実りのマナによって守られている。純粋なマナは生命力の塊だ。それとハイエクスフィアの機能があれば、確かに命の期限を延ばすことはできるだ

ろう。

しかしそれは大いなる実りがまだ樹として目覚めていないからこそ成り立っている事象に過ぎない。百年に一度飛来するデリス・カーラーンのマナを照射すれば、大いなる実りはマナを生む大樹となる。そうなればマーテルは樹の養分となって消えていくだろう。そして今まさに、天空にはデリス・カーラーンが飛来しているのだ。

「ミトス。おまえの気持ちはわかる。だが時は満ちた。大樹を復活させねば、世界は滅びるのだぞ」

クラトスが諭すものの、ミトスはかたくなに首を振る。

「滅びないでしょう。そのために精霊たちの力を借りて、世界を二つに分けたんだ」

「だが大樹を目覚めさせなければ、いつまでも世界は分けられたままになってしまう」

「それのどこが悪いの」

「ミトス！」

「永遠じゃない。姉さまを助けるまでの間だよ。姉さまの心を移す身体を作ったら、その後で大樹を目覚めさせて世界を元に戻せばいい」

「しかし――」

「それが許されないのはおかしいよ！　姉さまを殺したのは誰？　デリス・カーラーンのマナを独占したくて、ボクらを陥れようとしたのは誰？　全部人間たちのやったことでしょう？

僕は彼らに滅びろと言っているんじゃない。彼らがほんの少し我慢してくれれば、姉さまが助かるんだって言ってるんだよ！」
「馬鹿なことを言うな！　マーテルは死んだのだ。人間どもに殺された。確かに今は眠っている状態ということもできるかもしれんが、それは大いなる実りと同化してしまったからに過ぎぬ。このまま放置すればマーテルのハイエクスフィアが大いなる実りのマナを喰らい尽くすぞ。そうなれば今度こそマーテルは消滅し、大いなる実りも枯れる」
ユアンの言葉を聞いたミトスは、クラトスの腕をはねのけ、ユアンの胸ぐらに手を伸ばす。
「そんなことない。今ならデリス・カーラーンのマナを使えるからね。大いなる実りのマナを使わなくても姉さまを守ってあげられる」
その瞬間、クラトスもそして恐らくユアンも、ミトスがやろうとしていることを理解した。
デリス・カーラーンはマナの塊でできた彗星だ。その膨大なマナは大いなる実りの中に宿るマナを遥(はる)かに凌駕(りょうが)する。このマナをマーテルに与えれば、大いなる実りを失わずにマーテルを生かし続けることもできるだろう。しかもデリス・カーラーンはミトスとエターナルソードの力によって、上空に繋ぎ止められている。時間と空間を操るというエターナルソードが力を失わない限り、デリス・カーラーンは上空から離れることはない。
つまりミトスは、デリス・カーラーンの飛来を待つ間の一過性の物であった世界分割と、デリス・カーラーンの膨大なマナとを利用して、マーテルを復活させるつもりなのだ。

「……だが、精霊がそれを許すだろうか」ユアンが震える声を必死で抑え込みながら言った。「仮にマーテルを救うまでとしても、オリジンに誓った筈だ。デリス・カーラーンの訪れと共に樹を目覚めさせると」

「オリジンに邪魔はさせない。エターナルソードの力を守るためにも、オリジンは封印する」

ミトスは虚空を睨んだ。何かを思い出すかのように。

恐らくミトスが思い描いているのは、古代大戦が停戦する前に研究されていた精霊炉の応用だろう。エネルギー供給システムである魔導炉の上位版として、精霊を捕らえエネルギー変換する研究が行われていた。

「精霊炉の中核であるケージには半永久的に燃焼し続けるマナが必要だ。それはどうするのだ」

ユアンが尋ねると、ミトスは自らのハイエクスフィアを掴み、そこに願いを託すように答えた。

「封魔の石で封印の土台を作る。後はマナを供給する天使体がいればいい。封魔の石と供給元の天使を魔術で結びつければ、マナの檻が完成する。天使体の命で作るマナの檻だから、理論上は永遠に消えない封印になるよ」

さすがはミトスであった。精霊研究に協力し、召喚を習得したミトスだからこそ、即座に精霊を封じ込める手段を思いつくことができたのだろう。世界分割のための仕組みも、精霊炉

の研究を応用してミトスが考えついたものだった。
もはやこの場にいる誰もが、同じ方向を見ているのは明らかだ。
一人は姉を救いたいと願い、一人は恋人を救いたいと願い、一人は人間の過ちを償いたいと願った。
長い間彼らは世界のために自らを犠牲にしてきたのだ。
たった一度——そうたった一度だけ、自らの仲間のためにその力を使おうとして、誰が責められるというのか。
「マナで檻を作るというなら、私が人柱になろう」
クラトスの言葉に、ユアンとミトスが息を飲む。
「待ってよ、クラトス」ミトスがクラトスの腕を取り、首を振る。「この封印は命と引き替えも同然なんだよ。オリジンを解放するには、マナの供給者が死ぬか体内のマナを体外に拡散させなくちゃならない。マナを外に放出すると助からないかも知れないんだよ」
「だから私がやると言っているのだ。マーテルが目覚めたとき、ミトスとユアンがいなければ話になるまい」
「クラトスだっていなくちゃ困るよ」
「どうせ誰かを犠牲にしなければならぬのなら、やはり私が一番だ。人柱となるのなら、どんなときも生き残れる強さが必要だろう。私なら自分の命は自分で守れる。それだけの腕はある

と自負しているつもりだ」

「ふざけるな！　私でもミトスでもその条件は同じではないか」

「だが私は人間だ。人間の過ちによって今回のことが引き起こされたのなら――全てが終わってオリジンを目覚めさせるときに失われる命は、やはり人間のものであろう」

「そんなの嫌だ！」

ミトスがクラトスの腕を摑む手に力を込める。クラトスはそれを優しくほどき、微笑んだ。

「死ぬと決まったわけではない。普通の人間ならマナを放射すれば危険だが、天使体ならば生命維持機構が働く可能性もある。私を信じてくれ」

「クラトス――信じていいんだよね」

ミトスが不安げにこちらを見上げた。

恐らくは約束を果たすことはできまい――そう思いつつ、クラトスはそれでも笑ってみせた。

これが歪んだ世界の始まりであった。

2

執務室にいたクラトスに、伝令天使がユグドラシルの来訪を告げた。

ユグドラシルがヴェントヘイムの城を出るのは珍しい。クラトスは驚きつつ出迎えのために

立ち上がったが、その前にユグドラシルが執務室へ入ってきた。彼は伝令も護衛も下がらせると、驚くクラトスを尻目にソファーへ沈み込んだ。
「……戻ってすぐに仕事か。おまえらしいな」
クラトスのデスクの上に広がる書類の束を見て、ユグドラシルが呆れた声をあげる。クラトスは黙って頭を下げた。
数カ月に及ぶ世界再生の旅に同行したことで、クラトスの仕事は完全に止まっていた。世界再生に伴う実務はプロネーマが取り仕切っていたが、書類上の処理はまだ終わっていない。それに繁栄世界に変わったシルヴァラントは、新たな管理マニュアルが適用されることになっている。そのための準備も進めなくてはならない。
「まあ、実質この部屋に軟禁されていたようなものだからな。仕事でもするしかなかったか」
ユグドラシルの口から飛び出した過去形の言葉に、クラトスはぴくりと眉を動かした。ユグドラシルもそれに気付き、微笑む。
「そうだ。もうこの部屋にとどまる必要はない」
「ですが、私はクルシスに対する叛意有りと疑われていたのでは」
「叛意はあるだろう。おまえは昔からクルシスの体制には批判的だ」ユグドラシルはつまらなそうに肩を竦める。「おまえを疑っていたのはプロネーマだ。アレの立場では仕方あるまい。同じ五聖刃を二人も殺されたのだからな」

「……はっ」

「私はおまえがクルシスに対して批判的であっても構わない。それより大事なものが私とおまえの間にはある筈だ」

師弟の絆。仲間の絆。それは確かに二人の間にあったものだ。ユグドラシルはふっとクラトスから視線を逸らし、無機質な執務室を見渡した。

「相変わらず飾り一つ無い部屋だな」

「はい」

「ユアンを見習えとまでは言わないが、もう少し何か飾ってはどうだ」

確かにクラトスの部屋には必要最低限のものしかない。執務用の机と椅子、ソファーセット、ライト、書類棚に通信設備——それだけだ。ユアンの部屋は華美であることで有名だ。趣味で集めた名画が壁を飾り、ライト一つとってもアンティークの逸品を使っている。ユアンのことは良い男だとは思うが、どうもあの趣味は受け入れがたい。

「——そんな顔をするな。私はもう少し心の安らぐものを置いてみたらどうかと言っているだけだ。感情を残すことに成功した上級天使として、な」

「……はい」

心のこもらない返事はユグドラシルの予想の範囲であったらしい。彼は「無駄か」と小さく微笑んだ。

「ところでユグドラシル様、ご用件は――」
「用がなければ来てはならぬか」
クラトスが言葉に詰まる。ユグドラシルはすぐにこちらへ背を向けた。
「シルヴァラントとテセアラの逆流プログラムを中断する」
「しかし既にマナの流れは逆転していますが」
「神子の回収を最優先にする」
クラトスは頷き、書類をまとめてブリーフケースに放り込んだ。
「神子は今どこにいるのでしょうか。天使化した今、彼女のマナを辿ればすぐに居所が分かるかと思いますが」
ユグドラシルは首元に手をやり、僅かに顔を顰めた。
「コレットはテセアラにいる」
「テセアラに？　どうやって……」
「所属不明のレアバードが次元の壁を突き抜けた。おそらくレネゲードの手引きだろう」
それはおかしな話だ。レネゲードが神子やロイドを解放するわけがない。むしろ逃げられたと考えるべきだろう。しかしロイドたちが何故テセアラへ行くという選択肢を選んだのかはわからない。テセアラ側がコレットを始末したいと考えていることは、しいなからの情報で明らかだ。

ユグドラシルは執務室の壁に掛かるディスプレイに指を伸ばした。瞬時に上級天使しかアクセスできぬファイルが展開される。クラトスもデスクを離れ、ユグドラシルの横でディスプレイを見つめた。

「……これは神子コレットのファイルですか」

クラトスがユグドラシルの真意を測りかねていると、ユグドラシルはデータをスライドさせ、天使体となった神子の調査結果を表示した。

「これはコレットが天使体になった直後にスキャンした体内情報だ。ＥＸ値を見ろ」

ユグドラシルの示す数値は、コレットの身体が無機生命体であるハイエクスフィアに適合しすぎていることを示していた。

「これは永続天使性無機結晶症の兆候が……」

「そうだ。ハイエクスフィアに身体の機能が負けて、全身が結晶化してしまう」

「ではコレットのケースは失敗ですか」

「何を言っている、クラトス。むしろこれは成功の証だ。姉さまもかつて同じ病気にかかった事があるだろう」

「ならば急いで神子を回収しなければなりません。このまま放っておけばいずれは結晶化して死にます。その前に治療を施さねばなりません」

「——どうやって？」

ユグドラシルの顔が一瞬冷たく歪んだ。クラトスは思わず言葉を飲む。かつての弟子に気圧されるのはこのようなときだ。彼が姉への妄執にとらわれているとき。

ユグドラシルは拳を強く握る。怒りのせいかマナの放射による羽が一際きらびやかに揺れた。

「今クルシスに残るドワーフは、誰一人結晶症を止めるほどの技術を持たないのに」

「以前研究室から逃亡したドワーフなら、結晶症を抑える装置を作れるのではありませんか」

そこまで言ってクラトスは、ユグドラシルが何故自分の元を訪れたのかを悟った。「まさか、私にあのドワーフを……アルテスタを捜せと？」

クラトスは一瞬ロイドを育ててくれた一本気なドワーフを思い出した。もっとも彼はクルシスとは関わりのないドワーフだが。

そうか——クラトスははっと気付いた。クルシスと関係のないドワーフならば、クラトスに力を貸してくれるのではないか。クラトスがこれから行おうとしていることにはドワーフの技術が必要不可欠なのだ。

クラトスの内心の気付きなど露ほども知らず、ユグドラシルが疲れた様子で髪をかき上げた。

「おまえの言う通りだ。アルテスタはテセアラに降りた。しかしその先のことは分からぬ。何者かが意図的に情報を隠しているようだ。テセアラはユアンの管理下にあるしな」

「ユアンがアルテスタを匿うとは思えませんが……」

「だが、些細な情報もコントロールできる立場にある。ユアンはおまえ以上に私に対して反抗

的だからな。この件はおまえに頼みたい。アルテスタの居所を探れ」
「わかりました。ですがコレットの処遇はいかがしますか？」
「プロネーマに回収を命じた。しかし――」
　ユグドラシルはディスプレイに別のデータファイルを展開する。そこには救いの塔による次元移動システムを利用した人間の名前が並んでいた。その中には次元移動システムの使い手としてふさわしくない者の名前も含まれていた。
「何故マグニスが救いの塔からテセアラへ……」
　クラトスの疑問にユグドラシルがため息をついた。
「さぁな。奴は死んだ。だが少なくともマグニスを騙った何者かが独断でテセアラに入っていることは間違いない。プロネーマがこれに気付いて調査を始めている可能性もあるが、ある程度疑ってかかったほうがいいだろう」
　それはどうだろうか――クラトスは心の中で疑問を呈する。他の五聖刃はともかくも、プロネーマのユグドラシルに対する忠誠心は明らかだ。それがわからなくなったのだとすれば、ユグドラシルの孤独という病はより深く重い。
「あまりにも思惑が入り乱れている。クルシスの内部が安全とも言い切れない。そこでコレットは一時捨て置こうかと考えている」
「ロイドたちの傍に置いておくと？」

「奴らにとってコレットは世界と引き替えだと言われても引き下がるのが難しい程の存在だ。滅多なことはするまい。それに天使体となったコレットに手出しできる者もいるまい」
「しかし監視の目は必要でしょう」
「それなら既に用意してある。テセアラの神子だ」
「神子ゼロス、ですか」
クラトスも何度か面識はある。もっともテセアラはクラトスの担当ではないから、さほど詳しいわけではない。確か早くに両親を亡くし、かなり幼い頃に神子の位を継いだと聞いていた。男子なので再生の神子としての資格はない。いずれ遺伝情報に合った娘と強制的に結婚させられることになっている。コレットがマーテルとの融合に失敗した場合は、だが。
「おまえには手間を取らせるが、プロネーマとゼロスにコレットの今後の処遇を伝えてくれ。その後アルテスタの捜索を頼む。――ああ、そうそう。ユアンの奴もテセアラの管理官であるのをいいことに、なにやらウロウロしているようなのでな。見つけたらコレットの件を伝えて、一度クルシスへ戻るように伝えてくれ」
「御意にございます」
クラトスが騎士の礼をとる。ユグドラシルはそれを見下ろすと、もの悲しい顔になった。
「御意、か」
「ユグドラシル様？」

「クラトス——信じていいんだよね」
あのときと同じ言葉を発して、ユグドラシルは一瞬にして少年の姿へ変質する。
あのときとは何もかも違ってしまった。
クラトスは何も答えることができず、ただ小さく頷いた。

3

通信室は相変わらずがらんとしている。警備天使が一人ついている以外は、まったく人影がない。地上との連絡以外に使用することのない部屋だから、訪れる者は少ない。クラトスはいくつかに区切られた通信設備の一つに入ると、テセアラの神子ゼロス・ワイルダーの邸宅を呼び出した。かなり長い間待たされたが、やがて立体スクリーンに赤い髪の青年が現れる。
「——あんた、誰」
「私は——」
「あ、クラトスとかいう天使だったな。何よ、俺さまに何の用？　っていうか、何なのあんたら。入れ替わり立ち替わり連絡してきやがって。何よ、そーんなに俺さまのことが好きなの？　だったらちょっとは気を使って、綺麗(きれい)なお姉さま天使とかを連絡係にしてくれねぇかな。プロネーマ様も美人っちゃ美人だけど、いかんせん性格がキツいわけ」

一気にがなり立てられて、クラトスは軽いめまいを覚えた。まるで言葉の騒音公害だ。
「おまえは神子ゼロスに相違ないな」
「あのさ。俺さまの家に連絡してきて俺さまじゃないわけないでしょーよ。だいたい初対面ってわけでもなし。一応これ、神子へのお告げってことになってるんでしょ？　それらしくしてくれねぇかな。つーか、今俺さま忙しいんですけど。そちらさんのご命令通り、ロイドたちの監視役しなきゃならないんで、旅の支度してるわけ。話があるならさっさと済ませてくれねーかな」
「……わかった。プロネーマかユアンがおまえに連絡を取ってこなかったか」
クラトスがうんざりして尋ねると、ゼロスのほうも苛ついた様子で噛みついてくる。
「だからさー。さっき言ったでしょーよ。っていうか、あんた、何なの？　どういう立場で俺さまに連絡取ってきてるわけ？　クルシスの連絡係はプロネーマ様に変わったんだろ」
クラトスは首を傾げた。繁栄世界の神子に神託を与えるのは、管理官であるユアンの仕事だ。本来ならば五聖刃であるプロネーマが代行することはあり得ない。
「ユアンはどうしたのだ」
「……そりゃユアンも連絡は取ってくるけどよ。プロネーマ様に引き継ぐって話だったぜ。あんた何も聞いてないのかよ」
「ならばユアンとプロネーマから、神子コレットを引き渡す計画を持ちかけられていない



か？」

「――それが？」

突然ゼロスが警戒した態度になった。その様子でクラトスも合点がいった。恐らくユアンはレネゲードとして身軽に動くため、あえてプロネーマに連絡役を代行させているのだろう。そしてゼロスはある程度の事情に精通している。だからこそクラトスの立場や背後を警戒しているのだ。

「私はユアンがどのような立場にあろうと、あるいはお前がプロネーマとどのような契約を交わしていようと、一切興味はない」

ゼロスがすうっと片目を細めた。クラトスは構わず続ける。

「私はユグドラシル様の命により、ユアンとプロネーマが神子コレットを回収する任務を止めなければならない。そのため二人の居所と神子コレットの回収計画を知りたいだけだ」

ゼロスは口の端を歪め、肩を竦めてみせた。

「あーはん？　それを信じろっての？　裏切り者のあんたの言葉を？」

「なるほど。それなりに私の話も聞いているのか」

クラトスが自嘲する。しかしゼロスは何故か苛ついた様子で舌打ちした。

「よく平気な顔をしてられるな。息子まで裏切っているくせによ」ゼロスの瞳が残酷に輝く。

「ロイドっつったっけ？　あの間抜け面したお人好しをさんざん騙しただけじゃ飽きたらず、

今度はスパイを送り込んで操作するってわけだ。いやぁ、麗しい親子愛に涙が出るぜ」
「その通りだ。おまえも役目が分かっているなら、先ほどの問いに答えろ」
ゼロスの顔が氷のように冷たくなる。
「フウジ山岳のレアバード墜落現場で引き渡すことになってる。二人に会いたきゃそこまで来ればいいだろう」
ゼロスは吐き捨てるようにそう言うと、クラトスの返事も聞かずに通信を切った。計画実行の日時に関して何もなかったのはゼロスなりの嫌がらせなのだろうが、コレットのマナを辿ればすぐにわかることだ。
それにしても――クラトスは思わず苦笑する。自分が好かれるようなことをしているとは思わないが、あそこまで露骨に敵意をむけられると妙に微笑ましい。ゼロスにはゼロスなりの思惑があり、そのために必死なのであろうが――やはり若いのであろう。
だが情報提供者としてのゼロスは恐ろしく優秀だ。さんざん喋り倒したが、ユアンやプロネーマの動きを漏らすことはなく、クラトスの立ち位置を窺っていた。
彼は危険だ。クラトスにとってもロイドにとっても、そしてこれから成そうとしている計画にとっても。
ロイドたちに全てを話し協力を求めるということも検討してはみたが、ゼロスの存在がある限りそれは難しいだろう。もっとも今さらクラトスの話をロイドが信じるとも思えなかったが。

クラトスは自身の計画をロイドたちにも隠し通さねばならないことを再確認した。
世界再生に向けた僅かな希望を残すために。

4

繁栄世界テセアラは、王室と教会の二本柱によって支配されている。神子を擁するマーテル教会が世界を導き、その神子に任じられた国王が世界を守る。当初は神子に国王を罷免するだけの力があったが、今ではその力は形骸化しており、事実上の王政社会であった。国王と神子は首都であるメルトキオに居を構え、王立騎士団と教皇騎士団が防衛にあたっている。シルヴァラントでは失われてしまった国としての機能が、テセアラにはまだ存在しているのだ。
首都メルトキオから南南東にしばらく進むと、稜線の美しさに定評のあるフウジ山岳が見えてくる。この山の頂がコレットの回収地点だ。クラトスが受けた報告によれば、レネゲードからレアバードを譲り受けた――あるいは強奪したロイドたちは、レアバードの次元移動機能によってテセアラ世界へ侵入した。しかし直後にエネルギー切れを起こし、フウジ山岳の山頂付近に墜落したのだという。その後テセアラ王室を頼るためにメルトキオへ向かったらしい。
天使化したコレットのマナの波動を追ったところ、彼らはメルトキオからサイバックという学園都市へ向かい、そこからもう一度フウジ山岳を目指したようだった。サイバックではエク

スフィアの研究が盛んだというから、コレットと融合してしまったハイエクスフィアについて手がかりを得ようとしたのかも知れない。その成果の程はわからないが、少なくともコレットが何らかの変化を起こしたという報告は受けていなかった。

フウジ山岳の山道を暫(しば)し進むと、クラトスの耳に悲鳴と怒号が届いてきた。どうやら山の頂のほうで騒ぎが起きているらしい。おそらくはゼロスの言っていたコレット回収計画なのだろう。クラトスは山の上部を見上げ、山頂への最短距離を確認すると、天使の羽を放射して、一気に上空へ飛び上がった。

山頂まで上がると、まず目に飛び込んできたのは傷つき倒れ込むプロネーマの姿であった。さらにその奥ではユアンとロイドたちが睨み合っている。ロイドは二本の剣を構え、ユアンに挑みかかろうと大地を蹴った。クラトスはとっさに剣を抜き、ユアンを庇(かば)うようにしてロイドの攻撃をはじき返す。ロイドはたたらを踏むようによろめき、数歩後ろへ退いた。

「クラトス！」

ロイドの顔が一瞬青ざめ、すぐに怒りで赤くなる。やはりクラトスの話を冷静に聞ける状態ではなさそうだ。クラトスはあえてロイドを無視するように、ユアンへ視線をやった。ユアンのほうもロイド奪取の邪魔をされたと感じたのか憤(いきどお)っているようだ。

「……貴様、何をしにきた！」

「退け、ユアン。ユグドラシル様が呼んでいる」

「くっ……。神子を連れていくのか？」
「いや……一時捨ておく。……例の疾患だ」
「……そうか」
その瞬間、ユアンの中の怒りがスッと消えたのが見て取れた。神子が陥る可能性の高い疾患と言えば、マーテルも患ったあの病であることはクルシスの者なら察しがつく。ユアンは微かに哀れむような表情を浮かべ、コレットを見やった。つられてクラトスも彼女を振り返る。
振り返って我が目を疑った。
コレットの瞳に生気が宿っている。自らの意志を感じる佇まいは、彼女が自我を取り戻したことを物語っていた。クラトスの表情の変化に気付いたのだろう。ユアンがこちらに目配せしてくる。この場を離れてから説明するというつもりなのだろう。クラトスも小さく頷いてそれに応えた。
「ロイド、勝負は預けたぞ」
ユアンがマナを放射して天使の羽を開くと、舞うように空へ飛んでいく。ユアンが天使だと知らなかったロイドたちは、怒りと驚きで顔を歪めながらその姿を見送っていた。
「くそ！　待て、ユアン！」
段々と小さくなるユアンの後ろ姿に、ロイドが怒りの声をあげた。
彼の怒りは何もわからない子供の怒りだ。

大人の世界からは蚊帳の外にされているのに、大人のルールだけを押しつけられ、どう対処していいのかわからず怒りを溜め込んでいる。自分の把握していた世界が崩壊し、見えてきた真実が自らの理解を超えているために、目の前の事象を見るだけで精一杯なのだろう。

「……おまえは何をしているのだ？」

クラトスがロイドの背中に語りかける。ロイドはぴくりと肩を震わせて、それから戸惑った様子でこちらを振り返った。

「な、何？」

「わざわざ時空を飛び越え、テセアラまできて、何をしているのだと言っている」

「それは……コレットを助けるため……」

「神子を助けて、どうなる？　結局二つの世界がマナを搾取しあう関係であることにかわりはない。ただ再生の儀式によって立場が逆転しただけだ」

ロイドがぐうっと言葉を無くす。それは彼にも重々わかっているのだろう。わかっていてもどうにもできないことがある。ロイドの怒りはそれが原因だ。

「テセアラは衰退しはじめてるのかい!?」

藤林しいなが上擦った声を上げた。テセアラ世界に生まれた彼女にすれば当然の心配だろう。それに彼女がかつてコレットを殺そうとしていたのは、テセアラの衰退を止めるためであった。

クラトスは雲の切れ間から見える救いの塔を振り返った。本来二つの世界のどちらかにしか

見えないようになっている救いの塔が、今はシルヴァラントからもテセアラからも望むことができる。ユグドラシルがテセアラ衰退化の作業を中断させたためだ。
「まだこの世界からも救いの塔が見える。あれが存在するかぎりここはまだ繁栄時代にあるということだ。もっとも神子がマーテルの器となったあかつきにはテセアラも繁栄時代に別れを告げることになるだろう」
「くそっ。どうにもならないのか⁉　この歪んだ世界を作ったのはユグドラシルなんだろ！」
ロイドが縋るような目をクラトスに向けた。怒りにさいなまれ、答えの見つからない状況に苦しみつつ、それでもどこかに救いはあるのだと信じたいのだ。
だがここでクラトスが答えを教えても、ロイドにはさらなる混乱が待っているだけだ。答えを正しく理解するためには、解に繋がる式を理解しなければならない。ロイドや彼の仲間たちが真に世界を変えたいと望むなら、彼らが自ら答えを導き出さねばならないのだ。そうでなければユグドラシルが過ごしてきた四千年という時間の重さに打ち勝つことはできない。
「――ユグドラシル様にとっては歪んでなどいない。どうにかしたければ自分で頭を使え。……おまえは、もう間違えないのだろう？」
間違えないという単語を耳にした瞬間、ロイドの頭にカッと血が上ったのがわかった。
それはかつてパルマコスタでロイドが口にした言葉だ。
世界再生というまやかしを信じ、神子を守ると口にしながら結局のところは神子に縋ってい

た。そのことはロイド自身が一番恥じて悔やんでいる。
「ああ、やってやる！　互いの世界のマナを吸収しあうなんて愚かな仕組みは俺が変えさせてやる！」
ロイドは触れられたくない傷に触れられ、激高したようだった。
そのことがクラトスを安堵させる。
ロイドはまだ道を見失っていない。今はまだ状況の変化についていけていないだけで、彼の本質は変わっていない。クラトスが見込んだ通り――そして願った通り、ロイドは救いの道標として今も小さな光を放っている。
「フ……。せいぜい頑張ることだな」
クラトスは内心の喜びを隠し、傷ついたプロネーマを抱き上げてユアンの後を追った。

5

ウィルガイアへ戻ったクラトスは、プロネーマを衛生班の天使に預けると、その足でユアンの執務室を訪ねた。
クラトスが室内に入ると、ユアンはデスクに肘をつき、物憂げな表情で空を見つめている。
クラトスはあえてユアンに声をかけず、ソファーに腰掛けた。

　そのまま暫し沈黙が続いた。ユアンはぼんやりと何事かを考え込んでいる。クラトスにはユアンが何を考えているのか察しが付いていた。
「……永続天使性無機結晶症」ユアンがぽつりと呟く。「あの神子はマーテルと同じ道を歩んでいるのだな」
「そういうことになるな。ユグドラシルの計算通り、もっともマーテルに近い器なのだろう」
　ユアンが苦虫を噛(か)みつぶした顔でこちらを睨み付けた。クラトスはそれを無視する。
「何故コレットは正気を取り戻した？　救いの塔で神子の意識はハイエクスフィアに奪われた筈だ」
「要の紋を取り付けたようだ。しかも出来損ないのな」
「出来損ない？」
「貴様の息子が、壊れかかった要の紋を修理したようだ」
　要の紋は魔科学から生まれたエクスフィアの制御装置だ。見た目はアクセサリーのようだが、無機生命体であるエクスフィアが人の体を侵食するのを防ぎ、逆に無機生命体を自由に制御するために開発された。要の紋がないままでエクスフィアを装着すると、人の体はエクスフィアに乗っ取られ、生ける屍(しかばね)と化してしまう。さらに要の紋がない状態でエクスフィアを剥(は)がされると、人はエクスフィギュアになってしまうのだ。かつてのアンナのように。
　要の紋はドワーフが生み出した技術だ。ロイドが要の紋を修理できるのは、育ての親である

ドワーフから技術を仕込まれたからだとクラトスも聞いたことがあった。
「しかし一般的な要の紋で制御できるのはエクスフィアだけだろう。地上で作られた要の紋でハイエクスフィアを完全に制御することはできない筈だ」
クラトスは首を傾げた。
「ロイドのハイエクスフィアは実験段階のものだ。神子のハイエクスフィアと同じように考えるのは間違っていると思うが……」
「貴様の息子も地上で作られた要の紋を使っているが、制御できているようではないか」
「かもしれんがな……どうも気になる」
それはクラトスも同じだが、ロイドにハイエクスフィアの寄生による弊害は起きていない。世界再生の旅でもそのような兆候は見られなかった。いまは放っておいても問題ないだろう。
「それより神子は大丈夫なのか？　適合しない要の紋はどんな歪みを引き起こすか……」
「……歪みなら、既に生じている」
ユアンはフォルダをこちらに投げてくる。クラトスはそれを左手で受け取り、書類に目を走らせた。フォルダに挟まれていたのは、デリス・カーラーンのコアシステムがシミュレーションした、神子コレットの永続天使性無機結晶症の進行速度だ。これによると不完全な要の紋による寄生行動の抑制のため、コレットの身体の結晶化が進んでいるとの予測がなされていた。
「ユグドラシルは何と言っている。コレットはしばらく放置すると言っていたが、この結果を

見る限り、何らかの手段を講じなければなるまい」
クラトスが尋ねると、ユアンは人の悪い顔になった。
「ロイドたちに治療をさせると言っていたぞ」
「ロイドたちに？　どうやって……。彼らはコレットの病のことも知るまい」
「さあな。何を考えているのか。心配なら貴様がロイドたちに教えてやれば良かろう」
「教えたところでどうなる。永続天使性無機結晶症はハイエクスフィアのバグだ。クルシスの輝石を修理する以外に手の施しようがない。だがそれだけのことができる技術を身につけたドワーフは行方知れずではないか」
「アルテスタが行方知れずだと、何故知っている？　貴様が地上に降りたドワーフに興味を示すとも思えないが」クラトスが答えるより早く、ユアンは不愉快そうに唇の端を歪めた。
「——ああ、そうか。貴様はユグドラシルのお気に入りであったな。大方テセアラの情報を探るように命じられてもしたか」
当たらずとも遠からずといったところか。クラトスは答えず、ただ肩を竦めた。
「ふん、やはりそうか。プロネーマも哀れなことだな。あれほどクラトスに叛意有りと忠告したにもかかわらず、聞き入れてもらえなかったとは」
「そうだな」
ユアンは苛ついたように机を叩いた。

「貴様、よく平然としていられるな！　アンナを失った直後はともかく、何故未だに千年王国計画を遂行できるのだ。ユグドラシルへの忠誠心か」
「おまえも千年王国計画に協力しているのだろう」
「私は——」
「協力している。おまえはテセアラの管理官であり、クルシスの四大天使の一人だ。その立場、忘れたわけではあるまい」
クラトスが言外に忍ばせた意図にユアンもようやく気付いたらしい。唇を噛んで黙り込む。
クラトスはフォルダをテーブルに投げ捨てると腕を組んだ。
「おまえの言う通り、私はテセアラの調査を行っている。神子コレットがどのような動きをしているのか教えて欲しい」
「息子に直接聞けば良かろう」
「おまえが情報一つ集められない無能なら、とうにそうしている」
ユアンはため息をついて、煩わしそうに前髪を掻き上げた。
「奴らはレネゲードのレアバードを使ってテセアラに移動した。フウジ山岳に墜落後、メルトキオを経由してサイバックへ向かい、そこで例の出来損ないの要の紋を手に入れたらしい」
「そこまでは私も承知している。聞きたいのはその後のことだ。テセアラの神子がいるのだから情報は上がっているだろう？」

「それは――」

ユアンが言いよどむのを見て、クラトスはゼロスから聞き出した情報を思い出した。

「ああ、プロネーマが窓口になっていたのだったな。だがおまえのことだ。何らかの形で情報は得ているのだろう。こちらも今さら誰に何を言うつもりもない」

「――ミズホの民の協力を取り付けたようだ。今フウジ山岳で失ったレアバードを取り戻そうとしているらしい」

ユアンが観念したように声を絞り出した。

「見つかりそうなのか？」

「……さて、な」

レネゲードの立場なら、これを好機と見てレアバードの情報を流し、ロイドたちをレネゲードの基地までおびき寄せるだろう。仮にロイドたちがレネゲードに負けて捕らわれたとしても問題はない。コレットは永続天使性無機結晶症のためにマーテルを宿すことはできないし、他の仲間も命を奪う必要はないだろう。またロイドはユアンにとって切り札となる存在であるから、殺すことは考えられなかった。

ユアンがロイドを狙う理由は、クラトスにオリジンの封印を解かせるためだ。ロイドを手元に置けば、クラトスを殺すこともマナを放射させることも可能だと考えているのだろう。

「オリジンを解放すれば全て解決する――と考えているのか？」

クラトスが尋ねるとユアンは小さく笑った。それが肯定であることは明らかだ。
「……そうだな。私もそう思っていた。いや、そう思っていた時期もあった」
「何……」
ユアンがクラトスを睨め付ける。クラトスの言葉の真意を測りかねているのだろう。
「精霊とて、意志を持つ生命体だ。我らの裏切りを許すだろうか」
クラトスはぽつりと呟いた。
それが全てだ。
ユアンは自らの力でエターナルソードを使い、オリジンの力を借りて世界をあるべき姿に戻そうとしているのだろう。だがオリジンを封じたとき、ユアンはミトスの側にいた。一度は自らを裏切ったユアンをオリジンが信じるのか、今さらながらクラトスは疑問に思い始めていた。
もしも信じてもらえなかったら世界はどうなるのか、クラトスには想像が付かない。オリジンの力を失って、二つに引き裂かれた世界は闇に飲まれてしまうのか。あるいは世界の構造はそのままに、精霊たちがデリス・カーラーンへ移動してしまうことも考えられる。仮に精霊たちが世界を救う方向に動いてくれたとして、その世界に人という存在が残れる保証もない。
「我らには精霊の加護を受ける資格がないということか」
「オリジンを納得させるには、新しい時代を生きる人々の力が必要なのではないか」
「新たな時代、か。それをロイドたちに求めているのなら貴様も甘いな。奴らにはもう一つの

「その通りだ。知っているだろう。あれはユグドラシルのために作られた剣だ。ハーフエルフ以外は触れることも叶わぬ。奴らにはハーフエルフの仲間もいるが、剣を振るえるかどうかは疑問だな。剣を持つだけでは駄目なことはおまえにも分かっているだろう。剣を使いこなしてこそ、持ち主として選ばれるのだ」

「エターナルソードに触れる資格か」

資格がない」

「……そうだな」

有象無象の輩からエターナルソードを守るため、オリジンが施したエターナルソードへの守護。それが今、世界の真の再生を邪魔している。

だが一つだけ抜け道があるのだ。

それはミトスがエターナルソードを授けられたとき、自分が傷つき倒れたときのことを想定して、ミトス自身が発案した方法だった。

マナの構成をしばしの間ハーフエルフと同じ状態にすることで、一時的にエターナルソードを使えるようにする。それを現実にする力を持った指輪がエターナルリングだ。

七十年前の離反のとき、地上に降臨したクラトスはこの指輪の行方を探した。オリジンの封印はクラトスの命でなされているのだから、エターナルリングを手に入れたところで何の役に立つわけでもなかったが、僅かな可能性にかけてみようと思ったのだ。

オリジンを解放し、それでも生きながらえていたら――あるいは地上で出会った同志の誰かがクラトスの意志を継いでくれるのなら、エターナルリングが必要になる。それも駄目だったときは、ハーフエルフであるユアンがいる、と。

クラトスは旅の末、エターナルリングを手に入れた。

しかしその後家族を失い、希望は潰えてしまった。クラトスは失意の内にクルシスに戻り、指輪は破壊された。

だが指輪の製作方法はわかっている。もしもあれを復活させることができれば、状況は大きく変わる。

かつてのミトスの姿を思い起こさせるロイドならば、オリジンの信頼を得られるのではないか。少なくともオリジンの封印に関与したクラトスやユアンよりはよほど希望が持てる。

ロイドならエターナルソードも扱えるだろう。あの剣は持ち主を選ぶ。選ばれるだけの剣士になるよう、剣術の手ほどきもした。

後は今一度、あの魔力を帯びた指輪を作り上げるだけであった。

第六章

1

クラトスはテセアラへ降臨し、サイバックの街へ向かっていた。表向きはユグドラシルから命じられたドワーフのアルテスタを捜すためだが、実のところはエターナルリングを作るためであった。

サイバックは学園都市と呼ばれている。王立研究院を始め、多くの学問所や研究機関がこの街に集中している。テセアラの頭脳ともいうべき場所であった。この街なら、四千年前の古代カーラーン大戦時代の遺物や資料が保存されている筈であった。クラトスが探している物の手がかりも残されているだろう。

クラトスが探しているのはエターナルリングを作るための道具だ。

そもそもエターナルリングを作るのに、デリス・カーラーンの作業場を使うことはできない。全てはミトスに内密で行わなければならないからだ。当然デリス・カーラーンのドワーフには頼めない。そのためドワーフや指輪を作るための道具は地上で調達しなければならないのだ。

エターナルリングはアイオニトスという鉱石で作られている。地上に現存しているかは探し

てみなければわからない。仮に残っていなかったとしても、クルシスで保管している分を入手すればいい。アイオニトスはユグドラシルの管理下にあるが、何とか近づくこともできるだろう。指輪を作るドワーフは地上に逃れたアルテスタを頼ればいい。あとはアイオニトスを研磨するためのアダマンタイトという人工鉱石が必要だった。

アダマンタイトは現在デリス・カーラーンでは使われなくなり、廃棄されてしまっている。またアイオニトスを溶かすためにはかなりの高温が必要なのだが、デリス・カーラーンの工房が使えない以上、高温の炎を出す特殊な薪を調達しなければならない。

薪のほうは当てがあった。むしろ問題なのはアダマンタイトだ。魔科学の技術を使って生成する人工鉱石なので、おいそれと転がっているものではない。そのため、古の時代についても研究をしているサイバックを訪ねることにしたのだった。

ここでのクラトスの身分はテセアラ王室付の宮廷学者である。天の機関クルシスの天使であるなどと名乗るわけにもいかないので、怪しまれない身分を用意した。クラトスのパーソナルイメージを考えると騎士団の人間か傭兵辺りが無難ではあるのだが、その立場では王立研究院に接触する理由が見つからない。多少強引な身分詐称ではあったが、長く生きている分、それなりの知識は有しているのでぼろを出すことはないだろう。

クラトスが王立研究院の院長であるシュナイダーに面会すると、彼は不思議そうに身分証の名前とクラトスとを見比べた。

「――クラトス・アウリオン殿、ですか」
クラトスが頷くと、シュナイダーは眼鏡の奥の瞳を輝かせた。
「失礼ですが、あなたはあの『クラトス・アウリオン』と何か関わりがあるのでしょうか」
「あの……というのは？」
「ああ、いえ。古代大戦末期の王立騎士団にあなたと同姓同名の騎士団長がいたのですよ。それで子孫の方なのかと思ったものですから」
まさか本人だと言うわけにもいかず、クラトスが言葉を探していると、シュナイダーはそれを無言の否定と受け取ったようだった。
「……いや、これは失礼しました。宮廷学者だそうですが、こちらにはどういったご用件で？」
「アダマンタイトという鉱石を探しているのだが、ご存じないだろうか」
「アダマンタイト……。それは魔科学で生成された人工鉱石のことですかな」
「はい」
「それはまた……難しい物をお探しですな……。アダマンタイトが使われていたのは、古代大戦の時代でも初期の頃、現存しているとは思えません」
「では生成技術のようなものは……」
「生成技術ですか」

シュナイダーは顎を撫でながら暫し考え込んだ。
「掌ほどの大きさで構わなければ、確か生成機が現存していた筈です。動くかどうかはわかりませんが……」
「現物を見せていただくことは可能だろうか」
「無論です。今運ばせましょう」
シュナイダーは秘書を呼ぶと地下研究室へ向かうように告げた。クラトスは眉を顰めた。
テセアラでもハーフエルフへの差別感情は根強い。様々な法によってハーフエルフの自由と尊厳が奪われている。この王立研究院でも状況は同じだ。先天的に優れた頭脳を持つハーフエルフを、地下施設に閉じ込めて研究者として飼い殺しにする。いわばハーフエルフ差別の象徴とも言えるのが地下研究室だ。
「ハーフエルフがお嫌いですか」
シュナイダーが肩を竦めた。クラトスの表情を見て誤解したようだ。
「いや、地下研究室の存在が好きになれぬのでな」
「これはまた珍しい。――いや、悪く取らないでいただきたいのですが、研究に従事する者の中でもハーフエルフに対する差別感情は根強いものですから」
ため息混じり漏らしたシュナイダーの表情は悲しげであった。どうやら彼もハーフエルフ擁護の立場を取っているようだ。テセアラの一般的な市民の立場としては異質だが、王立研究院

を束ねる立場の者としては至極当然だろう。ハーフエルフには優れた頭脳を持つ者が多い。だが人間は自らと違うというだけで、その優れた資質すら憎しみの対象にしてしまう。

しばらくすると院長室に女性研究者が現れた。彼女は機材を載せたカートを室内に運び入れると、小さく一礼する。

「ご苦労だったな、ケイト」

「いえ。では、私はこれで……」

ケイトと呼ばれた研究者はそそくさと院長室を出ようとするが、シュナイダーは慌ててそれを制止した。

「待ちなさい、ケイト。このアダマンタイト生成機について、こちらのクラトス殿に説明して欲しいのだ」

ケイトは困惑した様子でクラトスとシュナイダーを交互に見やる。

「私が……ですか？　私はハーフエルフですけれど……」

「別に構わぬ。種族が何であろうと、この生成機に詳しい者の話が聞きたいのだ」

クラトスの言葉にケイトは呆気にとられた様子だった。

「どうした、ケイト」

シュナイダーが不思議そうに首を傾げる。

「いえ……何でもありません」

ケイトはクラトスに向き直り、生成機を指し示した。
「私はこの生成機を研究していたわけではありませんので、さほどお役に立てるとは思いませんが、それでもよろしければ……」
「助かる。ではこの生成機はまだ稼働するのだろうか」
「いえ。十年程前に一度アダマンタイトの生成を試みたようですが、うまく起動しなかったようです」
「原因は？」
「詳しいことは私にもよくわかりません。ブラックボックスに原因があるという話でしたが、この生成機を研究していた者は亡くなりましたので」
ケイトは生成機の上に置いてあった書類の束をクラトスに渡した。
「この報告書に、アダマンタイト生成実験の記録がまとめてあります」
クラトスは報告書を開き、斜め読みでざっと内容を把握した。ケイトの言う通り、修理を重ねていったものの、ブラックボックスの中の制御装置だけが復活せず、実験を中止することになったようだ。
クラトスは生成機のカバーを開くと、内部の様子を確認した。複雑な配線と電子回路が生成機の上部を覆っている。クラトスは報告書に添付してあった設計図を元に、ケーブルの奥にあったブラックボックスを取り出した。

「これか……。中は確認したのか？」
「いえ。そもその黒い箱を開けることすらできなかったようです。継ぎ目がなかったのでどこまでがケースでどこからが制御装置になっているのかわからず、透視装置にかけても内部の構造がわからなかったと聞いています」
「ドワーフならわかるかも知れぬな……」
クラトスの呟きにケイトが目を見開いた。
「アルテスタをご存じなんですか」
「それはこちらの台詞だ」クラトスは内心の驚きを隠しつつ、ケイトに尋ね返す。「あなたはドワーフのアルテスタを知っているのか？」
ケイトはシュナイダーを振り返った。シュナイダーも焦った様子でケイトとクラトスを交互に見つめる。
「シュナイダー院長。何か隠しておられるようだが、私はアルテスタを知っている。話してくれないだろうか」
「アルテスタをご存じだということは、教皇猊下の計画に関わっておいでなのですかな」
シュナイダーが探りを入れてきた。クラトスは首を振る。
「いや、私は個人的にアルテスタと関わりがあるに過ぎぬ。だがもしもよからぬ企みが行われているのであれば、宮廷に出入りする者として看過するわけには行かぬぞ」

「決してよからぬ企みなどではございません。クラトス殿のお立場であればお話ししても差し支えないでしょうからご説明致しますが、我々は教皇猊下のご命令で、エンジェルス計画という神子様のクルシスの輝石の複製品を作る研究を命じられております」

聞き覚えのある計画名に、さしものクラトスも表情を変えた。

「ここでエンジェルス計画が行われていたのか……?」

「やはり宮廷学者のお立場ともなれば、エンジェルス計画のこともご存じでしたか。国王陛下からも教皇猊下のご指示に従うよう命じられております。ただ実験が成功するまで、計画のことを神子様のお耳に入れないよう厳命されておりますので、こちらとしても情報の管理には気を使っておりまして……」

シュナイダーはしどろもどろになって汗を拭いている。まさかこんなことになるとは思っていなかったのだろう。

しかしこれでクラトスのほうも疑問が氷解していた。

エンジェルス計画はクヴァルが行っていたクルシスの輝石――ハイエクスフィアの製造計画だ。しかしクヴァルはディザイアン階級のハーフエルフ。本来繁栄世界に関わることは許されない。にもかかわらずこの繁栄世界テセアラで同じ計画の名を聞くということは、クヴァルないしはディザイアンがテセアラ側に接触していることを示している。それにユグドラシルからもマグニスの名でテセアラに接触している痕跡があったと聞いている。マグニスは既に死んで

いるから、他のディザイアンがマグニスの認識番号を使ってテセアラにやってきているのだろう。だがクヴァルはもう死んでいる。つまりクヴァルと共にエンジェルス計画をテセアラへ持ち込んだディザイアンがいるということだ。そのディザイアンはアルテスタを利用してクルシスに内密でハイエクスフィアを作り上げようとしている。

とはいえ、ただの雑兵がそんな大それた真似はしないだろう。おそらくは五聖刃(ごせいじん)の誰かに違いない。現時点で五聖刃の生き残りはプロネーマとフォシテスとロディルの三人だが、プロネーマとフォシテスの忠誠心の高さを考えれば、自ずと犯人はロディルに絞られる。

「ロディル殿が研究のためにアルテスタをどこかへ連れて行ったようなのだが、居場所を知っているだろうか。このブラックボックスの解析を頼みたいのだ」

クラトスの口からロディルの名が出たことで、シュナイダーはクラトスを信用したようだ。ほっと胸を撫(な)で下ろした様子で口を開いた。

「ロディル殿をご存じでしたか。しかしアルテスタをオゼットから移動させたとは聞いていませんが……」

「そうか……。では私が訪ねたときに留守だったのはたまたまかも知れぬな」

クラトスは何食わぬ顔で答えると、掌の上の黒い箱をシュナイダーに示した。

「これはしばらく借りていくが構わないか？」

「もちろんです。生成機はいかがしましょうか」

「ブラックボックスを修理できたら生成機を使わせてもらいたい。それまでこちらで保管しておいてくれ」
「わかりました。では生成機はいつでも使えるように展示準備室に置いておきます」
シュナイダーの言葉にクラトスは小さく顎を引いた。
それにしても余計なことを知ってしまった。
五聖刃のクヴァルとロディルがクルシスに反旗を翻そうとしていたことは、もはや明白である。ディザイアンがクルシスへの報告無しにテセアラへ接触することは禁じられているし、何よりハイエクスフィアの研究をクルシスの目の届かないところで行っていることも問題であった。それにクラトスがロイドたちと共にシルヴァラントを旅していた頃、クヴァルが古代大戦で使用された魔導砲という兵器を復活させようとしているという噂を耳にしたことがある。今考えれば、それもクルシスに対抗するための手段の一つだったのだろう。
問題はこれをユグドラシルへ報告するべきか否かだ。
ユグドラシルに伝えて何になるというのか。むしろ全ての命を無機生命体に変えるという千年王国計画に協力することになりはしないのか。
それにクヴァルやロディルの動きは、テセアラの管理官であるユアンも把握しているだろう。恐らくは把握していながら情報を握り潰しているのだ。これはユアンの計画にロディルたちの動きが有利に働くからなのだろう。ユアンが求めているのはマーテル復活の阻止であり、ひい

ては千年王国計画の崩壊だ。それはクラトスの目的と合致する。ならばユアンと同じように、クラトスもロディルたちのことを報告しないほうがいいのかも知れない。

しかしユグドラシルはアルテスタのことを捜している。クラトスがアルテスタのことを報告すればロディルがアルテスタを匿(かくま)っていたことも報告することになるだろう。そしてその情報を収集できなかった——というより握り潰していたユアンにも、ユグドラシルの疑いの目が向けられることになる。

今はまだいい。

アルテスタを捜しているという名目でテセアラにいる限りは状況を報告しなくてすむ。だがいずれはウィルガイアに戻る必要が出てくる。そのときに全てを話してユグドラシルの信頼を得ておくべきか、全てを隠してユアン率いるレネゲードを守るべきか。クラトスは決断できずにいた。

2

オゼット地方は深い森に覆(おお)われている。古代カーラーン大戦の頃は人の住まない場所であったが、世界が二つに分けられて地形が変化したことで、状況も変わったようだ。今では小さいながら村も存在している。

そのオゼット村で、クラトスはいくつかの重要な情報を入手していた。
一つめは魔石アイオニトスをも溶かす燃焼力を持つ薪についてだ。
古代カーラーン大戦の頃から、この辺りは特殊な植物の宝庫であった。かつてクラトスたちもアイオニトスを使った武具を作るために、高温を発する薪を求めてオゼットを訪れた。クラトスが村の住人に尋ねたところ、どうやら探している木は現在では神木と呼ばれているらしい。毒素の強い場所に自生する点も昔と変わっていなかった。
二つめはドワーフのアルテスタの行方だ。彼はどうやら村外れの森を抜けた先に住んでいるらしい。神木はいつでも回収することができる。それよりアルテスタの所在を確認することのほうが先決だ。クラトスは村で教えられたアルテスタの家を訪ねた。
森を南に抜けるとその先は行き止まりになっていた。広場のように開けた土地を岩壁が囲んでいる。その岩壁の一部に横穴が掘られ、扉が取り付けられていた。典型的なドワーフの住処だ。クラトスは扉をノックした。
「失礼。ここにアルテスタというドワーフがいると聞いたのだが……」
ややあって扉が開き、中から一人の少女が現れた。その姿を見て、クラトスは思わず目を見開く。彼女には見覚えがあった。彼女を作らせたのはクラトスなのだ。神子たちの惨たらしい死に様を見て、クラトスは何度めかの神子システム廃止を訴えた。そしてその代替え策としてマーテルの身体を人工的に作ることを提案した。それが目の前の少女だ。

しかし作られたのはあくまでエクスフィアを利用した身体だけだ。それがこうして動いているのは、ドワーフのアルテスタが人工知能を搭載したためだろう。廃棄(はいき)される予定だったマーテルの器を、自動人形(オートマータ)として再生したというわけだ。

「どちらサまでスか？」

クラトスは本当の名を名乗るべきか悩み、口ごもった。クラトスとアルテスタに直接の面識はない。だが名前は知られている筈だ。ユグドラシルの命令通りにアルテスタを発見するだけならこのまま立ち去ってもいいのだが、アルテスタには色々と頼まねばならないこともある。クラトスの名を明かした状態でアルテスタに頼みごとをして、もしもその事実がユグドラシルの耳に入った場合、色々と面倒なことになりかねない。

暫(しば)し悩んだ末、クラトスは自らについて「天の機関から遣(つか)わされた者だ」と説明した。自動人形の少女は無表情なままで頷(うなず)き、クラトスを家の中へ招き入れた。

アルテスタは青ざめた顔で自身の工房から現れた。クルシスからの追っ手に見つかったのだと思っているならば、その反応も当然だろう。

「私はユグドラシル様から命を受けた者だ。おまえがドワーフのアルテスタだな」

アルテスタは無言で頷いた。

「デリス・カーラーンから逃げ出した罪は重い。だがこれから尋ねることに素直に答えれば、慈悲を与えよう」

アルテスタは俯いたまま震えおののいている。クラトスは構わず続けた。
「おまえがディザイアンと手を組み、この地でエンジェルス計画を私物化していたことは知っている」
アルテスタは弾かれたように顔を上げた。
「それは誤解です。わしはエンジェルス計画を私物化しようとしたわけでは——」
「では何故計画に荷担した」
「デリス・カーラーンから逃げた後、オゼット村に身を寄せていたのですが、ディザイアンのロディルと申す者に捕まってしまったのです。それで殺すと脅されて……」
「なるほど。しかし何故ロディルは、クルシスに無断でハイエクスフィアを作ろうとしたのだ」
「……ユグドラシル様に反旗を翻すつもりだと聞いています。そのためにどうしてもハイエクスフィアが必要なのだと」
ハイエクスフィアを手に入れてできることは二つ。一つは装着することで自らの身体を天使体にすること。もう一つはエクスフィア以上の高度な演算能力を利用し、魔導機器の制御をすること。ロディルが魔導砲の復活を目論んでいるならば、魔導砲の制御に使うつもりなのだろう。魔導砲は古代カーラーン大戦のときに開発された大量破壊兵器だ。ロディルのような男が手に入れれば悲惨な未来が待っている。

しかし魔導砲の存在をディザイアンが知っているのもおかしな話であった。魔導砲は古代カーラーン大戦のときに開発され、完成目前のところをクラトスがミトスやかつての仲間と共に封じた負の遺産だ。魔導砲の詳細な情報が漏(も)れるとすれば、出所は限られている。

――ユアンか……奴め、着々と準備を整えているのだな。

クラトスが無力感にさいなまれて、ただ無為に過ごしてきた時間を、ユアンはユアンなりの信念で打倒クルシスのために費やしてきたのだろう。そのために利用された幾多の人々の命を考えれば手放しに褒(ほ)め称(たた)えることもできないが、ミトスとの対立に踏み切れなかったクラトスよりはよほど世界のために役立っている。

「そうか。ではロディルの動きを探るため、おまえのことは暫(しば)し泳がせる。私が来たことを決して他言するなよ。もし叛意有りと見なせば、それなりの報復が待っている」

クラトスの言葉にアルテスタは「必ず」と掠(かす)れた声で答えた。クラトスは頷くと、荷物の中にしまっていたブラックボックスを取り出し、アルテスタに手渡した。

「これを修理できるか？」

「これは何でしょうか。見たところ魔導機器の制御装置のようですが」

アルテスタの瞳に力が宿った。しげしげとブラックボックスを見つめている。クラトスがアダマンタイトの生成機の部品であることを告げると、アルテスタはポケットから取り出した小さな工具を用い、器用にブラックボックスを開いた。

「よく開けることができたな」
「これはドワーフがよく使うロック方式です。ドワーフ以外には開き方がわからぬのも道理かと」
アルテスタは顕わになったブラックボックスの内部を見て顔を顰めた。
「難しいか？」
「いえ、かなり古いもののせいか、エクスフィアの欠片が機能を停止しています。少しお時間をいただければ直せるかと思います」
「では頼む。私はここで待たせてもらう」
「でしたら、工房へどうぞ」
アルテスタが家の奥にある工房へクラトスを案内した。アルテスタは椅子を勧めてきたが、クラトスはそれを固辞した。アルテスタは困惑した様子だったが、やがて諦めた様子で机の前に陣取り、生成機の制御装置を解体しだした。
「ロディルに捕まってどれぐらいになる？」
クラトスが尋ねると、アルテスタは一瞬修理の手を止めて考え込んだ。
「もう……四十年ほどになるかと思います」
ちょうどクラトスがクルシスから離反していた頃のことだ。あの時期のことはユグドラシルにとって忌むべき記憶となっているだろう。

「ロディルはどこを根城にしているのだ？　何か聞いているか」
「詳しくはわしも知りません。用のあるときは向こうから出向いてきますから。ですがここから東に、奴が飛竜を飼い慣らしている場所があると聞いたことがあります。その周辺に潜んでいるのかも知れません」
アルテスタは制御装置を何かの機械に繋ぎ、反応を確かめた。どうやら修理は完了したらしい。再び制御装置の蓋を閉め、ブラックボックス化してからクラトスへ差し出した。
「これで問題なく動くと思います」
クラトスは微笑んでそれを受け取った。しかし直後、クラトスの天使化した耳に、風を切る異様な音が届く。クラトスの記憶が確かなら、それは神子コレットを救いの塔へ運んだときに耳にした飛竜の羽ばたきと同じものであった。
「失礼する」
クラトスは呆然とするアルテスタを置いて、家の外へ飛び出した。それから空を見回す。飛竜の羽ばたく音は、東の空から聞こえるようだった。クラトスはマナの羽を広げて浮上した。
東の方角を見据えると、遠くに飛竜の姿が見えた。よく目を凝らせば、飛竜の背に眼鏡をかけた老人の姿がある。五聖刃の一人は老化が始まったハーフエルフだと聞いたことがあるが、それならばあれがロディルだろうか。クラトスは飛竜に見つかる前に地上に降り、飛竜の飛んでいく先を見極めようとした。

飛竜はクラトスの遙か頭上を横切り、オゼット村の辺りに下りていく。

クラトスは再び空を飛ぼうとしたが、背後に人の気配を感じ、剣を抜いて振り返った。クラトスの剣の切っ先は背後の人物の喉元(のどもと)でぴたりと止まった。

「プロネーマか……」

「さすがクラトス様」

プロネーマが剣を右手で押しやり、その場で一礼する。クラトスは剣を収めるとプロネーマを見下ろした。

「何故ここにいる？　怪我はもう良いのか」

「はい。ロイドに不覚を取りましたが、もう大丈夫です」

ロイドという言葉にクラトスは一瞬顔を顰めた。それに気付いたのか、プロネーマは僅(わず)かに視線を逸(そ)らして「失礼しました」と小さく呟(つぶや)く。それからあらためてクラトスに向き直り、五聖刃のロディルを監視していた旨(むね)を伝えてきた。

「しかしクラトス様は何故ここに？」

「ユグドラシル様からドワーフのアルテスタを捜すように命じられたのだ。それよりロディルは何故オゼットの村へ向かったのだ？」

「神子コレットがいるからかと思われます」

「神子？」一瞬混乱しかけたが、すぐにクラトスは事情を察知した。「なるほど。神子のクル

シスの輝石が目当てか」
　クラトスの言葉にプロネーマが困惑した顔になった。
「クルシスの輝石？　ロディルの狙いは神子ではなく、ハイエクスフィアだと仰いますか」
「そうだ。奴は何らかの理由でハイエクスフィアを求めている」
　クラトスはあえて魔導砲のことを伏せた。プロネーマは顎をしゃくり考え込む。
「奴め、分不相応にも天使化したいと考えておるのかえ……。それとも何か別の目論見があるのか……」
「わからんな。何にしても神子のハイエクスフィアは今使い物にならない。無機結晶症による寄生行動の暴走で、機能が狂っている筈だ」
「とはいえ、神子に手を出されるのはユグドラシル様の意に反します故、ロディルを取り押さえにまいります」
　プロネーマがオゼットのほうへ向かおうとした。しかしそれより先にオゼットの村から二匹の飛竜が舞い上がり、滑るようにこちらへ飛んできた。クラトスは視覚機能を最大まで上げて、飛竜に乗っている人物を確認する。一匹の背にはロディルとおぼしき老人が、そしてもう一匹は足でコレットを掴んでいるようだ。
「クラトス様……」
　プロネーマの問いかけに、クラトスは首を横に振る。

「少し遅かったようだ。再生の神子が攫われた」
プロネーマが慌てて飛竜を見上げる。二匹の飛竜はスピードを上げて東の空へ消えていった。
「おのれ！　奴め、飛竜の巣へ逃げ込むつもりじゃな」
今にも追いかけかねないプロネーマを見て、クラトスは一計を案じた。
このままプロネーマがロディルを粛正すれば、コレットはクルシスに連れて行かれてしまうだろう。アルテスタも見つかってしまった今、コレットが連れ去られてしまっては、全てが終わってしまう。それよりはユグドラシルに、コレットの治療をロイドたちに行わせるという方針を貫かせたほうがいい。
「プロネーマ。再生の神子のことはロイドたちに任せるのだ」
「ロイド……でございますか？　しかし奴らにロディルを追うことができましょうか。飛竜の巣は東の空に浮かんでいます」
「彼らはレアバードを捜しているらしい。恐らくレネゲードから奪うつもりなのだろう。レアバードがあれば空に逃げたところで問題なかろう。ロディルの行方は私からロイドたちに知らせておく」
「ですが……」
「おまえにはユグドラシル様への伝言を頼みたい。アルテスタを見つけた、とな」
ユグドラシルの名を聞き、プロネーマが居住まいを正した。

「してアルテスタはどちらに」
「どちらに、か」クラトスは皮肉な顔で笑った。「おまえのすぐ横だ」
プロネーマは岩壁に扉があるのを発見して不愉快そうに顔を歪ませた。
「こんなところに……。ユアン様も何故発見できなかったのか……」
「そうだな。ロディルがうまく痕跡を消していたのだろう」
ユアンがアルテスタの居所を知りながら放置していたことは明白であったが、そうと悟らせるわけにもいかない。もっともこんな台詞でプロネーマがごまかされるとも思えなかった。ユアンの正体が割れる日も近いかも知れない。
「――とにかく、アルテスタは見つけた。後はロイドたちを誘導して、再生の神子の病を治させるだけだ。ユグドラシル様にもそのように伝えてくれ」
「承知致しました」
プロネーマは低く頭を垂れた。

3

デリス・カーラーンの謁見の間は虚空の中にある。ユグドラシルがまだ少年の姿であった頃、エターナルソードの力を使って、このデリス・カーラーンを大地の上空へと繋ぎ留めた。その

ときかかった負荷によって、城の一部が歪んでしまったらしい。ユグドラシルはこの景色を気に入り、城のある場所をヴェントヘイムと名付けた。以後生活の中心をヴェントヘイムにおいている。

壊れた玉座。壊れた希望。失われた光の道はこの虚空の間に繋がっていたのではないか、とすら思う。

かつてユグドラシルの姉マーテルはこう言った。「絶望するなら静かに暮らす道を選びましょう」と。しかしもはや静かに暮らすことなどできる筈がなかった。一緒に暮らす筈だった姉が死んでしまったのだから。

だから絶望したまま未来を切り拓くことにした。ユグドラシルはこれ以上なく自らを犠牲にし続けてきたのだ。もういいだろう。今度は自分のために世界が犠牲になる番だ。

ユグドラシルが玉座の上で虚空を見つめていると、伝令天使が滑るように飛んできた。

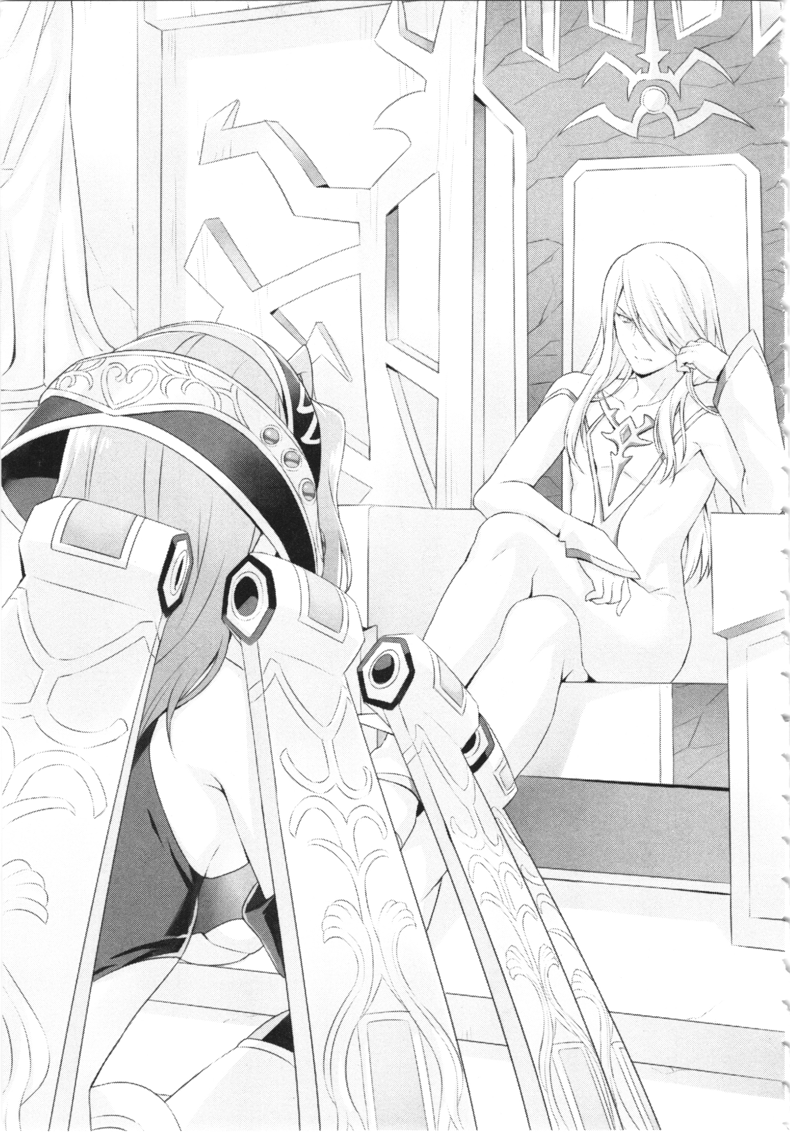
「ディザイアン階級、五聖刃プロネーマがお目通りを願い出ております」

「――通せ」

プロネーマは良くやっている。忠実な下僕だ。ユグドラシルは玉座の間に入ってきたプロネーマに微笑むと、手招きして近くへ呼び寄せた。プロネーマは早足でこちらに近づき、ほどよいところで膝(ひざ)をついて頭を垂れた。

「御前を失礼致します、ユグドラシル様」

「何用だ、プロネーマ」
「クラトス様より伝言を承りました」
「クラトスから……？」
「はい。ドワーフのアルテスタを発見なさったそうでございます」
ユグドラシルは顔を曇らせる。
何故その報告をプロネーマに頼んだのか。アルテスタの居所が重要な情報であることはクラトスにもわかっている筈だ。だからこそユグドラシル自ら、しかも秘密裏に命じたというのに。
「クラトス様はロイド一行に再生の神子の病を治療させるため、適宜情報を与えて誘導すると仰っていました」
「それで、今クラトスはどこにいる？」
「テセアラ世界のオゼット村へ向かいました。ロイドたちがそこにおりました故」
オゼットという単語を聞いた瞬間、ユグドラシルは胸がざわつくのを感じた。
オゼットはユグドラシルがかつての仲間と何度も訪れた土地だ。
だがこの感覚は感傷ではない。
クラトスがオゼットにいる意味を考えると、最悪の想像が頭をよぎってしまう。
「実は五聖刃のロディルに、クルシスに対する反逆の兆候を発見致しました。ロディルは再生の神子を攫い、ハイエクスフィアを奪おうとしております。私がロディルを捕らえようとしま



したところ、クラトス様から再生の神子の救出はロイド一行に任せるよう命令されたのでございます」

なおも言葉を紡ごうとするプロネーマを、ユグドラシルは手で制した。プロネーマはすぐに意図をくみ取り口をつぐむ。

「おまえの言いたいことはわかっているつもりだ。ロイドたちにクラトスが接触するリスクを気にかけているのだろう」

「はい。それにもう一つ気がかりなことが……」

「言ってみろ」

プロネーマは沈痛な面持ちで唇を噛んだ。

「恐れながら、ユアン様のテセアラ管理に疑問がございます」

「ユアンか……」

ユグドラシルは肘掛けに肘をつき、忌々しそうに顔を歪める。それに恐怖を感じたのか、プロネーマは俯いてしまった。

「奴が千年王国計画に反発していることはわかっていたが、まさか本気で姉上を害するつもりではあるまいな」

ユアンはユグドラシルの姉マーテルと将来を誓い合った仲だ。愛する人を甦らせる機会を棄ててまで、人間の世界を守るというのか。人間はマーテルの仇だというのに。

そのとき伝令天使が玉座の間に現れた。謁見中に伝令天使が接触してくるのは極めて稀(まれ)なことだ。
「何用だ」
ユグドラシルが苛立たしげに尋ねる。しかし感情を抑制されている伝令天使は、特にひるむ様子もなく無表情で敬礼する。
「ユグドラシル様。精霊の楔(くさび)が抜け落ちたとの報告がありました」
「何!?」
ユグドラシルは思わず立ち上がり、伝令天使に駆け寄った。プロネーマも驚愕(きょうがく)した様子で顔を上げる。
エターナルソードで強引に二つに分けられた世界は、本来ならそのまま分離して虚空を彷徨(さまよ)うことになってしまう。それを防いでいるのが二つの世界の中心でマナを供給する大いなる実りだ。この大いなる実りを守り、マナの流れを人為的に管理するため精霊の楔は作られた。精霊の楔は檻(おり)のように大いなる実りを守り、外部からのあらゆる接触を遮断している。そして神子による世界再生を合図に、精霊の楔を通じてマナの流れを衰退世界から繁栄世界へと注ぎ込む役割を担っていた。いわば神子システムの根幹を担う存在だ。
「精霊の楔は完全に消滅したのか？」
「いえ、消失したのはヴォルト―ウンディーネラインです」

ユグドラシルはため息をついた。楔一つであればまだ大丈夫だ。

「何故楔が消えた？　原因はわかっているのか？」

「詳細はまだ不明です。現在調査隊を派遣しています。またコアシステムに精霊の楔が抜けた影響をシミュレーションさせています」

伝令天使の言葉にユグドラシルは頷いた。

「ご苦労。退がってよいぞ」

伝令天使は敬礼して玉座の間から立ち去っていった。ユグドラシルは再び玉座に腰を下ろし、不安げなプロネーマに視線をやった。プロネーマもそれに気付き、慌ててユグドラシルに頭を垂れる。

「どうした、プロネーマ。今回の一件に何か心当たりでもあるのか」

「消えたのがヴォルトがらみの楔というのが気になりまする。クラトス様の話ではロイドたちがレアバードを手に入れようとしているとのことでした。しかし現在のテセアラはマナが不足しております故、補給もなしにレアバードを飛ばすことはできないかと思われます。ですが仮にヴォルトと契約を交わして召喚すれば、エネルギーの代わりになり得るのではありますまいかと」

「奴らには召喚術を会得した仲間がいたな」

ユグドラシルはほぞを噛んだ。恐らくロイドたちはシルヴァラントでウンディーネと契約を

交わしていたのだろう。そして今回偶然にもヴォルトと契約をしてしまった。本来精霊たちの元の主はユグドラシルであるが、ユグドラシルが精霊を裏切った事実があるため、新たな契約者が精霊と縁を結ぶことは容易いだろう。

「仮にロイドたちがレアバードを手に入れたとなると、空間転移装置によって二つの世界を行き来する可能性も出てきます。そうなれば相対する精霊たちを同時に目覚めさせ契約することで、また別の精霊の楔が消えることになるのでは……」

プロネーマが不吉な予言をした。

「レアバード単体には空間転位能力はない」

「ですが奴らは一度レネゲードに助けられております故。レネゲードなら空間転位装置を持っている筈。奴らが手を組めば大変なことになりまする」

もしもそれが現実になれば、四千年続いたクルシスの世界分割システムは崩壊するだろう。ようやくマーテル復活の道筋が見えたというのに、何故こんな事になってしまったのだろうか。あのときまでは順調に進んでいたのだ。救いの塔でコレットが心と記憶を捧げたあのときまでは。

「ロイド・アーヴィング……」

呟いたユグドラシルの声は憎しみと嫉妬で彩られていた。

あのときロイドを殺しておけば——いや、クラトスがとどめを刺せなかったことが、ここま

で計画を狂わせてしまったのか。
クラトスは息子の息の根を止める事ができなかった。あの瞬間、クラトスはユグドラシルを裏切ったのだ。ユグドラシルはそれをわかっていながら自分を欺いている。
じわりと不愉快なざわめきが胸に広がった。
先ほど否定した最悪の想像が、再びユグドラシルの脳裏をよぎる。
クラトスがオゼットにいる、その意味。
もしもクラトスが本気でユグドラシルに刃向かうつもりなら、オゼットは重要な場所になるのだ。
オゼットにはヤドリギの突然変異種が生息している。この特殊なヤドリギは木に寄生するだけではなく、やがて木そのものを乗っ取り成長する。乗っ取られた木は毒素を養分としてさらに成長を続ける。かつてはこの特性を生かし魔科学で汚染された大地を浄化するのに使われていた。この木にはもう一つ大きな特徴がある。それは薪として火にくべると、とてつもない高熱を発するというものだった。
アルテスタがいて、ヤドリギの変異種があり、人間であるロイドがいる。クラトスなら何をしようとするか。
答えは簡単だ。
エターナルリング——人間でもエターナルソードを使えるようになる、魔力を帯びた指輪を

作ろうとするに違いない。それは七十年前の離反の再現でもあった。

恐らくクラトスは七十年前に成し得なかったことを、息子であるロイドに託そうとしているのだろう。世界も神子も救いたいというロイドの意志は、クラトスが好きそうな綺麗事だ。その綺麗事を希望として、ロイドに力を貸そうとしているに違いない。かつてユグドラシルに力を貸したように。

「裏切ったな……。また……ボクを……」ユグドラシルは喉から絞るような声をあげた。「裏切った！　裏切ったんだ……」

十五年前、クラトスは抜け殻となってユグドラシルの元に戻ってきた。全ての希望が潰えたかのように外界に対して反応を示さなかったクラトスを、ユグドラシルは裏切り者であるとわかっていながらも案じた。

ユグドラシルにはわかっていた。クラトスを助ける手段があることを。そしてそれは世界で唯一、ユグドラシルだけが行えるものだということも。

ユグドラシルがマーテルの復活を諦める。

そうすればクラトスは再び前を見て生きようと決意するだろう。

どれほどそうしようと思ったことか。そもそもこの四千年の間、気持ちが揺れなかったと言えば嘘になる。だがそれでも四千年という時間を費やしてきた計画を取りやめることなど、ユグドラシルにはできなかった。

あのとき、ユグドラシルは師であるクラトスではなく、姉であるマーテルを選んだのだ。
そして救いの塔でクラトスは、弟子であるユグドラシルではなく、息子であるロイドを選んだ。
ロイドという人間はいったい何なのだろう。ユグドラシルにとってのマーテルのように、クラトスにとって大きな比重を占めているというのか。クラトスに今一度希望を与えるほどの存在だというのか。ただ血を分けた肉親というだけではなく。
本当に？
ユグドラシルにはわからない。たった一度の邂逅では知るよしもない。
ならばこの目で確かめよう。ロイドという人間がどれほどのものなのか。
「プロネーマ。おまえに新たな役目を与える」
「なんなりとお申し付け下さりませ」
「まずはクラトスに精霊の楔のことを知らせるのだ」
「……まだクラトス様を信じると仰るのですか」
ユグドラシルはふっと視線をそらせる。それを肯定と取ったのかプロネーマが怒りの声をあげた。
「あの方に現状を知らせては、ロイドたちに与する事も考えられましょう。それよりわらわがロイドたちを止めにまいります」

「ロイドたちのことはいい。私に考えがある」
「ですがこのままでは精霊の楔を全て奪われてしまうやも……」
「ならばそれでもよい！」
ユグドラシルは玉座に拳を振り下ろした。あまりの勢いに、プロネーマが青ざめて息を飲む。
「最悪精霊の楔が全て失われたとしても、二つの世界が分離して虚空に消えていくだけのこと。大いなる実りはエターナルソードと救いの塔によって、デリス・カーラーンの引力圏に残る。大いなる実りさえ失われなければ、姉上の再生も可能だ。むしろ忌むべき人間どもが住むべき場所を失うと考えれば笑いがこみ上げてくる。我らにはデリス・カーラーンという全ての命の源である星があるしな」
「そ、それは……」
「だいたい、何故私を裏切り続ける人間たちを守ってやらねばならない？　クラトスが私を裏切るなら、私も奴が守ろうとするもの全てを裏切る。もう人間のことなど知るか」
そう、これが現実だ。クラトスとユグドラシルの間には、とうに信頼など消え失せている。ただ目を逸らしていただけだ。
「……おまえはクルシスの状況をクラトスに報告しつつ、奴を監視しろ。奴の裏切りを余すことなく調べ上げるのだ」
「御意」

「それからもう一つ。私はしばらくデリス・カーラーンを離れる。コアシステムの計算結果を含め、私の不在中にクルシスで起きたことを伝令せよ」
「このようなときに、いったいどちらへ行かれるのですか」
「……オゼットだ」
ユグドラシルは言いながら、自身の細胞組織を変化させて、在りし日の少年の姿になった。
「ユグドラシル様……」
「私はただのミトスとして、ロイドたちに接触する」ユグドラシル――ミトスは文字通り天使のように微笑んだ。「あとは頼むよ、プロネーマ」

4

ウィルガイアの最深部にあたる場所にデリス・カーラーンの管制室がある。ここでは世界再生の管理や二つの世界の監視が行われており、デリス・カーラーンの頭脳とも言える場所だ。クルシス全体を支える演算機であるコアシステムもここにある。
デリス・カーラーンへ戻ったユアンは、真っ先にこの管制室へ足を向けた。確認しなければならないことがあるのだ。
ここに戻る前、ユアンはテセアラ世界にあるレネゲードの拠点にいた。ロイド・アーヴィン

グとその仲間たちがレネゲードの所有するレアバードを求めていることを利用し、彼らを拠点であるテセアラベースに誘い込んで捕らえようと画策していたのだ。
テセアラの神子であるゼロスからテセアラベースへの侵入作戦が始まったとの一報を受け、ロイドたちを待ち伏せたところまでは良かった。しかしちょうどそのタイミングで異常な地震に見舞われてしまったのだった。結局ロイドたちはレアバードを奪い、逃走した。
彼らは恐らくそのままレアバードでロディルの元へ向かい、神子コレットを奪還したであろう。
まぁ、その点はいい。神子ゼロスがロイドたちの傍(かたわら)にいる限り、彼らの居場所など簡単にわかる。それよりも問題なのは大地の揺れであった。通常の地震と違い、マナの流れも激しく乱れた。常と違う自然現象には必ず意味がある。
ユアンが管制室に入ると警備の天使たちが無表情で敬礼してくる。それ以外の天使はユアンに目もくれず、自らの職務を黙々とこなしていた。まるで機械仕掛けの人形のようだ。天使化してもなお感情を有する四大天使は特別といえる。ユアンですら最初の天使化から自己を取り戻すのに苦労した。天使化に失敗して命を落とした同胞も多い。こんな禍々(まがまが)しい石に未来を託すなどやはり間違っている。
ユアンは管制室長である管理天使アドルの元へ歩み寄ると、メインスクリーンに精霊の楔の疑似モデル映像を表示するように命じた。アドルがコンソールを操作すると、大地を上空から

映していた映像が切り替わり、精霊の楔が表示された。画面中央には大いなる実りがある。そして大いなる実りの周囲には三色のエネルギーラインが網の目のように走っていた。さらにエネルギーラインは木の根のように周囲に広がっており、それらが二つの世界にマナを供給するパイプラインとなっている。本来このエネルギーラインは四色表示されていなければならない。つまり今表示されていないラインに何らかの異常があるということだ。

「精霊の楔が一つ表示されていないが、どうなっているのだ」

「現在ヴォルトーウンディーネラインの楔は消失しています」

やはりそうか——ユアンはほくそ笑む。

これはようやく訪れた好機かもしれない。これまでユアンたちレネゲードの計画にはいくつかの壁が存在していた。その中の一つが精霊の楔だ。大樹を復活させるためには、大いなる実りにマナを照射する必要がある。しかし精霊の楔が防御壁の役割を果たし、大いなる実りを守っていた。精霊の楔がある限り大いなる実りに近づくことはできない。そこでレネゲードはロディルを利用して魔導砲という巨大な砲台を建造させていた。魔導砲で救いの塔を破壊し、精霊の楔を制御する装置を物理的に破壊しようと考えたのだ。だが精霊の楔を無効化できるのであれば、被害が大きくなる魔導砲を使用しなくてすむ。

「しかし何故突然精霊の楔が消えたのだ。原因はわかっているのか？」

「計測された情報から推察すると、本来休眠状態にある筈のヴォルトが強制的に目覚めさせら

れ、ウンディーネと共に封印から解放されたためであると考えられます」

アドルが淡々と答える。

精霊の楔を生み出す八大精霊は、ユグドラシルとの契約によって世界各地に封じられていた。これを解放する手段は精霊たちをユグドラシルとの契約から解放するしかない。それができるのは召喚士だけだ。しかし召喚という技は簡単に習得できる代物ではない。

現在召喚士としての力を持つのは、ユグドラシルとミズホの里の藤林しいなしかいない。つまりしいなと行動を共にするロイドたちがこの状況を生み出したと考えるべきだろう。

レネゲードとロイドたちは微妙な対立関係にある。少々面倒ではあるが、彼らを説得し、協力を取り付けなければ、精霊の楔を完全に消し去ることはできない。

「神子コレットは今どこにいる？」

ユアンに訊ねられて、アドルは神子コレットのハイエクスフィアが発する波動を計測した。

神子が天使の羽で飛行すると、ハイエクスフィアが周辺のマナを体内に取り込み、放出する。そのときに発生する波動を辿れば、居場所が簡単に判明するのだ。これは神子だけに限らず、天使化した者なら皆同じだ。そのためにユアンもレネゲードとして活動するときは、空を飛ばないように心がけている。

「神子コレットの波動を確認しました。最後に観測されたのは氷の神殿です」

「氷の神殿だと……？」

ロイドたちが神殿に向かう理由は一つしか考えられない。
神殿は精霊が封印されている場所だ。精霊との契約を行おうとしているのだろう。もしかしたらヴォルトとの契約を行ったことで世界に起きた変化に、ロイドたちも気付いたのかもしれない。詳しいことは神子ゼロスからの報告でわかるだろう。
「ユアン様……」
管制室の扉が開き、プロネーマが入ってきた。ユアンは眉を顰める。
「何故おまえがここにいる？　ディザイアン階級が管制室に立ち寄ることはできぬ筈だが」
「ユグドラシル様より特別にお許しをいただき、精霊の楔について調べております。ユアン様はデリス・カーラーンを離れておいでだったようですが……」
「……テセアラの様子を確認していたが、異様なマナの乱れと地震が気になったのでな。何か起きたのではないかと思って戻ってみたのだ」
「さすがはユアン様」
プロネーマの言葉に微かな毒を感じ、ユアンは冷ややかに相手を睨み据えた。プロネーマは微笑したままこちらを見つめ返してくる。
ユアンの正体を感付かれたのだろうか。だとしても今はそのことを確認している場合ではない。精霊の楔に変化が現れた以上、レネゲードも行動を起こさねばならないのだ。
「精霊の楔の一部が消失したそうだが、このことはユグドラシル様もご存じなのか」

「もちろんです」
「ではどうなさるおつもりなのだ。何か対策を命じられたのか」
「いえ、あの――」
プロネーマは言いよどみ、視線を落とした。ユアンが続きを促すと、プロネーマは何故か沈痛な面持ちで言葉を継いだ。
「原因が精霊にあるのならば、再生の神子たちが精霊と接触するのを阻止してはどうかと奏上したのですが、それは無用であると仰せなのでございまする」
思いがけないユグドラシルの反応であった。ユアンも戸惑いの声を上げる。
「大いなる実りの守護が失われるのだぞ？」
レネゲードにとっては願ったりだが、大いなる実りを――そこに寄生しているマーテルを守りたいユグドラシルにとっては非常事態ではないのか。ユアンの疑問にプロネーマも頷いた。
「わらわも放置するべきではないと思うのですが、ユグドラシル様が仰るには、仮に精霊の楔が全て消えたところで、大いなる実りが失われるわけではないと……。大いなる実りは救いの塔によって、デリス・カーラーンと繋がっております。救いの塔が失われなければマーテル様へのマナの供給が絶えることはありませぬ故、神子たちの好きにさせよと仰せなのです」
確かにマーテルさえ救われればよいというのは、ユグドラシルの本音だろう。しかしそれが本心なのであれば、もはやユグドラシルにかつての仲間であった頃の心は欠片(かけら)も残っていない

に違いない。

「クラトスにはこのことを伝えたのか？」

「――はい。既に今回の一件を報告しております。何が起きるかわからぬことを放置するのは危険だと懸念なさっておりました」

クラトスも事態を知っているのはやっかいだ。しかし立場上ユグドラシルの命令に表立って背くことはないだろう。ならばコアシステムが答えをはじき出すまでの猶予は利用できる。この間にレネゲードを総動員して、精霊の楔から解放された大いなる実りにマナを照射する準備を行えばいい。

短い時間で地下にある大いなる実りへマナを照射するためには、地上にある既存の魔導機械を利用するしかないだろう。それだけのマナエネルギーを制御できる魔導機械と言えば、人間牧場のエネルギーをまかなっている魔導炉ぐらいのものだろうか。地上の人間牧場は四カ所。内二カ所は自爆してしまっている。まだ機能している人間牧場にはレネゲードの同志を送り込んで魔導炉を操作させればいいが、崩壊した人間牧場のほうは調査と修理が必要だ。一刻も早く作戦に着手しなければならない。それにロイド一行に接触し、作戦への協力を仰ぐ必要もあった。精霊と契約できるのは、彼らの仲間である藤林しいなだけなのだから。

ユアンが管制室を出ようとすると、プロネーマが不審そうに訊ねかけてきた。

「ユアン様、どちらに……」

「テセアラへ降臨する。精霊の楔が抜けた影響を確認しておきたい」

「左様でございまするか」

プロネーマがこちらに何らかの疑いを抱いていることは明らかであったが、今は捨て置くしかない。ユアンは足早に管制室を後にした。

5

オゼット村に激しい落雷があったのは、ちょうどクラトスがサイバックの王立研究院でアダマンタイトの生成に成功した直後の事であった。

オゼットの村に落ちた雷は、オゼット村と周辺の森に火をつけ、完全に焼き払ってしまった。突然の災害に村の人々は為す術もなく、逃げ切れずに命を落とした者も多かったという。しばらくは火の手が収まらず、人々はただ森を飲み込む炎を見つめるしかできなかった。鎮火(ちんか)後も二次被害を防ぐためにオゼット周辺への立ち入りが制限され、通行が許されたのは落雷から半月が過ぎた頃の事であった。

ようやくオゼット村の跡地へ足を踏み入れたクラトスは、その悲惨な状況に言葉を失っていた。オゼットの村の中心にあり、象徴的存在でもあった巨木は、無残に引き裂かれ焼け落ちている。村の建物も周辺の木々も炭化しており、かろうじて村の東側付近が一部瓦礫(がれき)となって残

っているだけだ。この分ではクラトスの探し求めていた神木も全て消失してしまっただろう。
果たしてたった一度の落雷で、村や森が壊滅状態に陥るものであろうか。クラトスにはそれが疑問であった。確かに条件が重なればそういうこともあるのだろう。落雷は山火事の原因にもなる。だがクラトスは今回の災害に何らかの意図を感じ取っていた。
デリス・カーラーンには、人間の反乱に備えた地上への攻撃装置がある。それがオゼットに振るわれたのではないか——もしクラトスの推察が事実であるなら、オゼットが攻撃された理由も概ね想像が付く。クラトスが神木を求めていることがユグドラシルに知られたのだろう。そうであるなら、この厄災を引き起こしたのはクラトスだ。
また無辜の人々を犠牲にしてしまったのか。
クラトスは無力感に打ちのめされた。これほど早くクラトスの意図が読まれると思わなかったとはいえ、行動に慎重さが欠けていたのかもしれない。もう少しうまく立ち回っていれば、オゼットの住民を傷つけずにすんだ筈だ。それに神木も失ってしまった。このままではエターナルリングの製造は地上では行えない。計画を見直す必要があった。
そのときクラトスの耳に微かな風の音が届いた。強烈な圧迫感にクラトスが振り返ると、すぐ目の前の空間にもやのようなものが立ち昇った。デリス・カーラーンからの立体映像通信だ。
クラトスが向き直ると、目の前にプロネーマの像が浮かび上がった。
「クラトス様！」

焦り上擦(うわず)った声に、クラトスは眉を顰めた。

「どうした？　その様子はただごとではないようだが……」

「コアシステムが、精霊の楔が失われた後の大いなる実りに関してシミュレーションを終えました。どうやらその結果、シルヴァラントとテセアラは緩やかに分離を始め、やがて双方とも時空の狭間に飲み込まれる事になりまする」

「それは承知している。エターナルソードが生み出した世界の歪みは、大いなる実りを二つの世界の中心におくことでかろうじて安定している」

「ですが二つの世界が時空の狭間に吸い込まれる力は、我らの想定以上のものだったようです。本来なら大いなる実りごと時空の狭間に吸い込まれて消滅する筈であったのが、精霊の楔によってかろうじて世界の中心にとどまり続けることができたようなのです」

「つまり精霊の楔が消失すると、大いなる実りはシルヴァラントとテセアラの双方から引き寄せられ、安定を失ってどちらかの大地と共に時空の狭間へ飲み込まれてしまうのか」

「いえ、大いなる実り自体はデリス・カーラーンと繋がっております故、失われることはございませぬ。ただ大いなる実りの留まろうとする力と、時空の狭間からの引力によって、それぞれの大地が崩壊することになりまする」

「ユグドラシル様は何と仰っているのだ」

「捨て置け、と」

「マーテル様の器も完成しております故、大地を失っても構わぬと……」
「大地が失われても我らには大いなる実りとデリス・カーラーンがあると仰せなのです。マーテル様の器も完成しております故、大地を失っても構わぬと……」

「――何」
「大地が失われても我らには大いなる実りとデリス・カーラーンがあると仰せなのです。マーテル様の器も完成しております故、大地を失っても構わぬと……」
「馬鹿な！」
クラトスが吐き捨てると、プロネーマは憤怒(ふんぬ)の顔でこちらを睨み上げてきた。思わぬ反応に、クラトスが目を瞬(しばた)かせる。プロネーマは両手を震わせ、必死で怒りを堪えようとしているようだった。
「……誰の……誰のせいだとお思いかえ」
「何」
「ユグドラシル様の悲しみが何故わからぬ！」
「ユグドラシル様は――ミトスは何を言ったのだ」
「……そなたに言ったところであの方の苦しみが消えるわけではないわ。それよりそなたも四大天使ならば、悲しみの中で冷静な判断を下せぬユグドラシル様に代わり、この状況をどうにかしようとは思わぬのかえ!?」
「……ならばすぐロイドたちにこのことを知らせて、事態を止めなければならぬ。神子たちは今どこにいる？」
「神子ゼロスの報告ではシルヴァラントにある光の神殿に向かっているとのこと……」

既に精霊の楔は残り一つになっている。闇の神殿で精霊シャドウと契約を交わしたとの連絡は来ていたから、ここで光の精霊ルナとアスカの契約を行われては、精霊の楔は全てが失われてしまうだろう。その結果は大地の消失だ。
「私がロイドたちを止めに行く。おまえは五聖刃に命令を下し、ロイドたちの動きを阻止するよう伝えろ」
「……よかろう。とはいえ、もはや五聖刃で生きておるのはわらわとフォシテスだけじゃがな」
「ロディルはどうしたのだ」
「ユグドラシル様を裏切った愚か者にふさわしい死に舞台を用意してやった故」
一瞬プロネーマの唇に冷ややかな笑みが浮かんだ。
言外にクラトスへ脅しをかけているのだろう。ユグドラシルを裏切るな、と。
「――ならばフォシテスに手勢を割くよう伝えろ。それから今一度ユグドラシルの元へ戻り、何とか大地を生かすように説得するのだ。いいな」
クラトスはマナの羽を放射すると、救いの塔を目指して飛翔した。

6

マナの守護塔はシルヴァラント世界の北部、ルイン地方にあるマーテル教会の史跡である。ここはクルシスが用意した光の神殿であり封印だ。光の精霊ルナが封じられている。クラトスもロイドたちと共に旅をしたときにこの場所を訪れたことがあった。

幸いクラトスがマナの守護塔にやってきた段階では、ロイドたちはまだこの場所に辿り着いていなかった。クラトスは最上階にある祭壇の手前でロイドたちの到着を待つことにした。現状敵対関係にあるクラトスの言葉をロイドか聞くかどうかは分からないが、祭壇にさえ行かせなければ説得する時間を作ることができるだろう。

それにしても気になるのは、オゼットでプロネーマが見せたあの態度だ。

ユグドラシルが悲しみ、冷静でいられないことがクラトスの責であるかのような言葉。

確かに今のユグドラシルとクラトスは相容れない立場にある。だがそのことがそれほどまでにユグドラシルを追い詰めているのだろうか。

——あの子を……。ミトスを見ていてあげて。

懐かしい仲間の声がふと耳に甦(よみがえ)った。

今はもういない、マーテルの声が。

——あの子には同年代の友達もいない。他人とのつき合い方がよく分からない子なの。あなたに頼むのは卑怯かも知れないけれど、あの子はあなたを信頼しているから……。

その信頼は盲信となった。クラトスはそれを正すことも共に堕(お)ちてやることもできなかった。

結局はクラトス自身の不徳なのだろう。
自らの心の闇を覗き込んでいると、転送装置が起動する音がした。クラトスがいる場所へは転送装置を使わなければ辿り着けない。恐らくロイドたちがやってきたのだろう。
クラトスが最上階に続く転送装置を遮るように立つと、少し遅れてロイドたちが駆け込んできた。
「待て！」
クラトスの一喝に、ロイドは驚いて立ち止まる。彼の仲間たちもそれに倣った。
「クラトス！　邪魔をするな！」
ロイドが予想通りの反応を示す。力尽くで止めても構わないが、今ロイドたちは八名の大所帯だ。仮に召喚術を会得している藤林しいなを取り逃がし、精霊との契約を行われては面倒なことになってしまう。ここは説得するより他にはなかった。
「そうはいかん！　今、デリス・カーラーンのコアシステムが答えをはじき出した。精霊と契約をすれば、大いなる実りの守護は完全に失われてしまう！」
「それこそ我らの願うところだ！」
言葉と同時に、ロイドたちの間を縫ってダブルセイバーの戦士が飛び込んで来た。
——ユアンか！
クラトスはとっさにその一撃をかわすが、相手は得物を振り回しながらクラトスを転送装置

な相手だ。

「わからないのか、ユアン！　おまえの望む結果は得られん！」

「黙れ！　この機会を逃すと思うか！　ロイドよ！　こいつの相手は私に任せろ！　おまえたちは一刻も早く光の精霊との契約を済ませるのだ！」

ユアンの言葉にロイドが深く頷き、仲間を引き連れて、最上階へ続く転送装置に乗り込んだ。クラトスはそれを留めようとユアンの武器を跳ね上げ、脇腹を蹴りつけて道を開こうとした。しかしユアンは吹き飛ばされつつも雷撃を放ち、クラトスを足止めする。

「ユアン！　私の邪魔をするな！」

「それはこちらの台詞だ。マーテルを永遠の眠りにつかせるために、ここは退かぬ！」

「大いなる実りが守護を失えば、大地が失われるのだぞ」

「違うな」

ユアンはクラトスに武器を向けた状態でジリジリと移動し、転送装置を庇う位置に立った。どうあってもクラトスを最上階には行かせぬつもりらしい。

「ロイドたちが精霊との契約を済ませたとき、大いなる実りが目覚める。救いの塔を中心に大樹が復活するのだ。そしてマーテルは樹の一部となって死ぬ」

ユアンの言葉にクラトスは思わず剣を降ろした。

「どうした、クラトス。もはや観念したのか」
ユアンが勝ち誇ったように笑う。
しかし精霊の楔を抜いたところで大いなる実りが目覚める筈がない。大いなる実りを目覚めさせるには、マーテルに注がれているデリス・カーラーンのマナを大いなる実りそのものに照射しなければならないのだ。デリス・カーラーンから操作をしなければそのようなことができる筈がない——そう思いかけたクラトスは、ふいに地上にも膨大なマナを消費する施設があることに気付いた。
人間牧場だ。あの場所にはデリス・カーラーンからマナの供給を受けた魔導炉がある。それを利用すれば地上からでも大いなる実りにマナを照射できるだろう。
「……まさか、デリス・カーラーンのマナを照射するつもりか？」
ユアンは答えない。しかし答えずともその笑みが全てを物語っている。
精霊の楔という守護を失った大いなる実りは、簡単に地上からのマナを受け取るだろう。そして急速にエネルギーを増した大いなる実りは大樹として成長する。
本来ならそれでいい。
だが——
「世界は二つに分かれたままだぞ。それに——」
「世界を一つに戻すのは樹が芽吹いてからでも問題ない。マーテル復活の目が失われれば、ミ

トスには何もできない。おまえもオリジンの解放に同意してくれるのではないのか？　まさか命が惜しいとは言わないだろう」
世界が救われるのならばそれもいい。
だが本当に大樹は復活するのだろうか。
樹が根を張る筈の大地は、二つに引き裂かれたままそれぞれ時空の狭間へ消えようとしている。大いなる実りは拠り所を失い、不安定な状態でマナを照射され、芽吹くのではないのか。世界にマナを供給する筈の大樹は、マナの照射を受けながら、マナを放出する場所を失い、自分の中でマナを膨張させていく。そのエネルギーは大樹を暴走させるのではないか。
クラトスはユアンに背を向けてマナの守護塔を出ようとした。転送装置が使えないのならば、外から最上階へ移動し、ロイドたちを止めるしかない。
しかしクラトスがきびすを返した直後、マナの守護塔が——いやシルヴァラント全体が悲鳴のようなきしみと共に激しく揺れだした。
ユアンが慌てて転送装置に飛び込んだ。クラトスもその後に続く。
最上階に出ると、戦いを終えた直後のロイドたちが呆然と辺りを見回していた。クラトスも彼らの視線を追う。すると遠く地平線の向こうに、真っ直ぐ天を貫く三本の光が目に入った。
「な、何だ……？」
ロイドが額の汗を拭って呟く。

「鳥肌が……」ジーニアスが両肘をさすって身体を縮こまらせた。「おかしいよ！　マナが嵐みたいにぐちゃぐちゃで……」

その直後、祭壇の封印から膨大なマナが発光しながら天に向かって溢れ出た。それは先ほど遠くに見えた光の柱と同じものだ。

「これは……。じゃあの光は各地の封印から──」

リフィルが言いかけたが、それより先に一際激しい揺れがマナの守護塔を襲った。クラトスもたまらず床に倒れ込む。そのとき床から唸(うな)るような音と振動が伝わってきた。クラトスが素早く視線をめぐらせると、マナの光を放出する祭壇がひび割れを起こし始めている。何か巨大なものがマナの守護塔を基礎から破壊しようとしているのだ。

「いかん！　逃げろ！」

クラトスがマナの羽を広げ、近くにいたリフィルを抱きかかえた。

「ユアン！　神子！　飛べぬ者を守れ！　早く！」

クラトスが指示を出すが、それより早く祭壇が崩壊し、床を割るように巨大な木の根が飛び出してきた。ユアンは状況が分からない様子であったが、それでも羽を広げると囚人服の男と幼い少女を助け出していた。コレットもジーニアスを抱きしめるようにして空を飛んでいる。しいなは精霊シルフを呼び出し、ゼロスと共に空を舞っていた。クラトスは落石を飛び越えるロイドを発見し、半ば強引に救い出すとその場から急いで離脱した。

何とかその場を逃れたクラトスたちの背後で、木の根にまとわりつかれたマナの守護塔は砂糖菓子のようにあっさりと崩壊してしまった。
「大地を木の根が這(は)っているわ……」
リフィルが震える声で呟いた。確かに大地を見下ろすと、地面を覆い尽くすように木の根が蠢(うごめ)いている。それは酷(ひど)く醜悪(しゅうあく)であった。木の根の元を辿っていくと、それらは世界の中心である救いの塔へと続いている。一同はそれぞれ木の根を目で追いながら、救いの塔へと視線を移動させ、そこにある「モノ」に戦慄(せんりつ)した。
救いの塔は樹に喰われていた。巨大な世界樹の異形に。
樹の周囲からはツタのように木の幹が伸び、塔を取り巻くように絡み合いながら救いの塔を支柱にしている。大樹の異形は大地を引き裂き、伸び続けている根を手足のようにうごめかせていた。
「大樹カーラーン……」
クラトスの言葉で、左腕に抱きかかえられていたロイドが樹を睨みながら声を裏返らせた。
「あれが……大樹カーラーンだってのか!? あんな化け物が!」
今まさに、クラトスの予測は現実のものとなってしまったのである。
一同は木の根が露出していない大地に降り立つと、呆然と異形の大樹を見つめた。
「やはり……こうなってしまったか」

クラトスが樹を見上げながらやりきれない思いで呟いた。樹の中心部ではマーテルの一部が木の幹に飲み込まれ、グロテスクに融合している。どうやらマーテル自身はまだ消滅していないようだった。

「どういうことだ！」

ロイドがこちらを睨み付ける。クラトスは頭を振った。

「大いなる実りが精霊の守護という安定を失い、暴走したのだ」

「そんな馬鹿な！　精霊は、大いなる実りを外部から遮断し、成長させないための手段ではなかったのか？」

ユアンがこちらに詰め寄ってくる。

「それだけではない。二つの世界はユグドラシルによって強引に位相をずらされた。本来なら、互いに分離して時空の狭間へ飲み込まれてしまうのだが、二つの世界の中心に大いなる実りが存在しているからこそそれは回避されている」

「そんなことは貴様の講釈を受けなくてもわかっている！」

「大いなる実りは離れようとする二つの世界に吸引され、どちらかの位相に引きずり込まれようとしている。故にいつ暴走してもおかしくない不安定な状態にあった」

「……待て！　それでは精霊の楔は、大いなる実りを二つの世界の狭間に留まらせるための檻（おり）として機能していた……そういうことか」

「その通りだ。安定を失った大いなる実りにおまえたちがマナを照射した。結果、それは歪んだ形で発芽し、暴走している……。融合しかかったマーテルをも飲み込んでな」
苛ついた様子でロイドが叫んだ。
「理屈はどうでもいい！　このままだと、どうなるんだ！」
「……クラトスの言葉が事実なら、シルヴァラントは、暴走した大樹に飲み込まれ、消滅する。シルヴァラントが消滅すれば聖地カーラーンと異界の扉の二極で隣接するテセアラもまた消滅する」
ユアンの言葉はどこか他人事のようであった。恐らくは事態を飲み込むのに精一杯なのだろう。
「……みんな……死ぬんですね」
テセアラ世界でロイドたちの仲間となった少女が抑揚(よくよう)なく呟いた。名前は確かプレセア・コンバティール。ハイエクスフィアの被験者だったと聞いている。感情反応が薄いのはそのときの影響なのだろう。
「……何とかしないと！」
ジーニアスが唇を嚙みしめていた。そんなジーニアスの横でしいなが頭を抱え込む。
「何とかって、どうするんだい！」
答えはない。何かをしなければならないことはわかっているが、どうしたらいいのか見当も

付かない。

「ユアン。貴様は……この始末どうつけるつもりなのだ？」

囚人服の男が静かにユアンに尋ねた。彼もテセアラの人間で、名前はリーガル・ブライアン。エクスフィアの流通に関わっている財閥の人間だと報告を受けている。だが彼の質問は今のユアンには酷であっただろう。ユアンは呻くように声を絞り出した。

「……マナの流れを切り替えて、照射を止めることはできる」

なるほど、異常成長した大樹のエネルギー源を断つということだ。しかし——

「しかしそれではあの大樹をおさめることはできない。采は投げられたのだ」

クラトスの言葉に、ゼロスがふと気付いた様子で振り返った。

「なぁ、テセアラでも、あの大樹は同じように暴走しているのか？」

「いや、それはなかろう。影響を受けて、地震程度は起きているだろうが……」

マナを照射したのはシルヴァラント世界からだ。影響を受けるのもシルヴァラント側だろう。

「……そうね。恐らくコレットの世界再生によってシルヴァラントの精霊が活性化している筈。だからシルヴァラントの精霊に引きずられて、こちらで大樹が暴走しているのよ」

リフィルの推論にクラトスも頷いた。マナの照射だけではなく精霊もまた大樹の暴走に影響しているのは間違いない。精霊の楔が失われたことが全ての発端なのだ。

「それは正しい。精霊たちはそれぞれ陰と陽の二つの役割を、神子の世界再生によって交代で

受け持っている。現在、陽であるマナの供給を担当しているのがシルヴァラントの精霊だ。だからこそ、大樹はマナの過剰摂取で暴走しているのだろう」
リフィルとクラトスの考察を聞いていたロイドが、不意に明るい顔で叫んだ。
「……だったら相反するもう一方の精霊の力をぶつければ中和されるんじゃないか？」
「……ロ、ロイド!?　意味わかってる？」
ジーニアスがロイドに駆け寄り額の熱を測る仕草をする。ロイドはそれをはねのけて肩を怒らせた。
「馬鹿にするな！　前に先生が磁石のプラスとマイナスは中和されるっていってた。そういうことだろ？」
「ロイド！　ちょっと違うけれどあなたにしては冴えてるわ」
よほど感動したのだろう。リフィルが頬を染めて手を合わせる。
「仮にテセアラ側の精霊をぶつけるとして、どうやってぶつけるんだい？　あんな風に暴れてる大樹の足下までは近寄れないよ」
しいながが遠くで蠢く大樹を睨み据えた。
「……魔導砲だ」
ユアンの答えに、プレセアが目を見開いた。
「魔導砲って、あのロディルが作っていたという機械ですか」

「あれは元々我々がロディルを利用して作らせていたものだ。精霊の守護が解ける前はロディルに救いの塔を破壊させて直接種子に近づくつもりだった」

ユアンがクラトスを憚るようにして言った。五聖刃を体よく利用していたというわけだ。確かにユアンならば魔導砲の事を知っていてもおかしくはない。そもそも魔導砲の開発は、かつてユアンが属していたシルヴァラント王国で行われていたものだ。

「魔導砲にテセアラの精霊のマナを込めて、大樹に向かって放つ……ということか。たしかにそれ以外方法はなさそうだな」

クラトスの言葉にリフィルも頷いた。

「まずは現状のマナの照射を止めなくては。マナの照射が続けば大樹はますます成長して中和どころの騒ぎではないわ」

「ではこうすればいい」クラトスがユアンを振り返る。「ユアンよ。貴様がどこに所属し何をしているのか、私は見なかったことにする。だから今すぐにレネゲードへ指示を出し、マナの照射を止めろ。ロイドたちは魔導砲へ向かえばいい」

「……よかろう」

ユアンは不承不承で頷き、部下を呼び寄せる。しかし伝令の兵は困惑したように首を振った。

「無理です！　イセリア牧場に潜入したレネゲードの同士は、フォシテスによって処刑されました！」

「どういうことだ？」
ロイドの問いかけに、ユアンが苦虫を噛みつぶした顔になった。
「……イセリア牧場はまだ機能している。内通者にマナ照射の切り替えをさせていたのだ」
「ようするに、今から侵入して照射を止めなくちゃならねぇってこったな」
ゼロスが面倒そうに両手を頭の後ろで組んだ。この神子はどんなときでも素顔をさらさないらしい。
「……では私が行こう」
クラトスが名乗り出ると、リーガルが落ち着いた深い色の瞳でこちらを見据えてきた。
「貴公が？　敵対する貴公一人を行かせるというのか？」
「我らの同志を向かわせる」
ユアンが会話に割って入ってくる。クラトスはそれを手で制した。
「魔導砲の準備。各地の魔導炉の停止。……レネゲードにはやってもらわねばならないことが多い。余計な手勢をさくな」
「……俺が行く」
ロイドが決意の表情で歩み出た。それを見て、しいなが慌ててロイドを引き留める。
「何言ってんだい！　こっちは魔導砲へ向かわないと」
「しいなとレネゲードで魔導砲に向かってもらう。俺たちと……クラトスでイセリア牧場へ潜

入する。しいなは俺たちの指示で魔導砲を撃て」

ロイドの言葉は明快だった。居合わせた全員が顔を見合わせ、それから誰からともなく頷いていく。いつの間にかロイドが旅の仲間を率いていたのだ。クラトスは驚きつつ、どこかそうであることに納得していた。好悪の情にかかわらず惹(ひ)きつけられる——ロイドはそういう少年だった。

第七章

1

久々に去来する感情——それが苛立ちだと気付いたのは、すかした顔の四大天使が、父親面して実の息子に語りかけているのを見たときだった。

例えば敵に剣を振り下ろすときの間合いだとか、太刀筋だとか、ロイドの些細な隙を見つけては、甘いだの教えを忘れるなだのと、恩着せがましく大上段に構えて説教をしている。

——馬鹿馬鹿しい。

ゼロスは舌打ちしたい気分で、クラトスとロイドの背中を睨み付けた。

ゼロスたちは異形化し暴走した大樹を鎮めるため、イセリアにある人間牧場に潜入していた。この場所にある魔導炉を止めなければ、大樹は無限に成長し、大地を喰らい尽くしてしまう。

事に当たってゼロスたちはいくつかの班に分かれて行動することになった。レネゲードは他の地方にある魔導炉を止める手筈だ。しいなは魔導砲の準備に向かった。リフィル、ジーニアス、プレセア、リーガルの四名は、イセリアの人間牧場に囚われている人々の救出にあたり、ゼロス、ロイド、コレット、クラトスの四名が魔導炉の停止に向かっている。

本当は魔導炉停止班になど参加したくはなかった。いや、正確に言えばクラトスと行動を共にしたくはなかった。ゼロスは端的に言ってクラトスが嫌いなのだ。
ゼロスがクラトスと出会ったのは、ゼロスが神子の位を受け継いで少し経ってからのことだった。暗い瞳の無口で無愛想な天使だった。いや、天使というのは概ねそんな奴らばかりではあったが、その中でもクラトスの印象は際だっていた。
ほとんどの天使は感情を失っている。だがクラトスのそれは他の天使たちとは違うようだった。強いて言うならゼロスの母親から感じた狂気——それに近い何かが心を覆っているような、そんな印象だ。
それが何故なのかは後に別の天使——テセアラの管理官であるユアンから聞かされた。
ゼロスに接触した当時、クラトスは妻と息子を亡くしたのだという。その亡くなった筈の息子がロイドらしい。亡くした筈の息子が生きていたのだから、あれこれ構いたくもなるのだろう。敵対しているくせに。
「——ああしてると、ロイドとクラトスさんって兄弟みたいだよね」
横を歩いていたコレットが微笑んで同意を求めてきた。ゼロスは作り笑顔で反応する。
「そーねー。っつーか、兄弟にしちゃ、兄貴のほうが薹が立ってるよなぁ」
「そっか。じゃあ親子？　でもクラトスさん、そんな歳じゃないよね」
年齢詐称してやがるからな——ゼロスは心の中で呟きながら肩を竦めた。

生き別れの親子だと気付いたのなら、何故敵対しているのか。何故名乗りを上げない。息子を裏切り、傷つけ、過酷な戦いに駆り出して、どうして澄ました顔をしていられるのか。

それでも息子に興味がないというのなら許せる。愛情がないというのならわかる。だがクラトスは確かにロイドに何かを求めようとしているのだ。親子であることは隠したまま、一方的に愛情と信頼と恐らくは希望を託し、見守ることで安全圏にいる。父親の責任を放棄しながら、甘美な疑似関係を築いて心地良くなっているのだ。何もかもが嫌でたまらない。

そういう人物をゼロスは他にも知っている。

普段は愛人の邸宅に入り浸り、ろくに姿を見せずに、都合のいいときだけ顔を見せに来た父親。その父と愛のない結婚をさせられ、義務から仕方なくゼロスを産んだものの、狂気に逃げ込んだ母親。

ゼロスは神子の屋敷で狂った母と二人きりの生活を強いられていた。

何を話しかけても人形のように答えない母を笑わせるため、ゼロスは躍起になって言葉を紡ぎ、気付けば相づちすらしない母親に語りかけるのが日課になっていた。

出会った頃のクラトスはあのときの母と同じように見えた。

だが母は暗殺者の手にかかり殺され、クラトスは何食わぬ顔で息子と会話を交わしている。

それが酷くゼロスを苛つかせた。

「この辺りじゃないか？」

ゼロスの苛立ちを消し去るように、明るい声がする。ロイドだ。ゼロスが顔を上げると、彼はいつものように何も考えていないような笑顔を向けてきた。
その笑顔を見ると心が痛くなる。
あまりにも簡単に人を信じるロイドという存在が、息苦しい。
ゼロスはロイドの心からの味方ではない。保身のため――それからこの世に残された唯一の肉親である妹のため、クルシスとレネゲードに情報を流している内通者だ。ロイドはクラトスに裏切られ、クルシスに騙され、今もゼロスに裏切られている。それなのに相も変わらず呑気な顔で、こちらを頭から信じようとするのだ。だから接するのがつらくなる。本当に自分がこのままでいいのか揺れてしまう。いっそ疑って欲しい。そのほうがこちらの心が軽くなるだろう。
ゼロスですらそうだというのに、実の父親であるクラトスは何とも思わないのだろうか。ゼロスがクラトスを睨む。クラトスは涼しげな様子でその視線を受け流し、ロイドに向き直った。その余裕がまた余計に腹立たしい。
「そのようだな。奥に見える転送装置の転送先が魔導炉だろう」
「わかった。急ごう！」
敵であるクラトスの言葉をみじんも疑うことなく、ロイドが転送装置に飛び込んでいく。次いでコレットもその後に続いた。ゼロスは舌打ちしてクラトスを促す。クラトスは苦笑してゼ

ロスの横を通り過ぎようとした。
「おい、アンタ」
「どうした？」
「何を考えてやがるんだ」
「私は私が正しいと信じることをするまでだ」
クラトスはそれだけ言うと転送装置に乗ってしまう。ゼロスも仕方なくその後に続いた。
魔導炉のあるフロアに到着すると、すぐ近くに制御盤らしきものが見つかった。ロイドがそこに駆け寄ろうとするが、その前に足下に向けて魔科学の装置が牽制攻撃をしてきた。ロイドはバックステップでそれを避けると武器を抜く。
「そうはいかない」
五聖刃のフォシテスが義手の奥に仕込んだ魔導銃を構えて近付いて来る。どうやらゼロスたちがやってくるのを待ち構えていたらしい。
「……おまえは……フォシテス！」
ロイドが歯ぎしりした。ここで時間を取られていては、地上は大樹の暴走によってますます荒れてしまう。そのことがロイドを焦らせているのだろう。
「通して下さい！　このままでは大いなる実りの暴走で世界が消滅してしまいます！」
コレットが手を組み、必死に訴えかけた。だがフォシテスは眉一つ動かさない。

「知ったことか。世界が消滅しようと我らハーフエルフには何の支障もない」
「何故ですか！　あなたたちにとっても大地は大切な物でしょう！」
「我らにはデリス・カーラーンがある。全ての命の源、マナそのものの大地がな！　人間によって汚された大地など滅びたところで何の問題もありはしない」
「プロネーマの説得は逆効果になったか……」
　クラトスが呟いた。ゼロスはちらりとクラトスを見る。クラトスはそれに気付きゼロスに目配せしてきた。どうやら時間を稼げということらしい。悔しいが今はクラトスに反発している場合ではなかった。ゼロスはロイドとコレットを押しのけ、フォシテスの前に進み出る。
「おまえらの大将ユグドラシルはそれでいいと言ってるのかよ」
「おまえがそれを問うのか？」
　フォシテスの言葉にゼロスは心臓が凍り付いた。だが何とか平静を装う。ゼロスの正体をロイドたちに悟られてはならない。
「……フフ。まあいい」フォシテスはゼロスを見下したように笑った。「大いなる実りを放置することはユグドラシル様のご命令なのだ」
「……マーテルが大いなる実りと融合しているからか。そこまでしてマーテルを護るというのか、あれは……！」
　クラトスが掠れた声で呻く。

「……おまえは何者だ？　ユグドラシル様を、あれなどと！」
どうやらフォシテスはクラトスと面識がないらしい。ゼロスは驚いてクラトスを振り返った。その瞬間ゼロスは、クラトスが魔術の発動準備を済ませていたことに気付いた。
「……ロイド！　時間がない。蹴ちらすぞ」
クラトスの言葉にロイドが剣を構えた。
「わかってる！」
「おまえたちの好きにはさせん」
フォシテスが魔導銃を充塡した。しかしその前に、チャージが完了していたクラトスのグレイブが発動する。フォシテスは不意を突かれ、足下から突き刺さる魔術の岩をもろに喰らってしまった。
フォシテスの隙を見て、ゼロスが一気に間合いを詰めた。起き上がりに断空剣を叩き込み、飛び上がりざまにバク宙して相手の顎を蹴りつける。
「フォシテスは俺さまが抑える。おまえたちは——」
「変な魔科学の装置を叩くんだな」
ロイドが頷き、コレットとクラトスに指示を出して、フォシテスを護衛する機械へ集中攻撃を加えだした。
ゼロスは魔神剣でフォシテスに追撃する。しかしフォシテスは身体を反転させて起き上がる

と追撃を避けた。そこに詰め寄り、差し込まれたゼロスの剣を、義手で跳ね上げて、隻眼を怒らせる。
「貴様、自分の立場がわかっているのか」
「充分わかってるってぇの」
ゼロスはフォシテスを押し出すようにして距離を取り、回し蹴りを叩き込む。防御姿勢をとり続けたフォシテスはその間に詠唱を済ませ、魔術を発動した。
「エアブレイド！」
風の刃がゼロスを襲った。そこへさらにフォシテスの魔導銃から連弾が叩き込まれていく。
「ちっ！　うぜぇなぁ……」
ゼロスは防御を余儀なくされた。だが突如コレットの涼やかな歌声が辺りを包み込んだ。天使術だ。その聖なる歌声が、ゼロスに力を与える。
「ありがと～コレットちゃん！」
ゼロスはフォシテスの攻撃を振り払い、風迅剣でフォシテスを後方へ押しやった。直後心地の良い風がゼロスの身体を癒していく。ヒールウィンドだ。この癒しの術を使えるのは自分と──
ゼロスが後方を振り返ってクラトスを睨む。
「集中を乱すな！」

クラトスは一喝し、ゼロスの脇を駆け抜けて、体勢を崩したフォシテスを蹴り上げると、回転斬りからの突き上げ攻撃を叩き込む。
「閃光墜刃牙！」
どうやらお供のほうは片付けてしまったようだ。ロイドも空中を回転しながら移動し、フォシテスの傍まで距離を詰めると、双剣で斬りかかった。
「虎牙破斬！」
四人がかりとなるとフォシテスも身動きが取れなくなる。義手を振り回し、距離を取って魔術を繰り出すが、すぐにゼロスたちによって追い詰められてしまった。体勢を崩したところにロイドが駆け寄り、双剣でフォシテスの両肩口を深く斬り込んだ。その後フォシテスの胸を蹴り、空中で回転して着地する。
フォシテスは喀血しながらも、こちらを睨み据えた。
「私も五聖刃と呼ばれた男……。ただでは……死なん！　劣悪種どもも道連れにしてやる！」
フォシテスは全身から鮮血をしたたらせ、呻いた。
「ディザイアン一の英雄と謳われたおまえが、そのような末路を辿るのかフォシテスよ」
クラトスの言葉にフォシテスの瞳が見開かれる。
「……そうか、わかったぞ。人間風情でありながら魔力の匂いを漂わす者！　おまえがクラトス……か」

「それがどうしたと」

「ユグドラシル様のご信頼を受けながら……やはり我らを裏切るのだな！　だから人間など……信用できぬのだっ！」

そう言ったフォシテスの瞳が、一瞬、ゼロスを映したような気がした。思わず硬直したゼロスの脇を、フォシテスが最後の力を振り絞るように走り抜ける。フォシテスの狙いは、自身にとどめを刺したロイドであった。フォシテスは義手を制御するエクスフィアを取り外し、魔導銃のエネルギーを急送充塡した。

「いかん！　自爆するつもりだ！」

クラトスが床を蹴ってフォシテスに駆け寄る。しかしそれより早くコレットがロイドを庇い、半ば体当たりするように抱きついた。フォシテスの魔導銃はコレットの肩に衝突し、そのまま至近距離で暴発する。クラトスが反射的にフォシテスの腕を斬り飛ばしたが、魔術エネルギーは膨張してコレットの肩を切り刻んだ。コレットは露出した肩を隠すように抱えて座り込む。ようやく我に返ったゼロスは、追撃するクラトスと共に瞬迅剣を放ち、フォシテスを魔導炉の下へ叩き落とした。

「コレット、大丈夫か！」

ロイドが慌てて起き上がり、コレットを抱き起こす。しかし顕わになった肩口から覗く皮膚を見て絶句した。

コレットの皮膚は薄い青緑の多結晶体と化していた。乱雑な光を反射する鉱石の肌。結晶の一つ一つにはまるで目のようにも見える暗点が存在する。あまりにもグロテスクだ。
「み、見ないで！　見ないで――……」
コレットは身を捩りながらも、ロイドの腕の中で気を失ってしまった。ロイドはコレットの皮膚に触れ、その感触に我が手を疑うような仕草をした。
「どうしてこんなことに……」
「こいつはエクスフィア……。いやそれともクルシスの輝石なのか？」
ゼロスもコレットの肌を見て困惑した。確か神子は病気で使い物にならないとクルシスの連中が言っていたが、この肌がそうなのだろうか。クラトスに問いかけようとしたが、彼はコレットに背を向けて制御盤に向かっていた。こういう冷血とも思える冷静さが嫌いだ。その行動が最善とわかるだけに、怒りのやり場もないのがさらに腹立たしい。
「魔導炉からのマナの照射は停止させた。これで大樹へのマナの供給は止まった筈だ。あとはしいなに指示を出して、魔導砲で大樹を鎮めるだけだ」
「ああ……」ロイドは困惑した様子でクラトスを見上げる。「だけどコレットが……」
「神子は気を失っているだけだ。傷が治癒すれば問題ない」
「問題ないわけないだろ！　この……」
それ以上どう言っていいのかわからないのか、ロイドは口をつぐみ、コレットの変質した肌

を見下ろした。
「神子を救いたければ……古代カーラーン大戦の資料を調べるといい。そうすれば手がかりが得られる筈だ」
たまりかねたようにクラトスがぽつりと呟いた。その言葉にロイドが驚いて目を見開く。
――なるほど。クルシスの天使様は全てご存じというわけだ。
ゼロスは意地の悪い笑みを浮かべた。
「手がかりって事は、何か知ってるって事だよなぁ」
「なら教えてくれ！　コレットのために！」
ロイドが食い下がる。クラトスは渋い顔でゼロスを睨むと背を向けてしまった。
「私はクルシスの天使。本来ならばおまえたちとは相容れない立場だ」
「……あんたはやっぱり……敵なのか？」
ロイドがコレットを守るように抱き寄せた。
「おまえがクルシスやディザイアンを敵だと言うのなら……私は敵だろう」
「俺は……あんたを敵だなんて思いたくない」
クラトスは驚いたようだった。それはゼロスも同じだったが。ロイドのお人好しにはほとほと呆れてしまう。
「別にあんたを許したわけでもあんたが好きなわけでもないけど、あんたは他のディザイアン

みたいに大いなる実りもこの大地も見殺しにしなかった。そういう奴を敵だなんて思うのは……おかしいって思ったんだよ」

ロイドの言葉に何か思うところがあったのだろう。クラトスは小さく息をつき、こちらに向き直った。

「……強くなったな」

「え?」

「旅を始めた頃のおまえなら、天使であるだけですべて敵だとみなしていただろう。まるで人間やエルフがハーフエルフを、ハーフエルフが自ら以外を……憎むように」

「そうかな……。俺、そうだったかな」

「人は誰しも自分と違う者を受け入れるのに抵抗がある。神子が世界を救い、ディザイアンは全て悪で、人間は全て正しいという世界にいれば、それだけを信じるほうがたやすい。事実、おまえはそれを信じて神子の旅についてきた」

ロイドは抱き寄せたコレットの顔を見下ろして、自嘲する。

「……そうだな。そうだった。でもディザイアンがやってたことは許せないし、クルシスも許せない。あいつらがやってることは自分たちがされたことに対する仕返しだろ? それじゃ新しい憎しみを生むだけだ」

「そうだ。それがわかったおまえだから、強くなったのだ。人や周りの意見に流されず、自ら

の見たものを信じる強さ。そして自分が嫌悪する者への理解。心の目でものを見て、それが不快であろうと受け入れようとする勇気がおまえの中に芽生え始めた」
「……コレットがよく言うんだ。どうしてみんな仲良くできないのかなって」
ロイドがクラトスを見上げる。クラトスも微笑(ほほえ)んで頷(うなず)いた。
「ふむ。この神子ならそう言うだろうな」
「でも俺……みんなが仲良くしなきゃいけないとは思わない。嫌いな奴は嫌いでいい。むかつく奴もいる。でも……そこにいることをお互いに許し合えればいいんだって思うんだ」
ああ、これがロイドだ——ゼロスは唇(くちびる)を噛(か)んだ。
そう思えれば——いや、そう思ってもらえれば、どんなにかこの世界は生きやすいだろう。
「……あんたもいてもいいと思う」
「……いや。私には成すべきことがある。おまえたちと共に旅することは……できぬ」
ゼロスが心の底から欲している言葉を与えられたのに、クラトスはそれを拒絶した。
だからゼロスはこの男が嫌いなのだ。

2

アルテスタの家を出ると、満天の星空がユグドラシル——ミトスを迎えてくれた。

そっと腕を伸ばすと、四千年前と変わらぬ小さな手の先に、一際大きく輝く青白い星が見える。

──眠れない夜はね、星を数えるんだ。

そう言ったとき、かつての仲間であった騎士は驚いたように目を瞬かせたものだ。

エルフの里で生まれたミトスには、心を許せる友などいなかった。唯一の楽しみは夜の森で木に登り、星を眺めることだけだった。

でもやがてミトスにも仲間ができた。ミトスは人々と触れ合うことを知り、世界を愛するようになり、世界からも愛された──筈であった。

星へ向けて伸ばした左腕の下が、引きつるように痛み出した。ミトスは顔を顰め、脇腹を抱えるようにして、近くの岩壁にもたれかかる。

ミトスがアルテスタの元に身を寄せてから色々なことがあった。

オゼットに降臨し、単純なクラトスの息子を騙して彼らの懐に飛び込んだ。そこまでは計算通りだ。ほんの少し様子を見て、気に入らないことがあればその場で始末してしまおう──そう考えていたミトスは、ロイドと彼らが創り出す輪の中で甘美な憂うつに浸ることになってしまった。

まるで砂糖で作られた蟻地獄だ。甘さに足を絡め取られ、息もできずに引きずり込まれる。

かつてミトスが失った光の世界に。ロイドたちの旅はまるでミトスの旅そのものだったのだ。

これは狂わされる。クラトスでなくても。
ミトスが脇腹に負った傷も、光の世界に身を置いた代償だ。
アルテスタの家には、かつてクルシスで作り、廃棄した筈の自動人形(オートマータ)がいた。それはマーテルの身体を人工的に造る研究の一貫で、自動人形の姿は若かりし頃のマーテルを参考に製作されたものだ。しかし自動人形にマーテルの心が宿ることはなく、計画は中断された。その自動人形がタバサという名でアルテスタと共に生活していたのだ。
いつしかミトスはタバサを姉と同一視していた。違うとわかっていながら心を開きそうになってしまう。そしてシルヴァラントでの大樹暴走が発生したのだ。あの一件はテセアラにも地震の被害を引き起こした。アルテスタの家でも岩壁の一部が崩れ、タバサを押しつぶしそうになった。そのときミトスは、思わずタバサを庇っていたのだ。自分がハイエクスフィアを装備していないことも忘れて。
治療は受けたものの、まだ傷は完全に癒えていない。治癒術もハイエクスフィアをつけていなければ効果が低い。治療のためにデリス・カーラーンへ帰還するよう、プロネーマから何度も懇願(こんがん)されていたが、ミトスは鎖(くさり)に繋(つな)がれたようにこの場所から抜け出せないでいた。
全ての原因はロイドだ。この光の世界の空気を生み出している者――仲間の中心で笑っているロイドを始末すれば、ミトスはこの狂って正しい世界から逃れられる。
きぃ……という蝶番(ちょうつがい)の軋(きし)んだ音が聞こえた。振り返るとアルテスタの家からゼロスが赤い

髪を掻き上げながら不機嫌そうに歩いてくる。ミトスが森のほうへと促すと、ゼロスはそっぽを向きながらも渋々こちらに付いてきた。

かなり森を進んでから、ミトスは辺りを見回した。

周囲は驚くほど静かだ。夜の森とはいえ、動物の鳴き声一つ聞こえないのはおかしい。森の生き物がミトスたちの力を把握して身を潜めているのか、あるいは何者かが潜んでいるのだろう。

潜伏者の正体に、ミトスはおおよその見当が付いていた。

少し前まで、このオゼット地方には神木があった。

ミトスが降臨した際に全て燃やし尽くした筈だが、それを入手したくて蠢(うごめ)いている者がいる。

「この辺りまで来れば、コレットの耳でも聞こえないかな」

コレットは中途半端とは言え天使体だ。聴覚機能には気を配る必要がある。

「……用心深いことで。あのチビとの友情ごっこはそんなに楽しいのかい？」

ゼロスが口の端を歪めながら吐き捨てた。神子ゼロスはクルシスの内通者だ。ミトスが降臨してからは、こうして何度か直接情報をやりとりしている。

「おまえには分からないよ、神子。おまえは薄汚い人間なんだから」

「ははは、違いない。だがあんたのお仲間にも、薄汚い人間様がいらっしゃったんじゃありませんかねぇ？」

「仲間、ね。確かに仲間だったよ。四千年前までは。あの頃は僕の味方だと思ってたんだけどな。──ねぇ、クラトス？」
ミトスが木々の深く黒い影に向かって、からかうような声を上げた。
「……いるのか!?」
「いつまでかくれんぼしているつもり？」
ミトスの言葉に観念したのか、クラトスが苦い顔で姿を表した。気配を消しきれなかったのを悔やんでいるのだろう。
「……立ち聞きかい？」ゼロスがここぞとばかりに言葉の刃を振るう。「クルシスの天使様も品のよろしいことで」
「おまえほどではないな」
「……んだとぉ？」
睨み合う人間二人を見つめていたミトスは、ふと思い出したように微笑んだ。
「新旧裏切り者が顔を揃えたってわけだ。お人好しのロイドが知ったら、どう思うかな」
途端にクラトスもゼロスも言葉を無くす。結局この二人も人がいいのだ。そういう人間は簡単に利用されて棄（す）てられる。かつてのミトスたちのように。
「……ユグドラシル様。ここで何を？」
クラトスに尋ねられ、ミトスは思わず顔を歪めた。

「それはボクの台詞（せりふ）なんだけど。クラトスこそこんなところで何をしてるのかな？　まさか、十数年ぶりに再会した息子可愛（かわい）さに、余計な世話を焼いてる、なんてことはないよねぇ？」

「シルヴァラントの神子の、永続天使性無機結晶症を観察しておりました」

　ここでミトスに出会うとは思っていなかっただろうに、よくもまあそんな言い訳ができるものだ。まぁ、確かにその役目を命じたのはミトス自身ではあるが、それを建前にして神木を探していたことは容易に想像が付く。

「都合のいい言い訳だね。でもテセアラ側の管理はユアンの仕事だ」

「ユアンは最近、あまりテセアラへ姿を見せていないようでしたので」

「それはそうだね。あいつはあいつで、色々勝手をしてるってことはわかってるよ」

　プロネーマの忠告通りであった。ミトスはロイドたちがレネゲードと接触していることも、彼らの首領がユアンであることも聞き及んでいる。だがユアンはいい。元々奴はミトスの計画に強く反発していた。でも――

「クラトスも随分勝手なことをしてるみたいだけど？」

　クラトスは顎（あご）を引き、唇（くちびる）を真一文字に結んだ。

「だんまりか。まあいいよ。クラトスは僕の師匠だからね。もう少し見逃してあげるよ」

　これも嘘だ。嘘嘘嘘。全て嘘で塗り固められている。クラトスの動きは逐一（ちくいち）プロネーマが報せてくれている。もはやクラトスの裏切りは確定しているのだ。見逃しはしない。

「んで、クルシスのお二人さんよ。さっきから俺さまを丸無視で話進めてっけど、俺さまに用がねーなら、さっさと帰らせてもらえねーかな」
ゼロスが心底つまらなそうに頭をかいた。
「文句なら、クラトスに言ってよね。クラトスがこんなところに現れるのがいけないんだから」
「……ほーんと、目障りなんだよねぇ。ちょろちょろちょろと」
ゼロスの視線を受けてクラトスが薄く笑む。
「……何笑ってんだよ」
「失敬。神子があまりに子供なのでな」
「……言ってくれるじゃねぇかよ、おっさん」
再びゼロスがクラトスに噛みつきそうになった。まったくこの神子はクラトスの何が気に入らないのか。うるさくてかなわない。
「二人とも、言い争いなら後にしてくれる？　ゼロスはともかく、ボクがあんまりアルテスタの家から離れていると、心配されるからね」
「……へっ」
ゼロスは子供のように唇を突き出してむくれた。
「でもまあ、ついでにクラトスにも話しておこうかな。コレットのことなんだけど、処遇を決

めたから、その報告と次の指令」

「……なんだよ。永続なんたらってので、コレットちゃんはもう使えないって話じゃなかったのかい？」

「その治療のために動き回ってたんでしょ？　ボクも協力してあげたじゃない」

大樹の暴走を鎮めた後、ロイドたちは古代カーラーン大戦の資料を調べると言いだした。そこにコレットの病を治すための糸口がある筈だと。その情報源がクラトスだと知ったとき、ミトスはクラトスの真意を測りかね、暫し悩んでしまった。

確かにロイドたちにコレットの永続天使性無機結晶症を治療させるため、コレットを放置するように命じたのはミトス自身だ。だがミトスを裏切ったクラトスがその策に素直に乗るわけがない。ミトスの思惑をロイドたちに告げて共闘しているのではないかと疑いもした。だが今のところクラトスにその動きはないようだ。

「まったく、わざとらしいことで」

ゼロスが馬鹿にしたように笑った。ミトスは反射的に魔術でゼロスを攻撃する。ゼロスは仰け反るようにして、ミトスの光の矢を回避した。

「何すんだよ!?」

「……へぇ。なかなかいい身のこなしじゃない。さすが、あちこちに出没していい顔してみせてるだけのことはあるね」

痛いところを突かれたゼロスが、言葉を失って乾いた笑みを浮かべる。ミトスはゼロスの前に立つと噛んで含めるように言った。

「今からする話、もしもどこかへ筒抜けになったら、そのときはおまえもおまえの妹も、命の保証はできないよ」

「……エグい話だな」

何事かを思案していたクラトスが、ふと顔を上げてきた。

「ユグドラシル様。コレットをどうなさるおつもりですか」

「ウィルガイアへ連れていく。いや、連れてきてもらうってところかな。どのみちロイドたちはマナの欠片を手に入れようと、救いの塔まで来る。そこを捕らえるんだ」

結局ロイドたちは、かつての資料から、永続天使性無機結晶症を治すための装置を復元する方法を見つけ出した。ジルコンとマナリーフ、それにマナの欠片をドワーフの技術で組み上げ、ルーンクレストというハイエクスフィアの補助装置を製作する。ロイドたちは既にジルコンとマナリーフを入手しており、残りはマナの欠片だけというところまでこぎ着けていた。現在マナの欠片はクルシスの中枢であるウィルガイアにしか存在しない。

「何故、今なのですか」

そう尋ねるクラトスの目はどこか哀れみを帯びていた。ミトスは何故か頭に血が上り、吐き捨てるように口を開いた。

「何故って……そんなことを聞くの？　決まってるでしょ。もうロイドたちの観察に飽きたからだよ」

「ユグドラシル様……」

「おまえが入れ込んでる息子ってのがどんな奴なのか、見てみたかっただけさ。だからコレットの永続天使性無機結晶症も静観してたんだ」

「つまりユグドラシル様の気まぐれだったってわけだ」

ゼロスが混ぜ返す。

「否定はしないよ。だって興味が湧いて当然でしょう？　クラトスがボクを裏切るきっかけになったあの女の息子だよ」

加虐(かぎゃくてき)的な気持ちがミトスを支配し、突き動かした。これはクラトスにとっての禁句だ。知っていて、言わずにはいられなかった。

「……その血が、また裏切りをそそのかすかも知れないもの。ねぇ、クラトス？」

案の定クラトスは瞼(まぶた)を閉じて、全てを放棄したようにため息をついた。ミトスもふと我を取り戻し、クラトスに背を向ける。

「とにかく、ロイドたちが救いの塔に来たところを始末する」

しかしいつもならそのまま黙り込むクラトスが、このときは食い下がってきた。ミトスの前に回り込み、臣下の礼をとる。

「お待ち下さい。ならばせめて、彼らをウィルガイアへ幽閉(ゆうへい)するわけにはいきませんか」
「何言ってるの？　あいつらを生かしておいても、ボクにはなんのメリットもないんだけど」
「ロイドのエクスフィアがあります。あれはハイエクスフィア研究の集大成。ロイドを我らの味方にして、さらに研究を続ければ、ハイエクスフィアの再生産にこぎ着けられるのでは？」
「もちろん、あのハイエクスフィアは回収するよ。でもロイドはいらない。研究なら、そこのアホ神子にでも寄生させればいい」
　突然話題を振られ、ゼロスは「げ……」と小さく呻いた。クラトスは構わず続ける。
「いえロイドはハイエクスフィアに寄生された母親から誕生しました。つまり胎内にいるときからハイエクスフィアの影響を受けています。このようなケースは今までになかった。ロイドはあのハイエクスフィアとの融和性がもっとも高い存在です」
　その点はミトスも気になっていた。例えクラトスの血を引いていようと、ロイドはただの人間だ。そのロイドがハイエクスフィアを制御し、使いこなしていることがミトスには疑問だった。クラトスの推測には一理ある。それが息子の命を救いたいがための言葉であったとしても。
「……ロイドがボクらの元に下ると思う？」
「私が説得してみせます。それでも応じなかったときは、……要の紋を取り外しましょう」
「要の紋を取り外したら、完全にハイエクスフィアに寄生されるんだよ？　それとも、自我を失っても、生きてさえいればいいってこと？」

「……お願い致します」

そのとき、ミトスたちのいる場所から少し先にある草むらが小さく揺れた。ミトスがちらりと視線をやる。同時にゼロスも音のしたほうへ瞳を動かした。そんな二人とは対照的に、クラトスは微動だにしない。ハイエクスフィアをつけているクラトスが、あの音や気配に気付かないわけはない。知っていて無視するつもりなのだろう。

――ということはまさかレネゲードかな？

ミトスは何食わぬ顔で会話を続けた。

「……いいよ。そんなに言うなら、全員生かして連れていく。一人でも殺せば、ロイドはこっちになびかないだろうしね」

「その役目は……」

「わかってるよ。クラトスは自分で連れていきたいんだろう？　好きにすればいいよ」

再びゼロスがにやりと笑う。

「裏切り者の人間にお甘いことで」

言いながらゼロスは僅(わず)かに身体を左へ動かした。ミトスは自分と草むらに潜む何者かの間に障害がなくなった隙をついて、雷撃を落とした。

「キャア!?」

予想に反して女の悲鳴が聞こえた。ミトスたちが近づくと、ハーフエルフの女が倒れている。

髪をまとめて眼鏡をかけた姿は知性的に見えた。
「この娘は、サイバックの研究所にいた……ケイトとか言ったか……。確かハーフエルフだったな」
クラトスが意外そうに呟く。なるほどクラトスも潜んでいる人物を勘違いしていたのかも知れない。
「……ふーん。レネゲードのネズミかと思って攻撃してみたけど、違ったみたいだね」
「どうするんだよ。おまえの同族だぜ」
言葉とは裏腹に、ゼロスがケイトを優しく抱き起こした。どうやら彼女とは知り合いのようだ。ロイドたちとの旅の途中で出会ったのだろう。
「話を聞かれたみたいだから、このままにはできないね。……クラトス」
「……はっ」
「彼女をウィルガイアへ連行しろ。そのままおまえはロイドを迎える準備をしておけ」
ミトスの命令に、クラトスは膝をついて頭を垂れた。そしてゼロスに代わってケイトを抱き上げる。
——さて、本当に大人しくロイドたちを捕まえておいてくれるのかな。
ミトスは冷ややかな瞳でクラトスの横顔を見つめた。

3

「ロイドさんたちは無事に逃げられたでしょうか……」

茜色(あかねいろ)に染まる空――そこを貫くようにそびえる救いの塔を振り返って、ケイトが呟いた。

「警備を担当している天使たちの様子を見る限り、何とか逃げおおせてくれたようだ」

クラトスも救いの塔を見上げた。

夜のガオラキアの森で受けたユグドラシルからの命令通り、ゼロスはロイドたちを絶妙のタイミングで救いの塔へ導いてきた。クラトスは彼らを拘束(こうそく)し、ウィルガイアへと連行した。ここまではミトスの指示通りだ。

その後ロイドたちはクラトスが手薄にしておいた牢(ろう)を抜け出し、マナの欠片を入手してから地上への脱出を試みた。その間クラトスはロイドたちへの追っ手が分散するよう立ち回り、その後頃合いを見計らってケイトを救出したというわけだ。

だが話を聞く限りでは、ウィルガイアを脱出してきたロイドたちをユグドラシルが待ち受けていたらしい。クラトスがロイドたちを逃がすことが読まれていたのかも知れない。再度捕まるか――もしくは処刑されていてもおかしくはなかったが、ユグドラシルはロイドたちを見逃したようだった。あるいは戦いでユグドラシルを退けたのかも知れぬが、今のロイドたちの力

量でユグドラシルに勝てるかは微妙なところだ。ユグドラシルが見逃した、もしくは別の要因で見逃さざるを得なかったのだろう。だがそのことをケイトに知らせても仕方がなかった。彼女はただの研究者だ。ハイエクスフィアの研究に携わっていたようだが、クルシスとの戦いに巻き込むべき人物ではない。

クラトスはケイトに向き直った。

「さて、貴女を送ろう。どうせユグドラシルも貴女の所在を気にはかけまい。どこへ送ればいい？　サイバックか？」

「いえ……。できればオゼットへお願いします」

「オゼット？　あそこはもう何もないが……」

「……できるなら、私はあの村を復興したいのです」

ケイトにはオゼットへの強い思い入れがあるのだろう。承知した——そう言いかけたクラトスの耳に空気を切り裂く刃の音がした。クラトスは左手でケイトを突き飛ばし、深く身を沈めて一撃めを避け、そのまま剣を抜いて素早く突き上げた。襲撃者は軽い身のこなしでクラトスの剣を避け、ダブルセイバーをこちらに向けてくる。クラトスも剣を構えたまま素早く体制を立て直し、相手に向き直った。

「ユアン！　何のつもりだ！」

声を荒げるクラトスに、ユアンは超然と胸を反らせた。

「どうということもない。ただ我々と共に来て欲しい」
「断ると言ったら？」
「ここで戦うことになる。本気で戦えば、互いに無傷では済まないだろう。そこのハーフエルフの女も、巻き込まれるかもしれんな」
クラトスは素早くケイトへ目を走らせる。既に彼女の周囲にはレネゲードの雑兵たちが散開していた。ケイトは青ざめた顔のまま、気丈にも平静を装おうとしていた。
「私のことは気にしないで下さい」
「よく手懐けてあるな」ユアンが冷笑する「だが忘れたわけではなかろう？　おまえの息子の傍に、テセアラの神子がいることを」
クラトスは奥歯を噛みしめた。今ロイドを失うわけにはいかない。クラトスに成し得なかったことをロイドに託さねばならないのだ。
「……ロイドに何をするつもりだ」
「大人しく我々と共に来れば、どうということはない。……今のところはな」
「――わかった」
クラトスはユアンの指示に従うより他になかった。
レネゲードたちにケイトを任せ、クラトスはユアンと共にエレメンタルカーゴへ押し込まれた。そのままエレメンタルカーゴに揺られること数時間、辺りがすっかり夜の闇に溶けた頃、

クラトスは森の外れへと降ろされた。
月明かりに照らされた岩肌。黒く広がるいびつな森。クラトスはこの景色に見覚えがあった。
「アルテスタの家か……」
ユアンの魂胆(こんたん)は読めた。現時点で、魔導炉を利用したマナの照射では大樹を復活させることはできない。やはり何よりもまず二つの世界を一つにすることが最優先だと考えたのだろう。逆に考えれば、世界を一つに戻しさえすれば、魔導炉を使い、今一度大いなる実りを発芽させることもできるかもしれない。そのためにはエターナルソードの所有者としてオリジンに認められる必要がある。
つまり当初の計画に立ち返ったということだ。
ロイドを捕らえ、彼を人質としてクラトスを屈服させる。
クラトスがロイドに全てを託して自死するまで待つことはできないらしい。
「……ユアンの奴。手段は選ばぬというわけか」
もう逃れられないだろう。ロイドに真実を告げられてしまう。
これが運命だったのかも知れないとクラトスが諦めた瞬間、それを待っていたかのようにアルテスタの家の扉が開いた。不安げなロイドがユアンに連れられてこちらに歩いてくる。
「……クラトス！　レネゲードはクルシスと敵対関係なんだろ！　なのにどうして……」
「静かにしろ。……もっとも、皆、薬がよく効いてぐっすり眠っているだろうがな」

ユアンの言葉に何やら思い当たる節があったのだろう。ロイドははっと顔を上げ、ユアンを睨み、それから誰かを捜すように視線を彷徨(さまよ)わせた。

「……ダイク親父(おやじ)はどこだ。親父に何かしやがったら、おまえら全員ただじゃすまさないぞ!」

「久々の親子の対面にそんな無粋はないだろう」

キョロキョロしているロイドの背中をユアンが突き飛ばす。ロイドはたたらを踏みながらクラトスの前へ飛び出した。

「……うわっ!」

クラトスが駆け寄るより前に、レネゲードの雑兵たちが武器を構えてロイドを取り囲んだ。すかさずユアンがこちらに一喝する。

「動くな!」

クラトスは武器から手を放し、ユアンの前で棒立ちになる。

「……やはりハイマで私を狙った暗殺者はおまえだったのだな」

あの頃からユアンは、隙あらばクラトスの命を狙っていた。彼にとってはロイドもクラトスを動かすための手駒に過ぎない。思えばいつもクラトスの業(ごう)を、ロイドは背負わされてきた。

「クラトス。息子の命が少しでも惜しいと思うのなら我々に従え」

「何を……言ってるんだ?」

ユアンの言葉に、ロイドは笑いかけ、そのまま顔を強張らせる。
やがて冗談ではないことがロイドにも理解できたのだろう。ごくりと唾を飲み込んだ音が聞こえた気がした。クラトスは思わず息を止める。
直視したくない。だが、目を逸らせない。
「オリジンの封印を解放しろ。さもなければロイドはここで死ぬことになる」
ユアンの言葉に合わせてレネゲードの武器がロイドの喉元に強く押しつけられた。その行為がロイドに真実を悟らせた。
「う、嘘だろ？　クラトスが俺の……親父なわけないだろ。俺は信じない……信じられない！」
「実の息子にここまで否定される気持ちはどんなものだ？」
否定されるほうがいい。クラトスは父として何もできなかった。今も自らの責を背負いきれず、ロイドにまで咎を与えている。むしろ完膚無きまで叩きのめされたほうがいいのだ。
クラトスが小さく笑むと、ユアンもクラトスの意志を悟ったらしい。
「……その様子ではオリジンの解放に同意するつもりはないようだな。それならば……おまえに死んでもらうだけだ！」
ユアンがダブルセイバーを振り回した。とっさに身体が回避しようと動いてしまう。しかしすぐにロイドの口から悲鳴が漏れた。レネゲードの剣がロイドの肩口を貫いている。クラトス

は不自然な形で動きを止め、ユアンの一撃を左腕から袈裟懸けに喰らって膝をついた。ユアンは失望とも憐憫ともとれる瞳をこちらに向けた。

「貴様は家族ができて変わったな。十五年前のあのときもアンナを化け物に変えられておまえは抵抗の術を失った」

「……何？」

ロイドが瞳に怒りを宿して顔を上げる。

「アンナもおまえについていかなければあのような姿になることもなかった。哀れな女だ」

「母さんを愚弄するな！」

ロイドは傷が開くのも構わずレネゲードを振り払い、ユアンに殴りかかった。ユアンは身体を引いて避けると背後に回り、ロイドの頭上に武器を振り上げる。

その瞬間、理屈ではなく、身体が動いた。クラトスは低い姿勢で大地を蹴り、ユアンとロイドの間に飛び込んだ。振り下ろされたユアンの凶刃はクラトスの背中から腰を深くえぐった。

「……クラトス？」

倒れ込んだクラトスの下で、ロイドが顔を強張らせている。その頬に赤い血がぽたりと落ちた。

——ああ、傷口を止血しなければ。汚れた血でロイドを穢してしまう。

だが頭が回らない。



いつもなら容易にできる天使体の操作が今はまったくできなかった。
「……無事か？」
クラトスの問いかけにロイドが瞼を瞬かせる。
ロイドは生きている。それならば大丈夫だ。
「……なら、いい」
クラトスは微かに笑み、そのまま力なく崩れ落ちた。
「……う……うわぁ——————!!」
暗い意識の中、遠くでロイドの悲鳴が聞こえる。
「俺は……俺は何を信じたらいいんだ!?」
やはり傷つけてしまった。知らせるべきではなかった。
何度も深淵に沈み込みそうな意識を必死に保ちながら、クラトスは自らの過去が明かされたことを悔いた。
「嘘だ！　クラトスが……俺たちを裏切ってコレットを苦しめたあいつが……俺の父さん……!?」
ロイドの悲痛な叫びに、聞き覚えのある声が重なった。
「……こらぁ、ロイド！　俺を失望させるなよ！　おまえが今まで言ってたことは全部嘘っぱちか！　立場も人種も何も……関係ないんだろ。心は同じなんだろ。絶望するな！　たかだか親父程度のことで、ぐらついてるんじゃねぇっ！」

「ロイド、自分を見失わないで！　誰の血を引いていてもどんな生まれだったとしてもあなたはあなたでしょ！」
それは神子の声だ。
い、い、い、世界を再生すると偽りの責務を与えられた宿命の神子たちの声。
クラトスは身を捩り、必死で起き上がろうとした。
「俺は……俺……？」
神子の言葉にロイドが小さく反応した。
——そうだ、ロイド。おまえはおまえだ。
クラトスは右腕で必死に大地を掴み、上半身を引き起こす。ぼやけた視界には、ロイドに駆け寄る二人の神子の姿があった。
「……それにクラトスさん、ロイドを助けてくれたんだよ」
コレットがそっとロイドの手を取り、クラトスのほうへ押しやる。ロイドはこちらを振り返ると倒れ込みそうな身体を支えてくれた。
「……ああ、そうだな。ありがとうクラトス」
ロイドは溢れそうな涙を必死で堪え、クラトスの顔を見下ろした。クラトスはロイドに言葉をかけようとしたが、唇がうまく動かなかった。
「でもやっぱり俺はあんたを父さんとは呼べない」

――ロイドらしい物言いだ。
クラトスは心の中で笑った。
「あんたの……クルシスのやり方は嫌なんだ。今までたくさんの人が死んだ。シルヴァラントやテセアラの人もレネゲードや……クルシスやディザイアンも。みんな犠牲になった人たちだ。でも目的のためには犠牲が出てもいいなんて思えないよ。死んでいい命なんてない。死ぬために生まれる命なんてあっちゃいけないんだ。俺はコレットを助けるために世界を見殺しにはしない。最後の最後までみんなが生きる道を探したい」
それでいい。ロイドはそれでいいのだ。
例えそれが叶わぬ夢であっても。
存在し得ない幻であっても。
希望として掲げ続ける。
それができるのがロイドという少年なのだとクラトスは知っている。だから全てを託したかった。
――私がこのまま死ねばオリジンが甦る。今こそそのときではないのか。
クラトスが全身の力を抜いたまさにその瞬間、冷ややかな笑い声が聞こえてきた。
それはその場を――クラトスを凍り付かせる。
「素晴らしくクサい演説だね。ごくろうさま」

——何故だ!?

クラトスはままならない身体を捩りながら、声のしたほうに視線を向けた。そこにはユグドラシル——ミトスが立っている。

それはまさに衝撃であった。ミトスは救いの塔でロイドたちを待ち受けていたと聞いていた。もはやアルテスタの下には戻るまい——クラトスはそう思い込んでいたのだ。

ミトスは歪んだ笑みを浮かべると、続けざまに魔術を放ち、ユアンたちレネゲードを一掃した。二人の神子もその余波を受けて岩壁に吹き飛ばされてしまう。

「ボクが気付いてないとでも思った？　残念だったね。クラトスにはプロネーマを監視につけてたんだ。ロイドたちに情報を流していたみたいだからね」

「くそ……っ！　ユグドラシル！　おまえがどうしてここに……」

ミトスの降臨を知らなかったユアンが、茫然自失の呟きを漏らす。その言葉がロイドにもう一つの真実を告げた。ロイドはこぼれ落ちそうな程に目を見開き、ミトスを凝視する。

「な、何……っ!?」

「なかなか面白い趣向だったよ。ボクの邪魔ばかりするうす汚いレネゲードが、おまえだなんてさ」

ミトスは倒れ込むユアンの元に近づくと、まるで石でも蹴るように彼の身体を蹴り飛ばした。何度も何度も何度も。

「本当なら殺すところだけど、姉さまに免じて命だけは助けてあげるよ。アハハハハ、ハハ、アハハハハハハ！」

それからは地獄絵図であった。理性のたがが外れたように、ミトスは周囲の人々を攻撃し、持て余し続けていた怒りを発散した。騒ぎを聞きつけて起きてきたアルテスタやタバサ、それにロイドの仲間たちを傷つけたミトスは、あらためて自らがユグドラシルであったことを暴露し、クラトスを連れてその場を去って行ったのだった。

4

クラトスが目覚めたのはウィルガイアにあるクラトスの私室であった。

どうやら命を奪われることなく、クルシスへと連れ戻されたらしい。クラトスを殺せばオリジンが復活してしまうのだから当然の処置ではあった。ハイエクスフィアの生命維持機構の力もあってか、クラトスの傷は大分癒(い)えていた。

私室は外部からロックされており、部屋の外には見張りの兵が立っている。事実上の軟禁というわけだ。もっともクラトスの身に何が起きたのか、詳しいことは説明されていないようだ。兵たちと少し話してみたが、どうも負傷したクラトスが無理をしないように部屋で休ませているという解釈がなされているようだった。

クラトスがウィルガイアに運び込まれてから半日ほどが過ぎている。ユグドラシルは帰還するやいなや、大いなる実りの間へ籠もっているらしい。クラトスたちが立ち去った後、ロイドたちがどうなったのかが気にかかっていたが、それに答えられる者はいない。

――やはり、強引にでもこの部屋を出るか。

クラトスが腰を上げたとき、部屋の外で警備天使が言い争っている声が聞こえてきた。天使たちは感情反応が薄い者が多いため、言い争いなどウィルガイアではほとんど見られない。恐らく外部の者がウィルガイアを訪れているのだろう。

「クラトス様を誰にも会わせぬようにと命じられている」

「私はユグドラシル様のご命令でここに来ています！」

女の声には聞き覚えがあった。

「な、何……。ユグドラシル様だと？　おまえはディザイアン階級ではないか！」

「私はハイエクスフィアの研究を行っていました。そのためにユグドラシル様には目をかけていただいています」

「ケイトか……？」

クラトスが思わず声をかけると、ケイトがさらに言葉を重ねてくる。

「ご覧なさい。クラトス様も私をハイエクスフィアの研究者とご存じではありませんか。そうですね、クラトス様」

その勢いに押されたのか、警備天使が困惑した様子で尋ねてきた。

「クラトス様……。このケイトとか申すディザイアンをご存じでしょうか」

「知っている。恐らくユグドラシル様の計画に関わることだろう。会わせてくれ」

「……では特別に面会を許可します」

私室の扉が開き、ケイトが入ってきた。クラトスはケイトを引き入れると、扉を閉めて、室内の防音機構を立ち上げた。こうしなければ天使の耳に余計な話が洩れてしまいかねない。

「クラトスさん……。ご無事でよかった……」

ケイトが瞳を潤(うる)ませてほっと息をついた。

「ケイト……。レネゲードの元にいたのではなかったのか？」

「ユアンという人が、オゼットまで送ってくれると言って下さったんです。でもクラトスさんが捕まっていると聞いて、私でもお役に立てるんじゃないかと思って、救いの塔まで連れてきてもらいました」

「ゲートキーパーに誰何(すいか)されなかったのか？」

「クルシスのほうは、私がクラトスさんに連れられてここに来たことを覚えていたんです。ですから先程と同じように、ハイエクスフィアの研究者だと言い張って、何とか……」

「大したものだ……」

「いえ……。それよりユアンさんからクラトスさんへ伝言を頼まれています」

「ユアンから？」
「ロイドさんたちのことです。クラトスさんがウィルガイアに連れて行かれてからのことを伝えて欲しいと言われています」
ケイトの話によれば、ロイドたちはそれぞれ怪我の治療を行った後、命の危険があるアルテスタを救うため、腕のいい医者を求めてフラノールへ向かっているとのことだった。ユアンは正体をミトスに知られたために、レネゲードをクルシスから逃がす作業を行っているという。
とりあえずは皆、何とか生きているようだった。
「ユグドラシルはこれからどうするつもりなのでしょうか。ユアンさんは、コレットさんを奪還して、マーテル様を復活させるつもりなのだろうと仰っていました。そうなればもはや手の打ちようがないと……」
「神子の病が治ったのなら、そうなるだろう。だが打つ手がないわけではない」
ロイドが無事ならばまだやれることはある。クラトスは私室の本棚に隠していた銀色の鍵を取り出した。
「それは……？」
ケイトに尋ねられ、クラトスは鍵をそっと握りしめた。
「これはルインのシノア湖に隠したコンテナの鍵だ。そこにアダマンタイトと神木が入っている」

「アダマンタイト……。王立研究院で生成に成功したという……」
「そうだ」
「でも神木は……？　オゼットの辺りは完全に焼け落ちて、神木も残っていないという話でしたけれど……」
「テセアラの王室に納めた分があると聞いたのでな。それを入手した。アダマンタイトと神木、それにアイオニトスという鉱石があれば、逆転の目がある。このことをユアンが知れば、私の考えに賛同してくれる筈だ。しかしアイオニトスはユグドラシルの元にある。今私が入手するのは難しい」
「誰か別の人に頼むことはできないんですか？」
「難しいな……ここに私の味方はいない。ユアンもユグドラシルには近づけないだろう……」
それなりの地位があるか、もしくはユグドラシルに近いものでなければアイオニトスを入手することは難しい。そんな人間がいただろうか。思案を巡らせていたクラトスは、ふとアルテスタの家の前での出来事を思い返していた。
神子ならば――
そう、二人の神子ならば可能ではないだろうか。
そしてこの任務にもっともふさわしい能力を持っているのは――
「ケイト。頼みがある」

「先程の要領で、私を通信室へ連れて行ってもらえないか。……そうだな。ユグドラシルが今大いなる実りの間にいるから、そこに連絡する必要があるとでも言えばいいだろう」

「それでアイオニトスを手に入れられるかも知れないんですね。わかりました」

ケイトは私室の扉を開けると、警備天使を毅然と見上げた。

「クラトス様から、至急ユグドラシル様へ奏上すべきお話があります。大いなる実りの間に連絡を取るため、クラトス様を通信室へお連れします」

「しかし、それは——」

「通信が駄目だというのなら、クラトス様を直接大いなる実りの間にお連れすることになりますよ。それこそ問題になるのでは？　それにこの報告が遅れることで、もしも大いなる実りに何らかの悪影響が出た場合、あなたに責任が取れるのですか」

警備天使は暫し考えた後、自らが同行するという条件でクラトスの通行を許可した。クラトスは頷き、通信室へ急いだ。

ケイトと警備天使を通信室の外に待たせたクラトスは、通信機のコンソールを叩き、神子ゼロスの回線を検索した。しばらくあってから不鮮明なゼロスの映像が立体スクリーンに現れた。

「神子、聞こえるか」

「……なんだよ。アンタか。感動の親子ご対面、感想はいかが？」

相変わらず皮肉混じりの挨拶だが、今はそれに付き合う時間がない。地上ではアイオニトスを発見することはできなかった。ゼロスの協力が必要なのだ。クラトスは早口で言葉を紡いだ。
「時間がない。手短に言う。神子、ロイドのために力を貸してくれ」
「な、何だよいきなり……」
ゼロスが動揺する。クラトスは構わず続けた。
「ロイドが目指す世界の統合には、エターナルソードが必要だ。人間であるロイドがエターナルソードに認められるためには、契約の指輪——エターナルリングがいる。エターナルリングを作るためにはアイオニトスという特別な鉱石が必要だが、今の私ではそれを手に入れることができない。アイオニトスはユグドラシルが保管しているのだ。神子、私の代わりにアイオニトスを手に入れてくれ」
「ちょっ、ちょっ、おいおいおい、一気にまくし立てるなよ。契約の指輪？　それは……」
「詳しいデータを転送する。エターナルリングのことはそれで確認してくれ。頼む、神子よ。これができるのは神子だけなのだ」
暫し間があって、ゼロスが呆れたようにため息をついた。
「なるほどねぇ。読めてきたわ。アンタが世界中をうろちょろしてやがったのは、そのエターナルリングってのを作るためだったのか。だったらどうして最初から……」
「そんなことはどうでもいい。それより神子、頼めるのか？」

「アイオニトスねぇ……。アイオニトスって俺さまが飲まされた変な石だよな。あれで契約の指輪を作る……か。俺に……できるのか……？」
そのとき通信にロイドの声が割り込んできた。
「ゼロス！　こんなところにいたのか！　何、独り言言ってるんだ。おまえ……」
「やべぇ、ロイドだ。切るぞ！」
ゼロスからの明確な返事をもらえぬまま通信は途切れてしまった。
果たして希望は繋がったのか——クラトスが通信室を出るとケイトが眉を寄せてこちらを見つめている。
「うまくいきましたか？」
警備天使を憚（はばか）りながら尋ねるケイトに、クラトスは頭を振った。
「わからぬ。話は伝わった筈だが……」
「もしも不安なら、直接確認したほうがいいのではないですか」
ケイトの言葉に警備天使が睨みをきかせる。
「クラトス様の外出は認められておりません」
「クラトスさん！」
ケイトに強く促され、クラトスは覚悟を決めた。素早く警備天使の背後に回り、彼の武器を奪って昏倒（こんとう）させる。

「フラノールへ向かう。貴女も来るといい。地上に戻せるチャンスは今しかないだろう」
ケイトは大きく頷いた。

5

ケイトと別れたクラトスがフラノールに辿り着いたのは、夜が更けてからのことだった。雪深いこの地方では、ほぼ毎日のように降雪がある。クラトスが街に入ったときも、ハラハラと粉雪が舞い落ち始めていた。
時間がなくてコレットの波動を確認することはできなかったが、はたしてロイドたちはまだこの街にいるのだろうか。何とかゼロスを見つけ出し、気持ちが固まっていないのなら説得しなければならない。
クラトスが宿へ歩を進めると、大通りの奥に見慣れた人影を発見した。
その姿をクラトスが見間違える筈がない。
降りしきる雪の中を傘も差さずに歩いているのは、ロイドであった。クラトスは動揺し、歩みを止める。
クラトスが実の父親だと知って、ロイドは苦しんだ筈だ。これ以上クラトスの口から何を伝えることがあるというのか。

そのとき、クラトスの背後で気配がした。振り返るとノイシュが、クラトスのマントの裾を咥えて引っ張っている。
「私に……ロイドを追いかけろというのか？」
ノイシュはそうだと言わんばかりに鼻を鳴らした。それから再びマントを咥えて、クラトスを街の奥へ連れて行こうとする。クラトスはノイシュの頭を撫でると、小さく息をついた。
「わかった。ロイドを捜そう。それでいいな？」
ノイシュは満足そうに吼えた。
ロイドの居所はすぐにわかった。街の奥にある教会の前で、夜の街を眺めているのが見えたからだ。クラトスは暫し逡巡したが、やがて意を決してロイドの元へ近づいていった。
「ロイド……」
ロイドはこちらを振り返った。その動きはぎこちなく、表情も硬い。恐らく声でクラトスだと気付いていたのだろう。クラトスがロイドの横に立つと、ロイドの緊張が伝わってきた。
ロイドが言葉を探しながら口を開く。
「ずっと……知ってたのか？　俺が、あんたの……息子だって」
「……おまえの家でアンナの墓を見つけたときから……気付いていた」
あのときコレットがロイドの元へ行くと言いださなければ、クラトスはロイドが自分の息子だと確信を得ることはなかっただろう。

「母さんはどうして死んだんだ？　あんたは知ってるんだろ……」
「アンナはクルシスの輝石を体内で作る研究……エンジェルス計画に利用されていた。ミトスの無機生命体による千年王国の構想を知った私はあれと対立し、地上に降りてアンナと出会った」
「……母さんが……実験体……」
ロイドが遠い目をした。今までの旅を——そこで起きた出来事を反芻するように。
「アンナと出会って、私はミトスのやり方を黙認することが世界統合の早道だという考えが間違いだと気付いた。私は人の身でエターナルソードを使える術を模索した」
「……世界を統合するため？」
「そうだ。しかし私もアンナもクルシスから追われていた。世界を転々として、やがて生まれたおまえを育ててきたが……とうとうクヴァルに見つかってしまった」
「……そこで母さんは化け物にされたんだな」
「エクスフィアをはがされたのだ。要の紋がなかったアンナは、体内のマナが暴走し怪物と化した。……あれがおまえを食い殺そうとしたところをノイシュがかばい、あれも一時的に正気に返った」
「……ノイシュが助けてくれたのか」
「ノイシュが怪物に敏感になったのは……恐らくそのときからだろう。ノイシュは怪我を負い、

アンナもまた傷ついた身体で自分を殺すように懇願した」
「……もういい」
クラトスの言葉をロイドが遮ろうとする。
一瞬迷ったが、クラトスはすぐに言葉を継いだ。
「アンナが再び暴走しておまえを狙った。私は……」
「もういい！」
「私は……アンナを殺した」
「もういいって言ってるだろ！」
ロイドが目の前の高台の手すりに拳をぶつける。クラトスはその拳を上から包むようにそっと握った。憤りから震えていたロイドの拳がゆっくりと治まっていく。
酷な話かも知れない。だが、ここまで話した以上、ロイドには全てを知っておいてもらいたかった。命をかけてロイドを守ろうとしたアンナのためにも。
「……その後クヴァルが襲ってきて、おまえとノイシュはエクスフィアごと崖から滑り落ちた。……クヴァルたちを退けて崖を降りたが、残っていたのは怪物に食い散らかされたディザイアンの死骸だけだった。……もう、生きてはいまいとそう思った」
「……それであんたは……またクルシスに戻ったのか」
「私はオリジンの封印そのもの。殺せば封印が解ける以上、ユグドラシルも私を放置できなか

ったのだろう」

「あんたはそれでよかったのか？　ミトスのやり方に反発したのに！」

　クラトスはロイドに背を向け、街灯の下に伸びる自身の影を睨んだ。

「……何もかも、むなしくなった。ミトスはマーテルさえ復活すれば世界を統合すると言っていた。千年王国計画はともかく大地が元に戻るのなら、もうそれでいいと思ったのだ。……おまえに出会うまでは」

「俺……？」

「おまえは……ミトスに似ている。ミトスもおまえのように世界を救おうと必死だった。諦めなかった。虐げられても前を向いていた。マーテルを……殺されるまでは」

「勇者……って呼ばれてたんだよな、あいつ」

　ロイドがぽつりと呟く。

「……そうだ。しかし……おまえとミトスでは決定的に違うことがある」

「種族の差？」

「いや、違う。ロイド、おまえは自分が間違える生き物だと知っている。いや、間違いを犯してもそれを認めることができる。それは勇気だ。ミトスも……私も……それができなかった」

「間違いを認める……勇気」

「我々は過った道を正せなかった。過ちは正せないと諦めた。おまえは諦めなかった」

「……だったら、あんたはもう気付いてるんだろ！」ロイドはクラトスの前に回り込み、両腕を掴んで揺すってきた。「間違いは正せるんだ。今からでもいい。あんたの命を犠牲にしなくてもオリジンを解放できる方法を探して……一緒に……」
戦おう——その言葉を飲み込んで、ロイドは俯いてしまう。
そのとき、クラトスの耳に複数の天使たちの羽ばたきが聞こえてきた。距離はかなり近い。恐らくフラノールの街を取り囲んでいるのだろう。羽ばたきの音が聞こえるということは物理翼を持つ下級天使たちだ。ウィルガイアの警備天使が目を覚まして追っ手を派遣したのかも知れない。
クラトスはロイドの手を振り払い、街の外を目指して歩き出した。
「クラトス！　どこへ……」
「……ユグドラシルをこのまま放置するな。奴は……いくらでも命を犠牲にできる。コレットを奪われる前に……ユグドラシルを……ミトスを止めてくれ」
クラトスはそれだけ絞り出すと、ロイドが追ってこないようにマナの羽を広げて一気に街の外を目指した。
空を滑空し、フラノールの外れに降り立つと、クラトスの周囲を天使たちが取り囲む。彼らの奥にはプロネーマが控えていた。
「……クラトス様。捜しましたぞえ」

「プロネーマか」
「ユグドラシル様のお慈悲もあって、ご自身のお部屋に控えていただきましたが、このような暴挙に出るのならばこちらも甘い態度は取れませぬぞ」
「私を殺すとでも言うのか？」
「……殺せるものならとうに殺しておるわ。四大天使の立場を利用し、ユグドラシル様のご威光をかさにきての度重なる裏切り行為。はらわたが煮えくりかえる思いじゃ」
プロネーマが天使たちに号令を下した。彼らはクラトスに捕縛用の光輪を取り付けた。ここで暴れてはフラノールにいるロイドたちに迷惑がかかる。クラトスは大人しく彼らに連行された。

6

クラトスはもう随分長い間待ち続けていた。
待つことに慣れ、無為に時が過ぎることを何とも思わなくなっていた。
その筈であった。
だが今のクラトスに、時は残酷なほど緩やかだ。
フラノールから連行され、ウィルガイアの監獄に入れられてから、かなりの時間が過ぎ去っ

た。だがウィルガイアの様子を窺う限りでは、大いなる実りの間に何かが起きた気配はない。

恐らくゼロスは、神子コレットを拐かすように密命を受けている筈だ。そこでコレットを連れて行くと見せかけて、ユグドラシルの元へ行ければアイオニトスを手に入れる機会が作れるだろう。少なくともゼロスならばそう算段する筈だ。

もしこの計画をゼロスが実行すれば、クルシスは蜂の巣をつついたような騒ぎになるだろう。仮にコレット救出のためにロイドたちが動けば、クルシス側も迎え撃つ必要がある。そうでなかったとしても、ゼロスがアイオニトスを奪って逃げれば、クルシス側にはそれなりの混乱が発生する。いずれにしてもクラトスの元に何らかの報告が来る筈であった。クラトスは捕らえられているとはいえ四大天使の一人であり、クルシス全体に対する命令権を有しているのだから。

そうしてどれほどの時間が過ぎただろうか。

檻の中で待つクラトスの元に伝令天使が訪れた。

「クラトス様！　大いなる実りの間に賊が侵入し、アイオニトスを奪って逃走。現在ユグドラシル様と交戦中とのことです。お側におりましたディザイアン階級のプロネーマは既に死亡したとのこと。ただ今親衛隊を向かわせておりますが、到着まで時間がかかります。ウィルガイアから地下の大いなる実りの間へ続く転送装置が使えれば、すぐにユグドラシル様をお助けできるのですが、あそこは――」

「四大天使にしか使えない転送装置――そうであったな」
「は、はい。このままではユグドラシル様が危険です。どうか大いなる実りの間へ赴き、ユグドラシル様をお助け下さい」
伝令が牢屋の鍵を開いた。クラトスは伝令に背を向けると無言で牢を出た。
伝令の天使にかける言葉をクラトスは持ち合わせていない。クラトスが大いなる実りの間に向かうということは、ユグドラシルに反旗を翻すということなのだから。

大いなる実りの間にクラトスが足を踏み入れると、辺りは戦いが起きているとは思えないほど静まりかえっていた。
いや、良く耳を澄ませば、苦しげな息遣いが、ひんやりとした空気を伝わってクラトスの耳元まで届いてくる。クラトスは声のするほうへ――大いなる実りが安置されている広間へ歩を進めた。
「……そんな。ボクが負けるわけがない……。姉さまと……帰るんだから……」
途切れ途切れの言葉はユグドラシルのものだ。その息遣いでクラトスは悟っていた。ユグドラシルの命が果てようとしていることを。
「……終わった」
ロイドの言葉で、クラトスは顔を上げた。そして大いなる実りの下に集ったロイドたちへ歩

み寄る。
「それはどうかな」
クラトスが現れたことに、ロイドは動揺したようだった。それは突然だったためか、それともクラトスが自身の父親であるという事実を知ってしまったためなのか。或いは両方なのかも知れない。
「まだ世界は引き裂かれたまま。大樹も発芽していない。何が終わったのだ？」
クラトスの問いに、ロイドは答えなかった。代わりに決意の表情でこちらを仰ぎ見る。
「ちょうどいい。あんたに聞きたかった。あんたはミトスの何に共感したんだ？　どうしてオリジンの封印に協力したんだ？」
ロイドは全てを知ったようだ。この世界がどのようにして創られ、そしてどのようにすれば救えるのかを。もうその瞳にイセリアで出会った頃の無邪気な光はない。だが代わりに、未来を切り拓く意志の光が宿っている。クラトスはその視線を直視できず、ふっと顔を背けてしまった。
するとクラトスの視線の先に、傷つき薄汚れてしまったユグドラシルの身体が横たわっていた。
どこまでもこの世界を愛し、人を愛し、そして裏切られてしまった少年が辿り着いたのは、嘘で塗り固めた平等の世界だった。

人もエルフもハーフエルフも、全てが天使になればいい。
そうすれば差別は失われる。
ユグドラシルが本心からそれを信じていたとは思えない。だが一つの指針にするつもりではあったのだろう。
その極端なまでの世界を構築させてしまったのは、マーテルでありユアンでありクラトスであった。誰かがどこかでミトスを止める事ができれば、彼の生き方は変わっていたのかも知れない。
オリジンの封印のときも——
あれが一つの分水嶺(ぶんすいれい)だったのだろう。
些細(ささい)な、でも大きな誘惑に、クラトスは打ち勝つことができなかった。そしてそこから重ねた様々な間違いに気付きながら、正すことができなかった。
「ミトスは……私の剣の弟子であり、私のかけがえのない仲間だった。それで……十分ではないか？」
「仲間だったら、そいつのしていることがどんな酷いことでも許すっていうのか！」
ロイドの言葉は正論だ。正論は正しいが故に美しく、厳しい。
「……これ以上話すことはない。オリジンの封印を解きたければ私を倒すがいい」
「クラトス！　待て！」



「……オリジンの封印の前で待つ」
クラトスはそれだけ絞り出すと、きびすを返した。
ロイドの制止の声を背中で断ち切って。

救いの塔から外に出たクラトスを待ち構えていたのはユアンだった。クラトスが驚くと、ユアンは肩を竦めた。どうやらロイドたちに助力するためにここへ来ていたらしい。敵対したり援護したり忙しいものだと思ったが、それはクラトスも同じであった。
「終わったのか？」
ユアンの問いかけにクラトスは苦い顔になる。
「……終わりがミトスの死を指すのなら、終わったと言っていいのだろう」
「そうか……。ミトスは……逝ったのか……」
クラトスは脳裏に刻み込まれたユグドラシルの亡骸を思い起こす。
「ミトスを倒したのはロイドたちだが、滅びの道へ誘ったのは我らだ」
「そうだな。マーテルを失ったあのとき、私もミトスもおまえも、未来に絶望した。誰もミトスを止めなかった。私たちは気付くのが遅かったのだな」
ユアンは救いの塔を見上げた。この先にウィルガイアが――デリス・カーラーンがある。この塔はミトスの幻想の塔だ。

「ミトスはやり直すことを良しとはしなかった。マーテルへの四千年を経た思慕が、それを許さなかったのだろう」
クラトスもその言葉に頷く。ユアンは頭を振ると、クラトスに向き直った。
「一つ聞きたい。おまえはこれからどうするつもりだ？」
「私にはまだやるべきことがある」
「やるべきことだと？」
「私はミトスを救ってやることも、共に堕ちてやることもできなかった。引導を渡すことすらロイドに任せ、ここにいる」
「それは私も同じだ」
「おまえはマーテルの言葉を守ろうとした。私とは違う。私は過去と決別しなければならない。そうしなければ、前に進むことも消えることも叶わぬ」
「……死ぬつもりか」
オリジンの封印がある以上その結末は不可避だ。クラトスは小さく頷いた。
「しかしおまえはロイドにエターナルソードを使わせようとしていたのではないのか？　おまえが死んだら誰が契約の指輪を与えるのだ」
「必要な物は用意できた。指輪の製造方法はおまえも知っているだろう。それにおまえは私を殺そうとしていたのだぞ」

ユアンは顔を歪めて視線を逸らせた。
「そのとき最善と思うことをしてきたまでだ」
「私も今はそうしている」クラトスは自らの両手に視線を落とし、そこに染みこむ見えない血の染みを睨み据えた。
「……この四千年で、星の数ほどの人々がエクスフィアの犠牲となった。恐らくミトスは、人類史上もっとも多くの人間を殺した存在だろう。私の中には、そのミトスの理想を信じた自分がまだいるのだ。私も大量殺戮を担った咎人だ」
「おまえはロイドの理想に共鳴したのではないのか？」
「一度はミトスを信じた私が、ミトスが倒れたからといってロイドの元へ行くのは虫のいい話だろう。咎人であることは変わらないのだ。ロイドがミトスを倒したように、私も倒されねばならない」
ユアンが呆れたように息を吐いた。
「ロイドと戦うのか。自分の息子に父殺しの咎を負わせることになるのだぞ」
一瞬心が酷く軋んだ。そのことは何度も考えた。それでも——クラトスにはこの結論しか導き出せなかったのだ。我ながら愚かな父だと情けなくなる。
「……私はロイドの父親だが、同時に四千年前からのミトスの同志でもあるのだ。私は……過去の人間だ。過去を精算し、未来を預ける義務がある。ロイドと共に未来を歩むのは、私では

もらう」

「……強情な男だ。おまえがそうと決めたのなら、好きにするがいい。……私も自由にさせて
なくロイドの仲間たちでいい」

「老兵は去るのみ、か」

「我らは生きすぎた。違うか？」

四千年——それだけの時間を生きた人間などいない。

あまりに不自然なものは、やはり歪みを生むのだ。

ユアンはそう言うと、遠くに控えるレネゲードたちの元へ歩き出した。

「ユアンよ。私がオリジンの前で命を落とした後は、ウィルガイアの天使たちを頼む」

ユアンは背中を向けたまま、任せておけと言いたげに右手を挙げた。

これでクラトスに思い残すことはなくなった。

彼の心は既にオリジンの元へと飛んでいた。封印が解けたとき、あの気高き精霊王はロイドを新たな資格の持ち主として認めてくれるだろうか。

——恐らく認めてくれるだろう。

だからこそ、クラトスはロイドに全てを託すと決めたのだから。

終章

トレントの森はひっそりと静まりかえっていた。異質な者たちが森を訪れているためだ。
この森には精霊王オリジンが封じられている。クラトスはオリジンの封印の前で、ロイドたちを待ち受けていた。
イセリアでの予期せぬ再会によって、クラトスとロイドの道は深く混じり合うことになった。ときには師と弟子として。ときには敵として。ときには目的を一つにする同志として。
そうして父と子としてまみえた今、二人は最後の戦いに赴こうとしていた。
クラトスは森の奥から現れた息子を静かに見つめた。
「……来たか」
「どうしても戦うのか」
ロイドが尋ねかけてくる。彼の後ろには七人の仲間が控えていた。対してクラトスの後ろには誰もいない。彼の仲間は失われてしまった。その結果を導いたのはクラトス自身だ。クルシスの一員として、古代大戦の英雄として、新しい時代を築く若者たちに未来を託す。それがクラトスのけじめだ。
ここに至るまで数え切れない人々が、クルシスの行いによって命を落としてきた。

　ここでクラトスが戦ったからといって、何かが変わるわけではない。
　結局、ここでロイドと戦うことは、クラトスの感傷に過ぎないのだろう。だがそれでもロイドがクラトスを――父を越えることで、未来が過去に勝つ。クラトスはそう信じたかった。
「……今さら何を言う。中途半端な覚悟では……死ぬぞ。オリジンの契約が欲しくば私を倒すがいい」
「それが……あんたの生き方なのか」
　ロイドは予期していたように微笑(ほほえ)み、仲間たちを振り返った。
「みんな。ここは俺にまかせてくれ」
「……一人で大丈夫なのか？」
　クラトスはゆっくりと剣を構えた。ロイドもそれに呼応して、双剣を抜く。
「……あんたが過去と決別するなら、それに引導を渡すのは……息子である俺の役目だ！」
　ロイドとクラトスがそれぞれに信じる『救済』と『再生』。その完成を目指して、親子は刃と刃を重ね合わせた。
　全てを終わらせ、新しく始めるために。

END

テイルズ オブ シンフォニア ユニゾナントパック



機種●	プレイステーション3用ソフト
メーカー●	バンダイナムコゲームス
ジャンル●	RPG
定価●	パッケージ版／ダウンロード版:各6,980円
発売日●	2013年10月10日

　不朽の名作『テイルズ オブ シンフォニア』と『テイルズ オブ シンフォニア -ラタトスクの騎士-』の2作品が１本のソフトとなって甦る!!　一方の世界が繁栄すると一方は衰退するという、因果関係にあるシルヴァラントとテセアラ。この2つの世界を舞台に主人公のロイドたちの過酷な旅が描かれる……。新規秘奥義カットインやシリーズキャラクター衣装など、多数の追加要素を搭載。10年の時を経てもなお、色あせることのない感動の物語がＰＳ３で楽しめます。

◉実弥島巧著作リスト

「真・女神転生　ＮＩＮＥ」（富士見ミステリー文庫）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■

あて先

〒102-8584 東京都千代田区富士見1－8－19

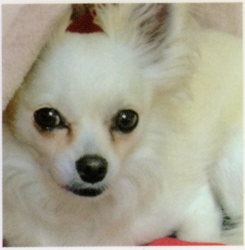
アスキー・メディアワークス 電撃ゲーム文庫編集部

「実弥島巧先生」係

「ユキヤ先生」係

■


DENGEKI BUNKO



実弥島巧（みやじまたくみ）

できることなら３６５日寝ていたい、ぐうたら人間。
４年に１回、うるう年の１日だけ働く人生が憧れです。
将来はゲームのコントローラーを握りしめて、エンディングを見ながら眠るように息を引き取りたいなぁ。
だめ人間だもの。

【電撃ゲーム文庫作品】

テイルズ オブ シンフォニア　贖罪のクラトス

本文イラスト/ユキヤ

本文イラストを担当させていただきました。クラトスや敵側のキャラたちの心境を少しでも表現できていたらいいなと思います。内容、イラスト共々楽しんでいただけると幸いです！

9784048660501

1920193006001

ISBN978-4-04-866050-1
C0193 ¥600E

ASCII MEDIA WORKS
アスキー･メディアワークス

KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価: 本体600円
※消費税が別に加算されます

